

地域交流センター年報

令和元年度

VOL.22



三重県立看護大学
地域交流センター

巻頭言

日頃より、三重県立看護大学地域交流センターの活動にご理解、ご支援賜り、厚く御礼申し上げます。地域交流センター年報令和元年度第22号の発行にあたりましてご挨拶申し上げます。

平成29年度に開講しました認定看護師教育課程「認知症看護」は、今年度3期目となり、令和2年度の第4期生の修了をもって4年間の教育課程の幕を閉じることとなりました。認知症看護の質向上、認知症への対応力向上、認知症への理解の拡大という地域課題解決に向け、医療機関、三重県、本学が緊密に連携し、認知症ケアの質向上を目指して戦略的に取り組んできた成果が実を結びつつあります。

今年度の看護研究支援のなかでも、「看護研究の基本ステップ」は遠隔配信を実施し、地理的条件により来学が困難な地域の看護職者に受講の機会を提供しました。ステップアップ講座として具体的な研究方法を学べる「ハウツー看護研究」も2年目となり、好評を得ています。受講者のニーズにより適った内容となるべく工夫を重ねているところです。

「公開講座」の第1回は東海体育学会様、第2回はみえ女性スポーツ指導者の会様・公益財団法人三重県体育協会様との共催により、第3回はNHK厚生文化事業団中部支局様・NHK津放送局様と本学が主催し、多くの県民の皆様にご参加いただきました。

今年度には、三重県公立大学法人評価委員会による平成30年度業務実績に関する評価が示され、項目別評価において「地域貢献に関する項目」が2年連続の「S」評価となりました。第2期中期計画（平成27年度～令和2年度）の実績見込みについても評価が行われ、順調な進捗であることが確認されました。今年度より、宮崎つた子前地域交流センター長の後任を引き継がせていただきましたが、地域の保健・医療・福祉の向上に寄与すべく、歴代の地域交流センター長とともに本学教職員が一丸となって取り組んできた長年の地域貢献活動の実績に高い評価をいただけたものと感謝いたしております。

令和2年度は第2期中期目標期間の最終年度となります。今回の評価結果を踏まえつつ、地域社会との連携・協働を深め、地域貢献活動の一層の充実を図り、令和3年度から始まる第3期中期目標期間に順調につなげていけるよう努力してまいりたいと存じます。

令和2年3月

地域交流センター長
永見桂子

目 次

・ 巻頭言

I. 教員提案事業

1. みえ保健・看護力向上支援事業

1) 看護に役立つものづくりシーズ発掘	1
2) ケアする人のためのセルフケアのつどい	3
3) 卒後1年目を対象としたフィジカルアセスメント研修会	5
4) 実践につながるフィジカルアセスメント	6
5) 認知症看護認定看護師（DCN）セミナー	8

2. 他機関との連携による県民の健康増進事業

1) 地域の健康づくり支援事業	9
2) 在宅で障がいのある子どもを養育する家族のピア・サポート事業	11
3) みかん大認知症カフェ	14
4) 健康づくりのための運動指導講座	16
5) 子ども達に「自分のからだ」を伝える事業	18
6) 医療施設に広げよう看工連携による特許の輪！	21
7) みんなでリカバリー	23

3. 地域住民とのふれあい推進事業

1) 災害に備えて	25
2) アイルランドの伝統料理を作ろう	27
3) 英語で話そう	30
4) ケアめぐる哲学カフェーおたがいの立場をこえて話し合おうー	32
5) シネマで倫理学	34
6) いきいき体操と美肌作り	36
7) よりみちカフェ	38
8) 災害時に母子の命を守る工夫を考えよう	40

II. 卒業生支援事業

1. 卒業生のきずなプロジェクト	43
2. 卒業生支援プロジェクト	47

III. 受託事業

1. 新人助産師の臨床実践能力育成のための研修体制構築	49
2. 周産期における母子・家族支援のための臨床助産師の看護実践能力育成	53
3. 認知症対応力向上研修	57

IV. 認定看護師教育課程「認知症看護」

1. 認定看護師養成	59
2. 認定看護師フォローアップ研修	61

V. 地域交流センター企画事業

1. 講師派遣

- 1) 出前講座 63
- 2) その他の講師派遣 71

2. 看護研究支援

- 1) 看護研究の基本ステップ（遠隔配信） 75
- 2) ハウツー看護研究 79
- 3) その他の看護研究支援 83

3. 公開講座 87

VI. 連携

- 1. 連携協定病院 91
- 2. 看護管理者意見交換会 92

VII. その他

- 1. 情報発信・広報活動 95
- 2. 各種講座案内と申込書 99

・編集後記

I．教員提案事業

1．みえ保健・看護力向上支援事業

1) 看護に役立つものづくりシーズ発掘

担当者：斎藤真、大西範和、大平肇子、犬飼さゆり、長谷川智之、市川陽子、岡根利津、田端真、竹村和誠、佐々木弘恵、阪上由希子、木田衣咲

【事業要旨】

本事業は、今後需要が拡大することが予測される看護ケア用品の開発とその知的財産の取得を目的に本学教員のアイデアを発掘、試作品の製作や有用性の検証を行うものである。本学は平成 27 年度から（独）工業所有権情報・研修館の産学連携知的財産アドバイザー派遣事業に採択され、平成 30 年度からは新たな派遣事業制度の下、知的財産の積極的な創出を展開してきた。本事業では平成 30 年度に引き続き、教員や大学院生らによる「看工連携ブレインストーミング」を定期的開催、知的財産のシーズ発掘を行った。

【地域貢献のポイント】

本事業の推進は、本学の教員や大学院生の持つ知的財産のシーズ発掘や試作品から製品開発、販売に至るまでの地元企業との産学連携をすることも目的としている。したがって、知的財産のシーズ発掘は地方創生の観点からも有用性の高い地域貢献事業である。

I. 活動計画

看工連携ブレインストーミングを月 1 回開催し、シーズの発掘を行う。

II. 活動の結果と評価

活動は「看工連携ブレインストーミング」を月 1 回開催した他、1 月のブレインストーミングでは地元企業からの参加があり、看護分野における企業の技術の応用について検討した。

＜ブレインストーミングの話題は以下の通り＞

第 1 回：点滴スタンドおよびカーテン開閉に伴う静音設計について、小児酸素投与拒否に関する工夫について等（4/24）。

第 2 回：アドバイザーによる酸素投与に関する特許申請状況報告、災害時搬送の工夫、尿検査用容器の設計について等（5/15）。

第 3 回：アドバイザーによる搬送の実例および尿検査用容器に関する特許申請状況報告、車いすからトイレへの移乗方法について、足で扉を開閉する方法について。老人施設における杖置きについて等（6/27）。

第 4 回：アドバイザーによる車椅子移乗および杖置きに関する特許申請状況報告、簡易採血台について、トイレトペーパーホルダーの設置場所と切りやすさについて等（7/24）。

第 5 回：アドバイザーによる採血台およびトイレトペーパーホルダーに関する特許申請状況報告、尿検査用容器について（第 2 回の続き）等（9/11）。

第 6 回：アドバイザーによる尿検査用容器に関する特許申請状況報告、手術用医療

機器残遺予防について、臥床患者の体重測定について、複数の点滴投与時の点滴スタンドの設計について、ベッド柵の設計について等（10/9）。

第7回：アドバイザーによる手術用医療機器遺残予防、ベッド柵および点滴スタンドに関する特許申請状況報告、ストマ患者用の衣服固定具について、振戦のある人の食事用自助具について等（12/18）。

第8回：地元企業から自社製品の説明と看工連携への参加（パネフリ工業（株）、（株）大西縫工所）等（1/20）。

第9、10回を2、3月中に開催する予定である。

＜評価＞

定期的にブレインストーミングを開催し、様々なニーズおよびシーズを発掘することができたことから、有益な事業であったと評価する。

Ⅲ．今後の課題

知的財産となり得る案件は具体化させる。また、これまでに提案されたブレインストーミングの内容について再度検討を行う。

2) ケアする人のためのセルフケアのつどい

担当者： 鈴木聡美

【事業要旨】

医療従事者や介護従事者、さらには家族介護者などのケア提供者を対象とし、ケアにまつわる思いを職種や立場の壁をこえて語り合ったり、ハーブを使ったリップクリーム等を作成するワークショップの開催を通して、ケア提供者が自分自身をケアできるような場をつくる。

【地域貢献のポイント】

病院や施設等の職場内では、ケアの方法や評価について話し合う機会は多くあるが、ケア提供者自身の主観的な思いを表現するような場はあまりない。本事業では、ケア提供者が職種や立場をこえてケアにまつわる思いを語り合うことで自分自身をケアし、そのことによりケア提供への活力を得ることに貢献できると考える。

I. 活動計画

< 数値目標 >

参加者 10 名以上のワークショップを 1 回以上開催する。

< 実施計画 >

本事業ではケアする人のセルフケアにつながるワークショップを実施する。ワークショップは、①毎日の生活に取り入れられるいやしのアイテムとしてハーブを使ったリップクリーム等を作成する、②ケアにまつわる思いや悩みを語り合う、という二つの内容を含むものとし、1 回につき 2 時間程度とする。ワークショップは開催希望のあった施設内で行う。

II. 活動の結果と評価

< 結果 >

本年度は 2 回、ワークショップを実施した。1 回目は令和元年 6 月 30 日（日）に A 病院において開催された認知症カフェで、リップクリームやハンドクリームを制作するブースを開設した。参加者は高齢者を介護している家族や A 病院のスタッフを想定していたが、ケア提供者だけでなく、A 病院に入院している高齢者の参加もあった。約 2 時間の開催時間中、5～6 人ずつでリップクリームやハンドクリームを作成し、入れ替わりながら合計 30 名程度の方の参加があった。2 回目は令和元年 11 月 3 日（日）に B 病院において開催された認知症カフェで、ワークショップのブースを開設した。1 回目と同様に、ケア提供者だけでなく、病院の入院患者の参加も多く、2 時間半の開催時間中に約 30 名の方の参加があった。



写真：ワークショップの様子

＜評価＞

本年度は、病院で開催される認知症カフェにおいてワークショップのブースを開設する方式で事業を実施した。ワークショップは2回開催することができ、開催数、参加者数ともに数値目標を超えることが出来た。認知症カフェは認知症当事者やその家族介護者、地域住民、専門家が気軽に交流できる場として、また、相互理解を深めたり、悩みを共有したり相談できるような場として、近年注目されているものである。本事業はケア提供者のセルフケアを目的としており、認知症をケアしている人が集う可能性のある認知症カフェと協同することは、参加者のニーズにも合致しやすく、実施のスタイルとしては合目的的であった。

本年度のワークショップの特徴としては、ケア提供者だけではなく、当事者の参加が多かった点にあるが、支援者と非支援者の隔たりを超えた交流を目指す認知症カフェのあり方からすると当然のことであると考ええる。しかしながら、リップクリーム等の製作という手先を使う作業においては、どうしても当事者に対して支援が必要となり、ケア提供者が支援者という立場を超えることは難しい。当事者も含めたワークショップだけでなく、ケア提供者のみで開催する時間も設けなければ、本事業の目的を達成できないことから、開催方法にはさらなる工夫が必要であると考ええる。

Ⅲ．今後の課題

認知症カフェとの協同というスタイルは次年度も施設からの要望があれば継続したい。その場合、当事者とケア提供者がともに参加出来るワークショップのスタイルとともに、ケア提供者のみでゆっくりと語り合える場も提供できるような開催方法を検討したい。

3) 卒後1年目を対象としたフィジカルアセスメント研修会

担当者：◎菅原啓太、鈴木聡美、佐々木弘恵、阪上由希子、木田衣咲、白石葉子

【事業要旨】

卒後1年目の看護師を対象として、フィジカルアセスメントの観察力と技術力を高めるため、研修会を年1回実施する。その際、指導的立場の看護師を対象として、研修会の見学者を募り、フィジカルアセスメント教育の実際を知ってもらう。また、受講者および見学者が、研修後もフィジカルアセスメントの学習および研修会を効果的に行う事ができるように、学習に活用できるモデル教材の基本的な使用方法を学ぶ機会を作る。

【地域貢献のポイント】

新人看護師は、フィジカルアセスメントの実践経験が少なく、患者の身体的状態を的確に把握するのが困難であることが多い。今年度実施する研修会を通して、患者の状態把握の基本となる、呼吸器を中心としたフィジカルアセスメントの知識や技術力、判断力を高めることが期待できる。フィジカルアセスメントの能力向上は、質の高い看護実践を行うことにつながる。また、シミュレーションモデルを活用した学習方法について、受講生が体験したり、新人教育に携わる看護師が見学したりすることで、受講後に本学の教材を活用した現任教育を行ってもらうきっかけとすることができる。

I. 活動計画

年1回、研修会を開催し、受講生6名以上、見学者1名以上を目指すことを目標とした。

II. 活動の結果と評価

1. 日時・場所：2月1日（土）13:00～16:00 三重県立看護大学 実習室2

2. 参加者（看護師）

臨床経験1年目12名（本学卒業生1名）、1年目以外1名、見学者1名（新人教育担当）

3. 内容と評価

講義・グループワークでは呼吸器系の解剖生理学、体表解剖学の基礎を学習し、演習では、参加者の体やPhysiko・ラングⅡを用いたタスクトレーニングや、SCENARIOを用いたシミュレーショントレーニングを行った。事後のアンケートでは、13名全員が研修会に参加して「とてもよかった・よかった」と回答した。その他、「病院では聞きにくいことなどが詳しく聞ける良い機会となった」、「話し合うことで、普段自分に足りてない観察項目、視点に気づけた」等の意見もあった。研修後には見学者と意見交換を行った。

III. 今後の課題

臨床現場で活用できるよう、タスクトレーニングやシミュレーショントレーニングの時間を増やし、情報収集能力やアセスメント能力が高められる研修内容としていく。

4) 実践につながるフィジカルアセスメント

担当者：岡根利津

【事業要旨】

コメディカルを対象として、実践につながるフィジカルアセスメント能力を身につけることを目標とし、設定したサブテーマに基づいた研修を開催する。チーム医療をおこなう上で必要となる基礎的なフィジカルアセスメントに関する知識や技術について、認定看護師および呼吸療法士の資格を有する多職種の講師が複数で担当し、講義やグループワーク、演習などを取り入れながら、チームアプローチの視点をふまえた学びにつなげる。今年度は、“バイタルサイン”をサブテーマとして研修を開催した。

【地域貢献のポイント】

多くの施設においてフィジカルアセスメント教育は行われているが、三重県では認定看護師や呼吸療法士等の有資格者は偏在しており、教育の機会や内容等は様々な現状である。加えて、フィジカルアセスメントに関する研修が県内で開催される機会は少なく、施設外で学習できる機会も少ない。本研修の開催により、近郊で学習できる機会がもたらされ、さらに多職種の有資格者が講師を担うことで質を担保するとともに、他職種のアセスメントの視点も学ぶことができる。本研修により、個人の能力の向上および多職種間の共通認識の促進がもたらされ、チーム医療の質の向上につながると考える。

I. 活動計画

<数値目標>

初年度のため、提携病院を主として参加募集を行い、30～50人の参加を目標として広報活動を行う。そして、研修後にアンケートを行い、研修内容に対する満足度を調査するとともに、今後のニーズについても調査する。

<実施計画>

- 日時：令和元年10月20日（日）13:00～17:00 多目的講義室
- プログラム
 1. 事例学習で学ぶ -バイタルサイン・ショック・心電図-
 2. 知っておきたい 血液検査・血液ガス分析・画像所見・検査所見の診方
 3. 実践！ フィジカルアセスメント
 4. ワークショップ



研修の様子

Ⅱ．活動の結果と評価

1. 研修の内容

今回は、参加者が多数であったことから、主に講義形式で研修を行った。まず、プログラム 1・2 で必要となる知識のポイントを学習し、共通認識を図った上で、次の 3・4 では事例を用いて実際にアセスメントを行った。事例のアセスメントでは、参加者が相談しながら問題に取り組めており、主体的な学習につながったと考える。

2. 評価

1) 参加者

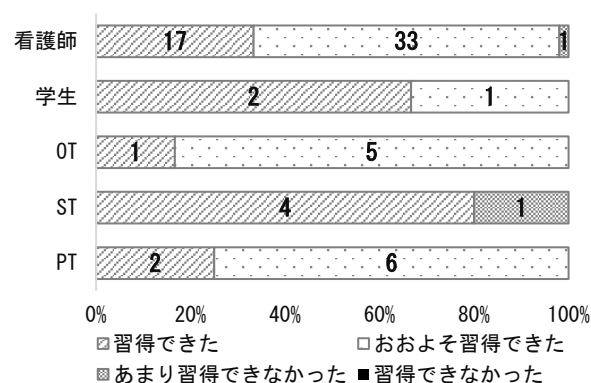
看護師：52 名、理学 (PT)・作業療法士 (OT) および言語聴覚士 (ST)：21 名、学生 3 名、計 76 名の参加があり、数値目標は達成した。参加者の臨床経験年数は、1-3 年目が最も多く、看護師は 48%程度、PT は 25%、OT・ST は 70-80%を占めていた。

2) 広報活動について

研修をどのように知ったかについてアンケートした結果、「研修案内を見た」37%が最も多く、次いで「友人の紹介」27%、「上司のすすめ」27%であった。多くの参加者が提携病院に送付した案内から研修開催に関する情報を得ており、初年度の広報活動として方法は妥当であったと考える。

3) アンケート結果

各職種ともに、「習得できた」「おおそ習得できた」を合わせると、80-100%に達しており、研修の内容等は妥当であったと考える。自由記載からは、事例を何度も用いて学ぶことで理解が深まったという意見も見られた。また、研修時間に関して全体として長いとする意見や、内容を考慮すると短いという意見も見られた。



図：アンケート結果
臨床で活用できる知識を習得できたか

4) 研修のニーズ

今後の研修のニーズとして、人工呼吸管理、急性期・慢性期の呼吸管理、リハビリと栄養、その他の項目から調査した。看護師は人工呼吸管理：48%、PT はリハビリと栄養：38%、OT は急性期・慢性期の呼吸管理：44%、ST は急性期・慢性期の呼吸管理：83%が最も多かった。その他の要望としては、看護師からは、災害時や子供に関連した呼吸ケア、急変時の対応等の要望があり、PT・OTからは、乳幼児や状態が不安定な患者へのリハビリ、回復期や訪問リハ等の要望があった。

Ⅲ．今後の課題

今回のアンケートで得られた意見を参考にし、今後は職種の専門性や経験年数も考慮しながら研修内容を検討していく。また、対象のニーズに応じた研修内容や研修方法についても引き続き検討していくとともに、段階的な習熟につながるような研修の構築を目指していく。

5) 認知症看護認定看護師（DCN）セミナー

担当者：篠原真咲、六角僚子

【事業要旨】

超高齢社会を迎えた日本では、今後認知症者が2025年には5人に1人になると見込まれている。日本看護協会では、特定の看護分野において、熟練した看護技術と知識を用いて看護実践ができ、他の看護職者のケア技術の向上に資する認定看護師を育成することを目的に、認知症看護認定看護師となった看護師が全国に1,300名を超えてあらゆる場で活躍している。その全国の認知症看護認定看護師向けの勉強会、セミナーを実施し、同じ分野の熱意ある認定看護師が共に学び、研究を重ねることによって専門性を高める。

【地域貢献のポイント】

全国から認知症看護認定看護師が毎月三重県に集まることで、三重県の魅力伝達につながる。さらに、専門性の高い看護を提供できる人材を育成することによって地域の保健福祉向上に貢献する。

I. 活動計画

＜数値目標＞毎月開催、その参加者が20名以上を目標とした。

II. 活動の結果と評価

＜結果＞

1. 開催日時：令和元年7月23日（火）、8月29日（木）、9月20日（金）、10月18日（金）、11月11日（月）、12月17日（火）、令和2年1月20日（月）、2月18日（火）、3月3日（火）
2. 実施場所：初回のみ津市アストプラザ、その他は三重県立教育文化会館 会議室
3. 実施時間：13：30～17：00
4. 開催内容：看護研究（文献レビュー）、認知症者の看護展開（グループワーク）、認知症者の倫理、事例検討会、看護研究等
5. 参加者人数：令和元年1月20日までの開催でのべ187名
6. 参加者の概要：北海道や秋田県等の遠方の参加者もいた。三重県内の参加者は、本学の認定看護師教育課程「認知症看護」の卒業生の参加も多くみられた。

＜評価＞

数値目標は毎回上回っており、目標達成と考える。さらに、毎回の参加者のアンケートでは、参加して「とてもよかった」が8割を超え、研究活動においては、参加者がテーマに沿って文献レビューを実施し、現時点で3グループが学会での発表を予定している。

III. 今後の課題

全国の仲間と共に学び、悩みを共有し励ましあう姿は、今後も施設内で活躍する糧となり認知症看護を広く啓発していくことにつながる。その為にも新しい知見を得て看護の現場に還元していくための研究支援は重要な役割があるため、今後も継続していく。次年度は、参加者が主体でテーマを決めていくような支援を検討したい。

2. 他機関との連携による県民の健康増進事業

1) 地域の健康づくり支援事業

担当者：上杉佑也・宮崎つた子・白石葉子・清水律子・田端真・竹村和誠

【事業要旨】

本事業は、地域住民の健康づくりに関する依頼があった市町・地域と協働して、地域生活のなかでの健康づくり、健康管理に関する活動をサポートする事業である。地域で開催するコミュニティづくりの活動の場、地域のイベント、地域住民の交流の場で定期的な健康づくり活動を通して、地域住民の健康意識の向上に寄与する。

【地域貢献のポイント】

本学教員の専門性と地域交流センター所有の機材を活用しながら、地域住民のニーズに対応するとともに健康意識の向上に寄与する。同時に、本学の地域貢献活動への広報的な効果が期待できる。

I. 活動計画（3年計画の2ヶ年目）

- ・ 地域・市町（行政）・団体からの連携希望（1件以上）
- ・ 事業企画・運営・評価方法検討のための学内会議（3回以上）
- ・ 連携団体との合同会議（2回以上）
- ・ 健康チェックの利用者数（延べ20人以上）

II. 活動の結果と評価

<結果>

1. A市の介護施設で行われた地域住民交流イベントへの参加

1) 活動内容

介護施設イベント実行委員から依頼を受け、2019年9月に地域住民との交流イベントにおいて健康チェックを実施した。貧血チェック・体組成測定・骨密度測定・ストレス・血管年齢チェック・血圧測定の5項目を実施し、各測定結果について簡潔に参加者に説明を行った。また、参加者には終了時に本事業の満足度や健康意識向上への寄与の程度、健康ニーズについてアンケート記載の依頼を行った。本学のブースにはおよそ70名程度の地域住民及び施設利用者の参加があった。イベントには教員6名、ボランティアとして本学学生3名、大学院生1名が参加した。

2) アンケート結果

参加者のうち55名より回答が得られた。性別は「男性」31%、「女性」62%、「無記載」7%であった。年代は「80歳代」が49%と最も多く、次いで「60歳未満」29%であった。本事業に対する満足度は「満足」80%、「やや満足」11%、今後の健康づくりに役立ちそうかは「役立つ」67%、「やや役立つ」27%、今後の参加希望は「そう思う」89%であった。

健康維持の為に企画して欲しいテーマや内容として「手軽な運動方法」、「健康維持のための食事や栄養」、「心の健康」といった意見がみられた。要望・感想として

「結果を意識して生活しようと思う」「日頃、気になりがちも、測定できていなかった部分の自分の数値を知ることができてよかった」「今後も継続して欲しい」といった肯定的な意見が多く寄せられた。

2. B町の地域でのイベントへの参加

1) 活動内容

昨年に引き続き、B町役場福祉課保健師からの依頼を受け、2019年12月に地域のイベントに参加し健康チェックを行った。健康チェック及びアンケートについてはA市での活動と同様の内容を実施した。尚、健康教室（コグニサイズを、短時間で参加者に体験してもらう）を実施予定であったが、参加者が想定より多く、途切れなく健康チェックを実施したため、急遽実施を取りやめた。本学のブースには地域住民90名程度が参加した。イベントには教員6名が参加した。

2) アンケート結果

参加者のうち48名より回答が得られ、性別は「男性」19%、「女性」71%、「無記載」10%であった。年代は「70歳代」が31%と最も多く、次いで「60歳未満」・「60歳代」が29%であった。本事業に対する満足度は「満足」69%、「やや満足」17%、今後の健康づくりに役立ちそうかは「役立つ」79%、「やや役立つ」15%、今後の参加希望は「そう思う」92%であった。

健康維持の為に企画して欲しいテーマや内容として「健康チェックの結果に対する改善方法や相談」「運動の教室」等が挙げられた。要望・感想として「初めてだったがますます健康に気をつけて生活したい」「初めてのチェックがあったので、ほんとうに自分の体を知る事が出来てありがたい」「今後もこのような機会を作っていただきたい」といった肯定的な意見が多く寄せられた。一方で、「ストレスチェックの待ち時間がもう少し短いとありがたい」という意見も見られた。

<評価>

連携希望は2件あり、適宜少人数での学内会議は複数回行い、全体としては1回行った。依頼先との会議は、A市では事前会議及び事業実施日に反省会を行い、B町では事業実施日に反省会を行った。遠方の依頼先とは対面しての会議は難しかったが、メールや電話を利用した調整により問題なく事業を展開することができ、実施した健康チェックには延べ160名程度の地域住民の参加が得られた。アンケート結果から参加者の満足度は高く、健康づくりに有用だという評価が得られた。また、「結果を意識して生活をしたい」といった肯定的な意見も聞かれ、本事業は、住民の健康づくりへの意識向上に寄与したと考えられる。

III. 今後の課題

実施場所によっては、参加者の中に足が不自由な方も多く、待合いの工夫やスタッフの協力を得るなどして安全面に配慮する必要がある。学生の参加により、学生自身の学びに繋がっただけでなく、結果説明に時間を割くことや円滑な健康チェック実施を行うことができた。次年度は、積極的に学生ボランティアへの広報を行い、参加した学生にも地域住民と触れ合う機会や地域住民のニーズを知る機会としたい。

2) 在宅で障がいのある子どもを養育する

家族のピア・サポート事業

担当者：上杉佑也・宮崎つた子・中北裕子

【事業要旨】

医療的ケアが必要な子ども（以下、医療的ケア児）を在宅で養育している家族は、様々な困難を抱え心身ともに疲弊している現状にある。同様の体験を持つ家族との交流が、不安や孤立感解消の一助となるが、複数の家族同士が交流を行える場は少ない。本事業は、ピア・サポートの観点から、関係施設、関係専門職同士が連携して家族同士の交流の機会を支援する事業である。

【地域貢献のポイント】

地域の医療機関・専門職との連携及び本学の専門性（研究成果の還元を含む）を活用しながら、家族同士の交流を求めるという養育者にニーズへ対応し、養育者の抱える困難感の軽減に寄与する。

I. 活動計画

- ・ 実施可能事業に関して、企画・運営等の打ち合わせ（学内 3 回程度）
- ・ 医療・福祉・教育関係機関専門職との連携会議（依頼先と合同 3 回程度）
- ・ 交流会の開催に関する準備、当日のサポート（開催 1 回以上）
- ・ 参加者へのアンケート実施・集計（1 回以上）
- ・ 依頼先との反省会（1 回）
- ・ ピア・サポート事業の参加者（5 人以上）

II. 活動の結果と評価

<結果>

1. A 家族会への参加

1) 家族会の内容

医療的ケア児支援のための医療・福祉・行政の多職種団体 A スタッフ（以下 A 団体）と連携して、運営全般にわたり本学が中心的な役割を担いながら、2019 年 10 月に家族会を開催した。当初 9 月に開催予定（6 家族 13 名が参加予定）であったが、台風接近に伴い安全性を考慮し順延とした。参加者は保護者、医療的ケア児とそのきょうだいを含め 10 名の参加があった。サポーターは、本学教員 3 名と A 団体スタッフ 5 名が参加した。本学の学生 5 名がボランティアとして参加し、「家族から直接話を聞くことができ勉強になった」といった意見が聞かれた。

当日は、一部の子ども（きょうだい及び保護者から離れられる医療的ケア児）と保護者で別れて家族会を行った。子どもの対応については、学生が中心となり、スタッフ監督のもと遊戯室で自由に遊んでもらった。家族会は簡単な趣旨説明と開催

の経緯について説明し、全体で自己紹介を行った後、保護者同士で在宅療養の中での思い・不安なこと・生活上の疑問等の話題について意見交換を行ってもらった。

「仕事との両立をどうしているか」「(医療的ケア児に) つきっきりになることできょうだいへの心配がある」「どんなところにお出かけしているのか」「行政からの情報提供が不十分」「移動に用いる車両やその際の医療機器はどうしているのか」「災害時の避難場所や対応はどうしたらよいか」といった意見や質問がだされ、参加者各々が自由に話された。前回参加者からは「前は子どもの状況がまだ落ち着いておらず、見通しのつかない状況だった。参加して他の父親の意見を聞いて衝撃を受けとても刺激になった、家族会の必要性を感じた」といった意見が聞かれた。

2) アンケート結果

アンケートは2名より回収できた。開催場所については、「満足」2名、実施時間については、「ちょうどよい」2名、総合的な満足については、「満足」2名であった。自由記述として、参加にあたっての調整が必要なことや大変だったことについて「きょうだいの用事のために車のやりくりに困った」「少し開催時間が早い」、参加して良かったことについて「メールでのやりとりのみの方と実際にあえて話が出来た」「同じような悩みを共有できた」、感想・意見・要望として「かしこまった雰囲気ではなく、ざっくばらんに話ができただけの方が良かった」「紙芝居やみんなで楽しめるものがあるといい」「室温調整をこまめに行ってほしい」といった意見も見られた。

2. B 家族会への参加

1) 家族会の内容

B 病院に通院中の在宅で医療的ケアを行っている子どもの母親を中心とした家族会（以下：B 家族会）を支援する位置づけで、家族会の代表及び協力団体である病院の医療スタッフと連携して 2019 年 11 月に家族会を開催した。参加者は保護者、医療的ケア児とそのきょうだいを含め 12 名の参加があった。サポーターは、本学教員 2 名と医療関係者 4 名が参加した。本学の学生 3 名がボランティアとして参加し、在宅医療分野の学びに繋がった。

家族会では子どもの経過を含めて自己紹介を行いながら、当時の気持ちなどを自由に語り合った。話の中で「医療的ケアは、内容はみんな違うけど親の気持ちは同じ。一人じゃないよって言ってあげたい」「上の姉が、この子が生まれてから不安定になり、そちらのケアも大変だった」「療育センターに行っていて、いろんな人と関わることで内面的な成長が母子ともできた」といった話が出された。適宜、質問や先輩となる保護者がコメントを返ししながら、参加者が抱えている疑問を自由に話し合った。出された意見として「療育センターは利用した方がよいのか」「今は経鼻栄養ですが、胃瘻にすることによる生活等への影響はどうか?」「訪問看護の利用頻度と入浴はどうしているのか」といった内容がきかれた。また、重症児ときょうだいはスタッフが別室で対応をし、並行して「おひるねアート」を行い、撮影したものを記念に家族にプレゼントした。

2) アンケート結果

アンケートは 8 名より回収でき、保護者の年齢は平均 34.3 歳であった。参加回数

は、初回が3名で複数回参加者もみられた。日時、場所、総合的な満足については、8割以上が「満足ある・やや満足」との回答であった。実施時間については「短い・やや短い」合わせて88%であった。自由記述として、参加して良かったことについて「身近に同じ境遇の方がいることがわかり一人じゃないんだという安心感が得られた」「1人じゃないって言葉がうれしかったし、気管切開はお母さんがしたいと思うタイミングで良いという話を聞いて納得できた」「胃瘻やお風呂のこと、参考になった」、意見や要望として「話すこと、共感すること、涙することが一番必要と思うのでとても大切な場所だと思う」「この会で救われる方がたくさんいると思った」「自分の子どもの病気しか知らないのが現状だったので、他の子のいろんな病気のことを知ることが出来た」といった肯定的な意見が得られた。一方で、「もう少し回数を多くしたい、あと、時間が足りなかった」「もっと話を聞きたかったので、みなでお昼を挟んでもっと話せたらいいなと思った」といった意見もあった。

<評価>

計2回の家族会の開催に携わることができ、延べ22名の参加が得られ、開催に当たり、学内及び関係機関と複数回の会議を行うことで支障なく遂行することが出来た。また、アンケート及び反省会を両家族会とも実施し、次回開催に向けて知見を得ることが出来た。アンケート結果及び参加者の肯定的な声からも、交流を求める家族のニーズを満たし、困難感の軽減に寄与することが出来たと考える。以上より、目標値はすべて満たすことが出来た。

Ⅲ. 今後の課題

A 家族会では、広報の方法についてホームページを用いるなど改善を行ったが、依然として周知が不十分と考えられ、訪問看護ステーションなどの利用者に周知できるように働きかけが必要と考えられる。医療的ケア児やきょうだいも含めて参加できることが、本家族会の意義であると考えられるが、医療的ケア児の過ごしやすい環境を整えることや医療的ケア児自身へのレクリエーションを取り入れることも検討していく。

B 家族会では、回数を重ねるごとに内容が充実している。重症児ときょうだいを完全に別室にしたことで、家族が自由に話すことができ有意義なものとなったといえる。今回は時間が短く、参加者はもっと長時間の交流を求めており次年度に向けて改善していく。



家族会の様子



おひるねアート

3) みかん大認知症カフェ

担当者：大西範和、小松美砂、犬飼さゆり、清水律子、鈴木聡美、松田陽子、菅原啓太、
星野郁子

【事業要旨】

認知症は当事者にも家族などの介助者にも負担が大きいものの、ストレスを軽減する方が限られている。近年各地に認知症カフェが誕生し、集い話す場の有用性が高いことが明らかになっていることから、本学のキャンパスや専門性を活かした認知症カフェを開催する。開催にあたっては、県内の医療機関や運営団体等との連携を図る。

【地域貢献のポイント】

認知症カフェでコーヒーの香りや味を楽しみながら会話をすることで、認知症の当事者・家族や介護者の日常的なストレスを緩和することができる。また、本学の専門性を活かした情報提供等の取り組みができれば、来場者の生活の質向上に寄与できる。さらに、本学学生や認定看護師教育課程の研修生や修了生が参加し交流の幅を広げることができれば、学生、研修生や修了生に認知症やその介護の状況への理解が進み、将来の看護の質向上に寄与できる。

I. 活動計画

＜重点課題＞夢緑祭にあわせて開催するとともに学外の機関でも1件開催する。

＜実施計画＞平成30年度に、学内では、夢緑祭において学祭の模擬店として認知症カフェを開店し、三重県志摩市で開催された志摩市認知症・障がい福祉啓発事業「しまこさん福福（ふくふく）まつり」において志摩医師会が主催する認知症カフェにも共催して出店するなど活動を進めてきた。引き続き夢緑祭において認知症カフェを開くとともに、今年度は、認定看護師教育課程の修了生が勤務する病院などとの連携を図り、カフェを展開する。

II. 活動の結果と評価

＜結果＞

今年度の当事業は、順調に遂行することができた。令和元年6月8日（土）に開催された夢緑祭において、学生と協力し、模擬店として認知症カフェを開店した。近隣の認知症関連団体にチラシを配付して案内し、チラシの持参者には無料でコーヒー一杯を提供し、学祭の一般参加者に対しては一杯100円とした。若年性認知症の当事者4名、介護者、本学認定看護師教育課程の修了生および研修生などを含む約100名の来場者を得て盛況となった。参加者が互いに交流して親交を深めている様子がうかがえ、集い話す場として役割を果たすことができた。特筆すべきは、若年性認知症の当事者の方から、カフェを運営している学生を前に、自身がお書きになった手紙を読み上げたいとお申し出頂いたことであ

る。自分達に対して好意を持って接してくれたことをとても喜び、学生が将来素晴らしい看護職者になってくれるよう祈るという、心揺さぶられるお手紙であった。学生には、忘れ得ぬ思い出になったことと推察している。

また、本学が開設している認定看護師教育課程（認知症看護）の修了生が働く病院の認知症カフェ開催に支援の要望があり、鈴鹿中央総合病院（鈴カフェ：令和元年6月30日）と榊原温泉病院（ぬくぬくカフェ：令和元年11月3日）において認知症カフェの開催を支援した。本学の研修修了生が企画し、病院全体で運営に協力する態勢がとられており、入院患者やその家族、外部からの来訪者が、最初は戸惑いながらも徐々に慣れて、楽しく過ごされている様子がうかがえた。参加者アンケートに回答頂けた15名のうち14名が内容について「良い」としていた。感想には「全部良かった」、「楽しかった」、「大変だったけどありがとう」、「リハビリの先生に連れてきてもらって良かった」、「コーヒーがおいしかったです」、「最初はカフェに来てくれた方々も緊張して見えてましたが、徐々に体操や体験を通して、楽しそうにされている人の姿をみて今後もこのような機会があればよいと思いました」、「今後継続的に開催されるのを楽しみにしています」などが挙げられた。

さらに、令和2年2月16日に四日市市で行われた「第11回全国若年認知症フォーラム in 三重 四日市」で若年認知症の当事者が開催する若年性認知症カフェの開催を支援し、約150名の参加を得た。合わせて学外の活動は3件となり当初に計画した数値目標を上回っている。当事業は学生とも協調して進めており、ボランティアとして延べ27名が参加した。

Ⅲ．今後の課題

事業実施に対する特段の問題は浮上していない。大変喜ばれていることから、認定看護師教育課程の修了生が働く施設など、最終年度も内容や方法などを適宜見直しながら事業を継続する予定である。さらに多くの当事者やその家族が集える場を作ることができれば、幸いである。



図．認知症カフェ開催の様子（学園祭にて）

4) 健康づくりのための運動指導講座

担当者：大西範和、白石葉子、鈴木聡美、菅原啓太

【事業要旨】

健康づくりに運動が役立つことは知られているが、その根拠や適切な実施方法は必ずしも周知されているとはいえない。本事業では、看護や運動生理学等の専門的見地から、コグニサイズをはじめとする運動やスポーツをその指導方法を含めて紹介する講習会を開催するとともに、健康や体力チェック等を要望に応じて実施する。

【地域貢献のポイント】

1. 運動実施者や指導者を支援することで、コグニサイズをはじめとする運動やスポーツの適切な実施方法や実施上の注意点等を広く周知するとともに、運動の必要性の認識や運動に対する動機づけを高め、参加意識の醸成を図る。

I. 活動計画

＜重点課題＞健康づくり運動講座や健康チェックのいずれか1回、バドミントン教室などの実技講習会1回の実施を目指す。

＜実施計画＞当事業は3年目にあたり、これまで、健康づくり運動講座やバドミントン教室などで知識や技術の提供を行ってきた。最終年度も引き続き、他機関と連携して以下の中から事業を実施し、健康づくり運動やスポーツの実技、指導に関わる知識・技術やデータ等の提供を行う。

1. コグニサイズをはじめとする健康づくり運動や運動・スポーツ技術の指導方法、健康・体力の評価方法に関する講演や講習会
2. 健康、体力チェック
3. 初心者から地域のサークル活動等で指導的立場にある方までを対象としたバドミントン教室

II. 活動の結果と評価

1. 平成29年度

鈴鹿市で活動するスロージョギングのクラブより要請を受け、握力、上体おこし、長座体前屈、開眼片足立ち、障害物歩行、6分間歩行について筋力、持久力柔軟性、巧緻性について評価し、結果をフィードバックした。体力の現状把握と運動や生活改善への基礎的データを提供できた。また、8回の「みかん大健康バドミントン教室」を開催し、8名の参加を得た。参加者は熱意をもってプログラムに参加し、技術の向上を達成しながら楽しむことができていた。また、希望に応じて、骨密度や身体組成などを測定する機会を提供し、測定したデータをもとに健康・体力づくりについてアドバイスした。1名の学生がプログラムに参加者した。

2. 平成 30 年度

鈴鹿市で活動するスロージョギングのクラブより要請を受け、29名の会員（65歳以上）を対象に、平成30年8月10日（土）10：00から90分間、三重県鈴鹿市、白子コミュニティセンターにおいて、運動時の体温調節や水分補給に関する講演を行った。平成30年度は、最高気温が従来の記録を更新し、熱中症による救急搬送者が、7月だけで平年の1年分に達するという猛暑の夏であり、タイムリーな講演となった。アンケートでは、97%の参加者が「大変よかった」、「よかった」と回答し、有用な情報提供の場となった。また、バドミントン教室については、平成30年11月13日（火）、12月7日（金）、19日（水）に近隣の高等学校バドミントン部の比較的初級者を対象として、1回60分程度3回の技術指導講座を行った。参加者は毎回約20名で、基本的なラケットストロークやフットワークといった技術のポイントや、リーダーに対しては練習方法の選び方ややり方などをアドバイスし、有用な講座となった

3. 令和元年度

本学地域交流センター教員提案事業である「みかん大認知症カフェ」と連携し、鈴鹿中央総合病院と榊原温泉病院において、介護予防のための軽運動とコグニサイズの運動について紹介した（図）。入院患者さんそれぞれ約10名と約20名が、車いすや椅子に座りながら、童謡や手遊び歌に合わせて手足を大きく動かす運動や、チームに分かれてタオルでボールを送りゴールのタイムを競う運動を実施した。加えて、鈴鹿中央総合病院では看護師をはじめとして職員8名、榊原温泉病院では理学療法士6名にもコグニサイズを紹介した。指導には、本学学生延べ12名も参加した。参加者8名から頂いたアンケートでは「大変良かった：7名」「良かった：1名」と評価され、「間違っているけど楽しい！皆で楽しめるのでコグニサイズ大好きです」、「とても良い経験でした。ありがとうございました」、「頭を使った感じがしました」、「楽しみながらコグニサイズ出来て良かったです。ありがとうございました」、「頭が混乱する」、「難しいけど面白い」などの感想も得た。

Ⅲ. 今後の課題

当事業は3年間概ね順調に遂行することができ、スポーツから介護予防や認知症予防にわたる広汎な運動指導講座を実施することができた。健康の維持増進に運動が有用であることは周知であるが、適切な実施方法が周知されているとはいいがたい。また、運動以外の健康法についても組み合わせる価値が高いと考えられ、それを実現できる事業について検討したい。



図 介護予防のための軽運動とコグニサイズの様子

5) 子ども達に「自分のからだ」を伝える事業

担当者：宮崎つた子・川瀬浩子・佐野和香・菱沼典子

【事業要旨】

小学校入学前の好奇心の強い子ども達を対象に、「自分のからだを知り大切にする、そしてお友達も大切にする」事を伝える活動を地域の教育・福祉機関と協力・連携して創り上げる「からだ先生」プロジェクト事業である。この事業を通して、子ども達にからだの知識を毎日の生活体験と結び付けることで正しい生活習慣を獲得していくことができるように支援を行う取り組みである。

【地域貢献のポイント】

- ・地域のニーズへの対応 ・子どもの自己肯定感の向上に寄与
- ・地域、教育・福祉機関で子どもの健康教育に取り組む意識の醸成
- ・いじめや虐待防止に貢献 ・本学の専門性の活用

I. 活動計画

＜数値目標＞

- ・教育・福祉機関、市町（行政）などの団体から連携希望（1件以上）
- ・教育・福祉機関、市町（行政）など連携団体との合同会議（2回以上）
- ・保育所等の幼児教育現場との打合わせ会議（2回以上）
- ・保育所等の幼児教育現場での「自分のからだ」を伝える事業の実施（2回以上）

＜実施計画＞

- ・教育・福祉の協力・連携機関の募集
- ・活動状況の情報収集（子どもへの健康教育や生活習慣獲得指導、取り組み等）
- ・依頼機関からの希望に応じて企画内容の検討
- ・実施可能な取り組み内容の企画・運営等の打合わせ（学内）
- ・実施可能な取り組み内容の企画・運営等の打合わせ（依頼先と合同）
- ・事業開催に関する準備、当日までのリハーサル・サポートの実施
- ・子ども達に「自分のからだ」を伝える事業の実施（当日）
- ・事業担当者の反省会の実施と評価の検討
- ・依頼先との反省会（教育・福祉の依頼機関との合同反省会）の実施

II. 活動の結果と評価

＜結果＞

1. 教育・福祉機関、市町（行政）などの団体から連携希望

教育・福祉の協力・連携機関の募集を行い、亀山市教育員会と津市教育委員会の2市から連携希望があった。

2. 保育所等の幼児教育現場での「自分のからだ」を伝える事業の実施

以下の5回の実施を行った。

1) 井田川幼稚園（連携：亀山市教育委員会）

日時：令和元年5月23日（木）12時45分～13時45分

対象：年長園児 17名

内容：担任の先生が「たべたもののおりみち」・「ちとしんぞう」の紙芝居を行い、本学からは臓器のエプロンを使った説明や聴診器で心臓の音を聞く体験を実施した。

2) 関認定こども園アスレ（連携：亀山市教育委員会）

日時：令和元年5月27日（月）10時00分～11時00分

対象：年長園児 36名とその保護者 35名

内容：子ども園の先生が「おしっこのはなし」・「たべたもののおりみち」の紙芝居や、「熱中症注意」の劇を行い、本学からは臓器のエプロンを使い水分補給の大切さの説明、聴診器で心臓の音を親子で聞く体験を実施した。この活動は、亀山市のZTVでも放送された。

3) 川崎愛児園

日時：令和元年6月13日（木）10時00分～11時00分

対象：年長園児 21名とその保護者 9名

内容：川崎愛児園の先生からは「たべたもののおりみち」・「ちとしんぞう」の紙芝居を行い、本学からは臓器のエプロンを使い、いろんな食べ物を食べる必要性の説明や聴診器で心臓の音を親子で聞く体験を実施した。

4) 津市立黒田幼稚園（連携：津市教育委員会）

日時：令和元年11月8日（金）10時30分～11時00分

対象：年長園児 11名

内容：園の先生から「たべたもののおりみち」の紙芝居を実施し、本学から臓器のエプロンの提示や、聴診器で心臓の音を聞く体験を実施し、「自分のからだを大切に、お友達や親も大切に」のメッセージを届けた。

5) 津市立高茶屋幼稚園（連携：津市教育委員会）

日時：令和2年1月20日（月）13時00分～14時00分

対象：年長園児 26名とその保護者 8名

内容：園の先生は、特に知ってほしいテーマであると「ほねときんにく」を選び、紙芝居を実施した。本学からは臓器のエプロンやペットボトルでの尿の色の提示や、聴診器で心臓の音を聞く体験の実施をし、「自分のからだを大切に、お友達や親のからだも大切に」のメッセージを届けた。

<評価>

1. 数値目標

教育・福祉機関、市町（行政）などの団体から連携希望は亀山市と津市の教育委員会2団体（計5施設）から依頼があった。幼児教育現場での「自分のからだ」を伝える事業の実施は、亀山市3園、津市2園の計5施設で実施が終了した。目標にした数値目標は全て達成できた。

2. 各実施園との反省会の内容および評価

- 1) 井田川幼稚園：先生からは、「聴診器をずっと聞いていた姿を見て、いい経験になったと感じた」、「難しい内容だが、身近なおしっこやうんこにつなげていけた」などの感想が聞かれた。年長児にからだの大切さを知ってもらえるきっかけになった。
- 2) 関認定こども園アスレ：先生からは、「難しい内容だが、回数を重ねると子どもたちが知っている臓器が増え、興味をもって聞いていた」、「(心音が)聞こえた嬉しそうに話す親子の姿を見て、保護者の方にも子どもの『生』を感じていただけるよい機会となった」、などの感想が聞かれた。
- 3) 川崎愛児園：先生からは、「普段の様子からは考えられないほど集中して聞いていた」、「保護者も体験型の参観だったので、いつもより注目していた」、などの感想が聞かれ、年長児とその保護者に、「生きている実感」や「からだの大切さ」を感じてもらえた。
- 4) 津市立黒田幼稚園：先生からは、「紙芝居が難しいかなと思ったけれど、子どもは集中して聞いていた」、「からだの中は見えないけれど、子どもは臓器エプロンでイメージできたのではと思う」などの感想が聞かれた。
- 5) 津市立高茶屋幼稚園：先生からは、「真剣に子どもたちが聞いていて、驚いた」、臓器のエプロンやペットボトルでの尿の色の提示に対し、「具体物の提示はわかりやすい。今後の教材の参考にしたい」、などの感想が聞かれた。

以上から、地域の教育・福祉機関と協力・連携して、子ども達に、「自分のからだを知り大切にする、そしてお友達も大切にする」事を伝える本事業は、順調に展開できたといえる。今年度は、依頼のあった2市とも教育委員会が窓口になり、各園の現状把握から取り組み、評価に至るまで連携して取り組めており、目的の「地域の教育・福祉機関と協力・連携して創り上げる」ことが出来た。

Ⅲ. 今後の課題

今年度の地域や関連機関からの要望の実績から、次年度も事業を継続する予定である。今後は、今年度の事業課題を明らかにして、補助教材の検討や伝え方の工夫に努力していく。また、事業後は、各園が本事業【子ども達に「自分のからだ」を伝える事業】に続き、子ども達に、からだの知識を毎日の生活体験と結び付ける様々な工夫や、子ども達が正しい生活習慣を獲得していくことができるように独自の教育、指導の展開を広げていけるように検討を重ねていく。



写真 1

担任の先生が紙芝居を行っている風景



写真 2

臓器のエプロンを使った説明風景



写真 3

子ども達が、聴診器で心臓の音を聞いている風景

6) 医療施設に広げよう看工連携による特許の輪！

担当者：斎藤真、大平肇子、大西範和、大川明子、犬飼さゆり、長谷川智之、市川陽子、岡根利津、菅原啓太

【事業要旨】

本事業は、看工連携による知財発掘をさらに現実化するために、県内の医療機関と連携してケア上の困り事や開発してほしい機器などの情報を集めること目的とする。昨年度行った本学教員と産学連携知的財産アドバイザー（特許庁）のブレインストーミングについて県内医療機関を対象に発展させる。本学も過去に2件の知的財産を出してきたが、さらに医療機関と行うことでより実践的な内容に発展させる。

【地域貢献のポイント】

医工連携という名称の下に活動している例は多々あるが、看工連携としての活動はほとんどない。当然のことながら地域の医療施設の看護部が知的財産を保有し、それを有効に活用している例は皆無である。特に地方の医療機関を活性化する手段のひとつとして、知的財産発掘とその有効活用をすることが地域貢献である。

I. 活動計画

＜重点課題＞

地域の医療機関に「知的財産」の必要性を認識してもらう。また「看工連携」という概念を広める。

＜数値目標＞

参加医療機関2施設以上を目標とする。

II. 活動の結果と評価

1. 本事業の周知

10月10日（木）に本学で開催された、「令和元年度県内病院等看護管理者意見交換会」において、県内病院の看護管理者36名に対し、事業実施者から本事業について話題提供を行なった。内容として、看工連携事業とは、本学の知的財産の紹介、医療機関との連携、参加希望方法等について説明したところ、5施設の看護管理者から本事業について具体的に検討したいと連絡を受けた。

2. 医療機関における事業説明およびブレインストーミングの実施

本事業に賛同をいただいた5施設に対し、事業実施者および産学連携知的財産アドバイザーが同行し、看護管理者（看護部長、副部長、病棟師長、副師長など）を対象に本事業の説明（看工連携事業について、ブレインストーミングから看護研究への発展等）およびブレインストーミングの概要について説明を行なった。看護管理者からは、「難しい内容を考えていたが、話を聞いて、現場で困っていることを共有すればよい」や、「今まで知的財

産に関して全く意識をしていなかったが、私たちの思いが形になる可能性があるため、病棟スタッフにもぜひ参加してもらおう」といった前向きな意見が見られた。ブレインストーミングの実際は2～3月に実施予定で、5施設のうち3施設は日程が確定している。また、ブレインストーミングを行う際には、事業実施者2ないし3名と産学連携知的財産アドバイザーがファシリテーターとして参加する。

＜評価＞

本事業の周知により5施設から応募があったこと、年度内に3施設でブレインストーミングが実施できたことから、県内の医療機関において看工連携の概念を広めることができたと評価できる。また、数値目標も達成したため、本事業は看護職者にとってニーズの高い事業であると評価できる。

Ⅲ. 今後の課題

各施設で実施されたブレインストーミングから、知財になりうる内容の検討および看護研究への応用の支援を行い、県内の看護職者に対する看工連携の概念を広める方策を検討する。

7) みんなでリカバリー

担当者： 松田陽子、犬飼さゆり、星野郁子

【事業要旨】

精神保健医療の分野では、病気等にかかわらず、誰もが対等に尊重される社会を目指している。しかし、精神疾患および精神障害にまつわる偏見は、精神障害者とその家族の求助行動を阻み、そのために受診が遅れ、病状の悪化や精神障害者や御家族の孤立をもたらすなど、社会的参加への影響があると思われる。

そこで、「みんなでリカバリー」事業では、リカバリー(回復)に欠かせない社会的つながりを大切にしつつ、当事者、御家族、支援者など様々な方々と集い、語り、共に、メンタルヘルスに関する学習を行い、精神的および身体的健康を目指した活動を行う。

【地域貢献のポイント】

- ・メンタルヘルスへの普及活動や活動を通じて、地域住民の精神的健康の増進を目指すことができる。
- ・メンタルヘルスに興味関心のある様々な立場の方が、一同に会することで県内のメンタルヘルスに携わる人たちのネットワークを作ることができる。

I. 活動計画

1. 数値目標

- 1) DVD 上映会の開催（7/13 土）、参加者 15 名程度。
- 2) 精神的・精神的健康を目指した活動（農作業）、参加者 10 名程度/2 回。

II. 活動の結果と評価

1. DVD 上映会と農作業の開催について（令和元年 7 月 13 日（土）13:30～16:00）

1) 「夜明け前-呉秀三と無名の精神障害者の 100 年-」上映会（13:30～14:45）

参加者 13 名（学外 10 名、学内 3 名）

精神医療の草分け的存在である呉秀三のドキュメンタリー映画「夜明け前-呉秀三と無名の精神障害者の 100 年-」の上映会を、本学にて実施した。

2) ミニ農作業（15:00～16:00）の実施。参加者 7 名（学外 5 名、学内 2 名）

上映会終了後、プランターを使用して、土作りを教員の説明のもと、参加者全員で行い、参加者の好みの野菜（ミニトマトや里芋）を選んでいただいて植付けを行った。土作りや植付けを通して参加者から「土にさわるのは久しぶり。」「土づくりは、大事やなあ」「いつ頃、収穫かなあ」など自然に参加者どうしの会話が広がり笑顔もみられていた。



【2019 年 7 月 13 日(土)みんなでリカバリー ミニ農作業】

2. 評価

1) 上映会アンケート結果

上映会の開催については、大変良かった・良かった、の回答が 100%であった。自由記載では、「改めて今の精神科病院の現状について考える機会になった」、「人に対する思いやり、相手を責めずに現実を把握する大切さを感じた」といった意見も聞かれ、上映会を通じ、精神科医療について考えるきっかけとなった。

Ⅲ. 今後の課題

本事業は、今年度で終了の予定であるが、メンタルヘルス普及に伴う地域での精神的健康への意識が高まると考えられることや、精神疾患を抱えながら地域で暮らす方々が、増えている中で、このような活動を少しずつ継続していく必要があると考える。

3. 地域住民とのふれあい推進事業

1) 災害に備えて

担当者： 山本翔太、中西貴美子、清水律子、菅原啓太、上杉佑也、竹村和誠、小林奈津美

【事業要旨】

本事業は本学と同地区を管轄する保健センター等の協力を得ながら啓発活動を行い、地域住民の防災・減災力向上に寄与することを目指す。

【地域貢献のポイント】

1. ブース来場者を通じて、災害時の健康管理に対する平時の備えの知識を広く発信できる。
2. アンケート結果および津市の健康づくり計画における災害の取り組みに関する話題提供から、個人、地区組織や本学で取り組む防災・減災対策の具体化を図ることができる。

I. 活動計画

<数値目標>

1. 啓発ブースの開設（年1回）
2. 地域住民や学内関係者への情報発信（年1回程度）
3. 学生ボランティアの協力（1～4年生 3～5名程度）

II. 活動の結果と評価

<結果>

1. 啓発ブースの開設

2019年10月13日に開催された津市健康まつりで災害ブースを開設した。災害ブースの内容は、津市内の地域住民を対象とし、災害時の健康管理に対する平時の備えを啓発するために、(1)災害の備えに関するポスター掲示および啓発（大雨時の自主避難開始時期、小児・成人・高齢者の対象別の災害時の備え、ローリングストック）、(2)エコノミクス症候群予防に関する啓発および資料配布、(3)新聞紙を活用した紙皿の作成体験、(4)非常食の試食を実施した。評価は参加者の理解度を確認する目的で、シールアンケートを用いて行った。ボランティアは、本学の学生の2年生2名と4年生4名が参加した。

2. 津市健康まつり災害ブース担当保健師と当日の運営目的について共有を図った。

<評価>

津市健康まつりの災害ブースでは、幅広い年代層の地域住民の参加があった。また、約100名の参加者からシールアンケートの回答が得られた。災害の備えに関するポスター掲示では、避難開始時期について啓発したことにより、8割の参加者から自主避難について理解が得られた。小児・成人・高齢者の対象別の災害時の備えについては、6割の参加者が災害時に備えて、防災グッズ等の準備をしていることが明らかとなった。これらの結果は、近年の大型台風による水害等の影響を受け、地域住民の関

心が高まっている現状があることが考えられた。ローリングストックでは、6割の参加者が実際に「やっている」と答えた。一方、4割の参加者は「やってみようと思う」、「やったことはない」と答えた。また、「必要に感じない」と答えた参加者はいなかったことから、参加者はローリングストックの必要性を理解していることが明らかとなった。

エコノミークラス症候群予防に関しては、ほとんどの参加者が「参考になった・予防できると思う」と答え、エコノミークラス症候群予防について理解を得られた。

新聞紙を活用した紙皿の作成体験では、9割の参加者が「参考になった・使えると思う」と答えた。また、「簡単に作れる」、「災害時に活用できる」といった参加者からの意見があった。

非常食の試食では、試食を体験した8割の参加者から非常食の味に対して好評であった。また非常食の購入方法等の質問があり、関心が高いことが示された。

学生ボランティアは本学が運営する災害ブースだけでなく、津市が運営するブースにも参加した。学生は津市が地域住民を対象に実施している活動に触れる機会となったため、学生にとっても有益な活動であったと思われる。

上記の内容から、啓発ブースの開設と学生ボランティアの協力に関する数値目標は達成することができた。

Ⅲ. 今後の課題

今回の啓発活動は、幅広い年代層の地域住民を対象に実施したが、対象を絞った内容（高齢者、子どもがいる家族等）を検討していく必要があった。したがって引き続き啓発活動は必要であると思われる。

2) アイルランドの伝統料理を作ろう

担当者： Myles O'Brien、林辰弥、大川明子、日比野直子、清水真由美、中北裕子、
荻野妃那、辻まどか、小林奈津美

【事業要旨】

当事業に関心を持っている大学近隣の住民へアイルランドの歴史・食文化に関する講話や、伝統料理を味わうことを通して、アイルランドの食文化について知ってもらう。また、住民と教員が一緒になってアイルランドの伝統料理であるソーダブレッドと、アイリッシュポークソーセージを作り交流を図る。

【地域貢献のポイント】

地域住民と本学の教員との交流を図るとともに、地域住民に料理を楽しんでもらい、異文化に対する理解を深めてもらう。

I. 活動計画

①数値目標：開催回数 1 回 参加人数 15 名以上

②活動スケジュール：

11 月 大学近隣住民へ案内チラシを配布

12 月 必要物品の調達と会場準備

12 月 14 日（土）開催。

ソーダブレッド、アイリッシュポークソーセージを調理・試食。

上記料理にまつわるアイルランドの歴史・食文化の講話。

II. 活動の結果と評価

1. 広報活動

12 月 14 日（土）の開催までに、数回にわたり直接、またはメールにて担当で打ち合わせを行った。案内チラシでは、日本ではあまり馴染みのないソーダブレッドとアイリッシュポークソーセージであったため、写真やどのような料理なのか簡単に記載し、イメージしやすい様に工夫した。参加申し込み方法は、案内チラシに必要事項を記入し、Fax で申し込むか、もしくは大学へ E-Mail で申し込んでいただくように案内チラシに載せた。これまでの広報活動と同様に、11 月に大学近郊に案内チラシを配布した。昨年度の参加人数が目標値に達成しなかったため、これまでの方法に加えて、大学ホームページへチラシを掲載や、担当が本事業に興味のある方々へ直接声かけを行い、参加者を募った。

2. 必要物品の調達と会場準備

開催前の打ち合わせで、材料調達等の準備の段取りを検討した。ソーダブレッドやアイリッシュポークでは、美味しく本場の味を楽しんでもらえるように材料や調味料を手

配した。開催 1 週間ほど前から担当で分担し、調理に必要な物品と食材を調達した。

開催前には会場となる本学生活援助室を清掃し、シンク・調理台を消毒し、ボウル、まな板等の調理器具を準備した。

開催当日は、アイルランドの歴史・食文化についての講話の際に使用する液晶 TV とパワーポイントを準備した。

3. 開催

令和元年 12 月 14 日（土）10 時～12 時に、本学の生活援助室で開催した。参加者が揃い次第、調理予定の料理にまつわるアイルランドの歴史・食文化について講話を実施した。その後、ソーダブレッドの材料を混ぜ、オーブンで焼いている間にアイリッシュポークソーセージを調理した。調理は 3 テーブルに分かれて行った。調理がスムーズに進むように、材料・作り方を記載したプリントを配布し、適宜声掛けを行った。材料・作り方のプリントは、自宅でも作れるように全員に配布した。調理中は、参加者同士で大人や子ども等関係なく交流を図りながら実施することができた。調理後は、焼きあがったソーダブレッドとアイリッシュポークソーセージを試食した。試食の際には、参加者同士で交流を図って頂いた。

以下写真 1, 2, 3, 4 に当日の風景を示す。

1



2



3



4



Ⅲ. 今後の課題

参加者数：18名（10歳未満：4名、20歳代：1名、30歳代：1名、40歳代：3名、50歳代：3名、60歳以上：3名、不明：3名）。学生の参加はなかった。

数値目標としていた、1回の開催と、参加者数は15名以上を達成することができた。参加者は大学近郊の住民であり、回覧板やチラシや担当者の声かけにて本事業を知り、親子や近所の友人と参加していた。チラシの内容については本事業を理解しやすいものであったと考える。広報活動については、担当者が近隣住民へ声をかけることによって多くの参加者を募ることができ、目標達成に繋がったと考えられる。

本事業開催後、参加者へアンケートを実施し、参加者18名の内16名から回収した。アンケート結果より、本事業に対して16名全員から「楽しかった」、今後も本学のイベントに「参加したい」「できれば参加したい」と回答を得られた。自由記述は、「アイルランドを少し感じる事が出来ました。ソーダブレッドは素朴な味でした。ソーセージも皮なしで食べやすかったです。ありがとうございました」「アットホームな感じでとても楽しく作れました。アイルランド料理、簡単でとても美味しかったです。家でも作ってみたいと思います」「短時間で作る事ができ、しかも美味しかったので、楽しくアイルランド料理をたんのうできました。ありがとうございました」「今年で終わるのが残念です」等、多くの肯定的な感想を頂いた。

本事業は最終年度となるが、これまでになく参加者も集まり、大盛況にて開催することができた。



3) 英語で話そう

担当者： Myles O'Brien、林 姿穂

【事業要旨】

津市在住の方々へネイティブ教員による「英語で話そう」という英会話の授業を行う。リラックスした雰囲気の中で、基本的な英語表現を学びながら、同時に参加者同士の交流も楽しむ。参加者の関心に応じて話題を提供する機会も設ける。

【地域貢献のポイント】

津市住民が「英語を楽しむ」という活動を通じて、英会話を学び異文化に触れる。夢が丘の住民との交流の機会を広げる。様々な世代の方に参加いただくことで、世代を超えた交流も視野に入れている。

I. 活動計画

①数値目標：参加人数 8 名程度

授業回数全 7 回

②授業内容：初心者向けの基本的な語彙や表現を教授し、日常英会話を楽しめるようにする。

II. 活動の実際および経過

1. 参加募集時期

令和元年 10 月に近隣団地へのチラシの配布を行い、8 人の応募があった。

2. 開催時期

令和元年 11 月 5 日から 12 月 17 日の毎週火曜日 14:00~15:00 (計 7 回)

3. 授業

毎回、「週末をどのように過ごしたのか」等を受講者に質問して、受講者が自分の体験や気持ちを英語で積極的に表現できるようにサポートした。また受講者が話した内容に関して、関連する事柄やよりよい英語表現を検討しホワイトボードに書き記すことで、英語力の向上を図った。

III. 活動の結果と評価

参加者の英会話のレベルには多少の差はあったが、受講者全員が英語を話すことに積極的であったため、大きな問題になることはなかった。また、受講者がときおり英語表現に詰まる場面もあったが、そういった場合は他の受講者がその人に助け舟を出すことで、円滑なコミュニケーションが図れた。終始和やかな雰囲気の中で授業が進行し、皆がリラックスして英会話を楽しむことができたと考える。

授業の具体的な内容としては、毎回、参加者全員にその週に起こった身近な出来事を英語で表現してもらい、それを題材にして英会話を展開するという方法をとった。この方法

には二つの大きな利点があった。第一に、英語で話す時間が参加者間で偏ることなくほぼ均等に分配された。つまり英会話の能力の優劣に関係なく、皆がおなじぐらい英語で話す機会に恵まれた。第二に、参加者全員が、自分の日々の関心事を英語でどう表現するのかを具体的に、かつ各参加者のレベルに応じて学ぶことができた。

8人の参加者のうち、5人が2回目（またはそれ以上）の参加になる。参加者が毎年定期的に集う場としてこの事業に参加している。本企画は、夢が丘の住民との交流を定期的にはかるための良い機会を提供していると言える。

IV. 今後の課題及び今後に向けての計画

担当者の退職に伴い、この事業は本年度をもって終了するものとする。

4) ケアをめぐる哲学カフェ

—おたがいの立場をこえて話し合おう—

担当者： 安部彰・浦野茂・林辰也・鈴木聡美・関根由紀

【事業要旨】

この事業の目的は、病いや障害、成長と老いそして死など、ひろくケアにかかわりのある事柄をテーマとした哲学カフェを開催することである。これを通じ、保健医療福祉従事者や病気・障害の当事者、その家族など、職種や立場、経験において多様な参加者が、自身の経験に根ざしつつもその認識を広げ、理解を深めてゆくことのできる場を作ることを目指している。

【地域貢献のポイント】

機能分化の進んだ現代社会では、保健医療福祉従事者や病気・障害の当事者、その家族等がそれぞれの立場をこえて見解を交わし合う場と機会は限定されていく傾向にある。こうしたなか、哲学カフェやサイエンスカフェなど、専門的な知識や事象をめぐる一般市民による対話の場が広がりつつある。この状況を踏まえ、医療保健福祉にかかわりあるテーマをめぐる哲学カフェを実施することにより、三重県を中心とした地域住民に対し、本学ならではの貢献ができると考えている。

I. 活動計画

数値目標：年1回の開催。参加人数10名。

II. 活動の結果と評価

1. 開催情報

- 1) 日時：2020年3月3日（火）19時～20時30分
- 2) 場所：橋北公民館和室（アスト津4階アストプラザ）
- 3) 参加人数：10名程度（本学教職員・本学卒業生・一般市民）

2. 活動の結果

対話が共同探究の営みであるという点に鑑みるならば、やはり哲学対話にふさわしいテーマは、ひとりでは答えをみつけることができず、それゆえ他者とともにかんがえてみたいとおもうような問題ということになる。そこで今回は「寄り添う」というテーマをめぐる話しあった。その主なあらましは以下のとおりである。

「寄り添う」は、昨年度の本事業のテーマである「共感」同様、看護において頻出する概念である。またそれらは、「善きこと」と目されている点においても共通している。

だけど、「寄り添う」とは、具体的にはいかなる行為または態度のことをいうのか。それは「傾聴」とどう異なるのか。「アドボカシー」とどう異なるのか。そもそも「ケア」とどう異なるのか。そして、もしケアが相互的な営みであるならば、「寄り添」わねばならないのはケアラーだけではない、ということにならないか。

また「寄り添う」ことは、いったい誰にとって善いのだろう。もちろんそれは患者にとって善い、とされる。でも患者だって多様だ。なかには「寄り添」われることを煩わしく感じる状態や気分をいきている患者だっているはずだ。そんなときでも「寄り添う」べきか、いやむしろそんなときだからこそ「寄り添う」べきなのか。あるいは、そもそも「寄り添う」という行為の価値が、帰結にもとづく評価には還元しえない、それじたいとしての価値をもつとするならば、それはその実践者であるケアラーにとってこそ、善きものであるはずだ。

3. 活動の評価

哲学対話のエッセンスが自己表現と共同探求をともに遂行することにあるなら、本事業の成果は大いに実りのあるものだった。ただ、もっと多様な意見が飛び交ったなら、さらによかったとはおもう。私たちは異なる意見に出会うと、驚き、それをきっかけに思考しはじめる。異なる意見は、自らの意見へと向けられた問いとして経験され、その問いかけに応答するために私たちはわが身をふり返るように思考しはじめる。そしてその思考はさらに、異なる意見と経験がもつ意味の探究へと向かっていく。その意味では、本学関係者以外の方々をもっと参加してくださっていたなら、探求的な思考はより深まったといえるだろう。

IV. 今後の課題

本事業は今年度をもって最終年度となる。

5) シネマで倫理学

担当者： 安部彰・中西貴美子・上田貴子

【事業要旨】

倫理学は、私たちが「倫理」や「道徳」と呼んでいることがらを探求する哲学の一分野である。またそれは、かかる探求をつうじて各人がみずからの倫理観や生き方を問いなおすことをめざしている。だがそのためには探究対象となるさまざまな倫理問題にリアリティを感じるものが不可欠となるだろう。その感覚がなければ、いかなる問題であれ他人事の域をでず、倫理観や生き方の問いなおしなど、のぞむべくもないからである。

とはいえ、たしかに倫理問題の多くは、じぶんでは経験していない問題である。それゆえリアリティを感じることにしたい、とてもむずかしい。たとえば、まだ若くて健康な大学生なら、安楽死にリアリティを感じるのはおろか、おそらく想像することさえ困難だろう。では倫理学はこのアポリアにいかにか立ち向かえばよいのか。その手がかりは、映画にある。

「私たちが、人間とは何かを問うたり、自らの生き方について反省的に思考したりする実に強烈な瞬間は、(文学や演劇を含めて)フィクションの鑑賞を通じて現れることが少なくない。現実においても、自分自身の狭い経験に縛られずに、同じ世界を生きる他人や、過去の世界に生きた人物から学ぶことはできる。しかし、その人たちが他人である限り、そこで生じる行為や経験はその他人のものであって私のものではない。

(中略) 他方、フィクションの作中人物の場合、その人物の経験は(とりわけ悲劇的なものである場合)、しばしば私にも起こるかもしれないものとして受けとめられる。

(中略) 誰もが自由に道徳的問題について思考し、さらに語り合うためには、誰のものでもないフィクショナルな視点から、それでいて筋のある人生を経験することにはポイントがある。」(吉川孝・横地徳広・池田喬『映画で考える——生命環境倫理学』、勁草書房、2019年、pp. 185-186)

このように、映画はまず映像というかたちで、さまざまな対象にイメージをあたえてくれるので、私たちは描きだされる内容を具体的にとらえやすくなる。また一口に映画といっても、フィクションとノンフィクションと呼ばれるジャンルがある。だが常識に反して、倫理学の学びには前者こそ有用だ。なぜならフィクションは現実ではない架空の作品であるからこそ、そこで描かれる問題は「特定の誰か」ではなく「誰にでも」おこりうる問題、つまり他人事ではない「私」の問題として受けとめられやすいからである。

ことほど左様にて、映画と倫理学はなかなか相性がよい。だとすれば「シネマで倫理学」という実践を教室のなかに閉じこめてしまうのは、あまりにもったいない。「教室の外」はもちろん「教室のなか」以上に多様なものだから。そして、そうして少しでもより多くの視点を交錯させていくことで、倫理問題の考察もより深いものへととなりゆくであろう。以上が、本事業が教室から飛びだし、「シネマで倫理学」をする所以である。

【地域貢献のポイント】

倫理問題のような公共的な問題の共同探求は、参加者がその多様性を保持したままになされるということが不可欠だ。そのような機会の提供こそ、本事業の地域貢献のポイントにはかならない。学生・医療従事者・近隣住民など多様な人々が織りなす探求の経験とその「よさ」は、こんご地域が抱える諸問題の探求へと彼女／彼らを誘う契機となるはずだ。

I. 活動計画

数値目標：年1回の開催。参加人数20人。

II. 活動の結果と評価

1. 開催情報

- 1) 日時：2020年3月22日（日）13時～16時
- 2) 場所：三重県立看護大学 大講義室
- 3) 参加人数：10名程度（本学教職員・本学学生・近隣住民）

2. 活動の結果

映画を視聴し、その内容について上映後に参加者間で対話をおこなった。

今回の上映作品は『私を離さないで』（マーク・ロマネク監督、2010年）。原作は2017年にノーベル文学賞を受賞した作家カズオ・イシグロの『*Never Let Me Go*』（2008）（邦題と同名の翻訳あり）。作品の舞台は、画期的な医療技術の発達により人間の平均寿命が100歳を超えた1970年代から1990年代のパラレルワールド。主人公は、人間の臓器提供だけをその使命として作製され、外界から隔離した全寮制寄宿学校ヘルムーシャで育成されたキャシー、ルース、トミーの三人のクローンたち。作中では、彼女／彼らが送る「短い」人生、けれどもその青春の「ありふれた」情景を描きだすことをつうじて、「人間とクローン人間はいったいどこがどう違うのか」という問いを観る者に投げかける。

上映後の対話では、つぎのようなやりとりが交わされた。「クローン人間の作成には反対である」という意見について、これは「無条件で反対である」ということなのか、であるならば「人類の存続のために」クローン人間を作成することにも反対なのか。あるいは「クローン人間の作成には反対だが、臓器移植には賛成だ」という意見について、これは「人間どうしの臓器移植ならば認められる」という意見ととれるが、であるならば臓器移植目的で子どもをもうけることは認められるのか。

3. 活動の評価

本学学生の参加が少なかったのは残念であるが、授業と本事業をリンクさせることにより、こんごより多くの学生に参加してもらえるかもしれない。学生にとって本事業への参加は、近隣住民との交流機会や、世代の異なる参加者らの多様な声に触れるポリフォニックな経験の場となりえ、その意義はけっしてすくなくはないであろう。

IV. 今後の課題

本事業は今年度をもって最終年度となる。

【追記】令和2年3月22日（日）に事業を開催する予定でしたが、新型コロナウイルス感染症が拡大している状況を受け、「中止」とさせていただくこととなりました。

6) いきいき体操と美肌づくり

担当者：平生祐一郎、篠原真咲、岡根利津

【事業要旨】

教員が地域の公民館や集会所等に出向き、主に高齢者を対象に介護予防の体操およびスキンケアに関する講話と実技を行っている。特にスキンケアについては、皮膚・排泄ケア認定看護師の資格をもつ教員がハンドクリームの正しい塗り方などを紹介する。また、参加者が互いに交流をもち、楽しく健康づくりに取り組める内容になっている。

【地域貢献のポイント】

①住民の健康意識の向上、②住民の健やかな暮らし、③住民同士の絆づくりに貢献できるよう事業を構成し展開している。

I. 活動計画

< 数値目標 >

開催数：2回以上、参加者数：延 50人以上

< 実施計画 >

1. ロコモティブシンドローム(ロコモ)について
ロコモに関する講話、ストレッチと介護予防体操(実技)
2. スキンケアについて
乾燥肌に関する講話、肌水分量の測定、ハンドクリーム使用方法(実技)
3. 参加者の交流
グループでおしゃべりタイム(本日の感想や健康づくりなど)

II. 活動の結果と評価

< 結果 >

日時：令和元年 12 月 18 日 10 時～11 時 30 分

場所：鈴鹿市内の集会所

参加者は 42 名であり、アンケート回収率は 81% (34 名/42 名)であった。

アンケート項目の結果は以下の通りである。

1. 性別
【男性：11 名、女性：23 名】
2. 年齢
【70 代：10 名、80 代：21 名、90 代：3 名】
3. ロコモの内容は理解できましたか。
【理解できた：26 名、やや理解できた：7 名、無回答：1 名】

4. ロコモを予防しようと思いますか。

【思う:25名、やや思う:5名、あまり思わない:2名、無回答:1名】

5. 健康的な肌づくりの内容は理解できましたか。

【理解できた:26名、やや理解できた:5名、無回答:2名】

6. 健康的な肌づくりに取り組もうと思いますか。

【思う:24名、やや思う:8名、無回答:1名】

7. 意見や感想（一部）

- ・高齢者講義として大変有意義 時々お願いしたい。
- ・とってもわかりやすいお話ありがとうございました。
- ・いつまでも若々しくありたいと願っているので実行したい。
- ・いろいろ美容に関するお話等よかったと思います。
- ・「美肌づくり」を「健康的な肌づくり」にしたらどうか。
- ・もう少し早い時期に聞きたかった。

<評価>

今年度は事業の周知がうまくいかず、1回の開催となってしまった。しかし、老人会の年末最後の行事として開催させていただき、年間行事の中で最も多くの方が参加したことから、地域住民のニーズに沿った事業であったと考える。また、アンケート結果より、事業内容については高評価が得られており、約9割の参加者が今回の内容を実践する意識がみられた。これらより、住民の健康意識の向上や住民同士の絆づくりにつながる事業であったと考える。

<様子>



Ⅲ. 今後の課題

次年度は、本事業を他事業で紹介してもらうなど周知を工夫し事業を継続する。また、男性が参加しやすいよう配慮し、内容のアップデートにも取り組んでいく。

7) よりみちカフェ

担当者： 篠原真咲、六角僚子

【事業要旨】

近隣地域のお年寄りと子どもたちとの世代間交流を通して、地域コミュニケーションの活性化をめざすことを目的にしている。カフェでの歓談、レクリエーションを通して世代間交流を図り活動していく。よりみちカフェをきっかけに、地域の皆さんと楽しく交流し、さらには健康チェックを行いながら、楽しく話せて無料で誰でも参加できる場を提供する。

【地域貢献のポイント】

誰でも申込みなしで参加でき、さらに子供から高齢者まで参加できる。さらに、認知症看護認定看護師が対応するため、認知症予防や認知症者とのかかわり方をまなぶことも可能である。

I. 活動計画

〈活動目標〉年3回実施し、まずはよりみちカフェを知っていただき、参加者が1名でも参加することを目標とする。

II. 活動の結果と評価

1. 実施日：令和元年9月20日（金）、12月17日（火）、令和2年3月3日（火）
2. 実施場所：三重県立教育文化会館
3. 参加者：津市内の住民1名、伊勢市の住民1名、地域包括支援センター職員1名
今後あと1回開催予定である。
4. 内容；認知症看護認定看護師と共に、認知症かるたを実施。



<評価>

よりみちカフェに関しての地域住民に対して周知が不十分となり、参加者が少なかった。その為、3回目に関しては、市役所の地域包括支援センターの協力を得て、ちらしの配布を実施した。

参加者の満足度は高く次回も参加したいとの回答であった。

Ⅲ. 今後の課題

今後は、地域を限定し、その地域の方の交通手段等を考慮した開催場所の検討が必要である。また、地域住民の方への周知についても地域交流センターのホームページやチラシの配布だけでなく、地域包括支援センター等の協力を得ていしながら、地域の方々に知っていただくことが課題である。

【追記】

令和2年3月3日（火）のよりみちカフェを開催する予定でしたが、新型コロナウイルス感染症が拡大している状況を受け、参加者・関係者の健康・安全面を第一に考慮した結果、「中止」とさせていただくこととなりました。

8) 災害時の母子の命を守る工夫を考えよう

担当者： 大平肇子、永見桂子、岩田朋美、松本亜希、市川陽子、辻まどか

【事業要旨】

大災害が発生した際に問題となるのが避難所の運営である。本事業は、災害時における妊産婦や乳幼児の避難所での生活における課題や問題点を洗い出すことを目的に、避難所運営ゲームを開催する事業である。

【地域貢献のポイント】

1. 妊娠中の女性や乳幼児を持つ母親等と協働して避難所での課題を考える機会とする。
2. 災害や避難所運営への関心を高め、防災意識の向上に寄与する。

I. 活動計画

<数値目標>

第1回参加者：学内教職員 10 名程度

第2回参加者：地域に暮らす妊娠中の女性や乳幼児を持つ母親及びその家族 10 名程度

<実施計画>

避難所運営ゲーム（以下、HUG）を実施する。HUG は避難所運営を皆で考える方法の1つで、避難者の年齢、性別やそれぞれが抱える事情が書かれたカードを、避難所の体育館や教室に見立てた平面図に配置する模擬体験ゲームである。HUG を通して、避難所における要配慮者である妊産婦や乳幼児を持つ家族等への配慮や母子の命を守る工夫を考える。

II. 活動の結果と評価

<結果>

1. 第1回 HUG の開催

令和元年 8 月 20 日（火）に三重県立看護大学にて HUG を実施した。参加者は、本学教職員および他大学の教員の合計 8 名であった。第1回の実施目的は、HUG を実施する際のファシリテーションの方法を確認することであった。HUG を実施した結果、参加者から多くの質問や疑問点が出された。具体的には仮設トイレが使用できるまでのトイレの確保、物資の配分の方法、女性や乳幼児、高齢者等の要支援者への配慮方法等であった。

2. 第2回 HUG の開催

令和元年 11 月 5 日（火）に三重県立看護大学にて HUG を実施した。参加者は教職員 8 名と地域で防災活動に取り組んでいる方 5 名、合計 13 名であった。HUG の実施の他、災害時の男女共同参画の視点について意見交換を行った。HUG は 2 組に分かれ実施し、終了後、意見交換を行った。

<評価>

数値目標は、第2回参加者は「地域に暮らす妊娠中の女性や乳幼児を持つ母親及びその

家族 10 名程度」と設定していたが、第 1 回 HUG を実施した結果、ファシリテーションスキルを向上させる必要性が明確となったため、第 2 回の参加者は地域で防災活動を担っている方に変更した。その結果、教職員合わせて 13 名が参加した。少人数での活発な意見交換ができ、成果が得られたと考える。

第 2 回 HUG の参加者からは、「防災について考える機会となった」「実際の災害時にどう行動するか家族で相談しておく必要がある」等の意見があり、HUG 実施の効果があつた。アンケート結果からは、全員が HUG は「役に立った」「まあまあ役に立った」と回答した。役に立った理由は、「具体的にイメージできた」「次々に避難所に人がやってくる中、早急に対応していくことに必要性を感じた」「実際に地域で防災活動に取り組んでいる方々と HUG を実施し、現実的に避難所の想定を考えることができた」「看護大学の先生は災害弱者に対する配慮があり、自治会で実施した時との違いを感じた」等であつた。大学教職員と地域で活動している方等の異なる立場の者が交流することで新たな発見があり、効果があつたと考える。HUG の運営に対しては、「少人数でありそれぞれに意見が出されて問題点を全員が認識することができた」「地域の方の視点を交え、充実したディスカッションができた。後から気づくこともあつたので、時間が足りなかった。もう少し時間を取ると良かった」「ディスカッション、フィードバックの時間がもう少し長いと考えを深めることができて良い」などがあり、HUG 実施後のディスカッションを充実させる必要性が見出された。

今後の HUG 実施について、令和元年 12 月に地域の方と意見交換を実施し、以下の意見があつた。

- ・ 地域の実情に応じて、避難所までの道のりや困難さ（川の氾濫、電柱の倒壊等）を想像し、避難所にたどり着くまでのことも考えておく必要がある。
- ・ 災害時、地元の消防団等は救助活動をするため、避難所運営はできない。HUG の回数を重ね、地域でリーダーを育てる必要がある。
- ・ 避難所ゲームとして、多くの人に、まずは気軽に参加してもらおう工夫が大切である。

Ⅲ. 今後の課題

令和 2 年度は、引き続き事業を継続し、①HUG 実施後のディスカッションの時間を充実させる、②HUG 未経験の地域の方にも気軽に参加してもらおう工夫をする、③HUG の他に避難所にたどり着くまでのイメージを持ってもらう等の点を強化していく。



写真 第 2 回 HUG の様子

Ⅱ．卒業生支援事業

1. 卒業生のきずなプロジェクト

担当者： 中北裕子、林辰弥、灘波浩子、日比野直子、長谷川智之、川島珠実、竹村和誠
岡根利津、荻野妃那、小林奈津美、山本翔太

【事業要旨】

卒業生が看護職としての職責を継続して果たせるよう、様々な相談に対応し、燃え尽きおよび離職防止を図る。また同窓会と連携をとり、卒業生、同窓会との情報交換を行うことにより、卒業生と大学との関係性の維持にも努める。（本事業は、平成 23 年度からの事業を引き継いだ単年度事業で、平成 29 度より交流センター提案事業となった。）

【地域貢献のポイント】

仕事上の悩みや複雑な人間関係を経験し、離職を考えることが多い卒後 1～2 年までの卒業生を対象に、母校である大学がハード面とソフト面の資源を提供し、フォローすることで離職防止を図る。この活動によって、卒業生が持続的に質の高い看護ケアを社会に提供できることは、地域住民および社会に対しての貢献につながると考える。

I. 活動計画

これまでの茶話会参加者からのアンケートをもとに、以下を企画した。

【数値目標】

1. 昨年度本学を卒業した人を対象に茶話会を 2 回（夢緑祭当日、3 月）開催する。
（出席者数各会 30 名程度を目標とする）
2. 卒後 2 年目を対象に茶話会（3 月）を開催する。（30 名程度を目標とする）

【茶話会の開催】

1. 卒後 1 年目の卒業生（卒 1）を対象とした茶話会を夢緑祭当日（開催日は令和元年 6 月 8 日）と令和 2 年 3 月 7 日に開催する。
2. 卒後 2 年目の卒業生（卒 2）を対象とした茶話会を令和 2 年 3 月 7 日（卒後 1 年目の卒業生を対象とした茶話会と同日）に開催する。
3. 就職先の情報交換や、同窓生、教員と何でも話ができる場とする。
全体会終了後、個別に本学教員に相談できる時間をもつ。特に 3 月の茶話会は 2 学年が同時に集合する場とすることで、横のつながりだけでなく、縦のつながりを深める機会を作る。
4. 茶話会の開催に向けて
 - 1) 茶話会の案内を卒業生の就職先に郵送することにより広報活動を行う。
 - 2) 卒業生には卒業生アドレス等を活用して、会への出席を呼びかける。
 - 3) 同窓会には開催を事前に伝えることにより、同窓会との橋渡しを行う。
 - 4) 教職員にも開催周知と共に、参加協力を依頼する。
5. 茶話会の開催後
 - 1) 茶話会終了後には、参加できなかった同窓生へのメッセージをまとめて卒業生アド

レス等を活用して、配信する。

- 2) 茶話会への参加協力についてのお礼の文書を参加者の就職先に郵送する。
- 3) 茶話会のアンケート結果から、振り返りと次回茶話会に向けての課題を検討する。

Ⅱ．活動の結果と評価

1. 茶話会開催のための広報活動の結果および評価

第1回目の茶話会後のアンケート結果より、茶話会について知ったきっかけで最も多かったのは「看護部からのチラシ」であり、次いで「友人」であった（図1）。就職先を通じて連絡を受けた者は、上司より「いい機会だから母校に行ってらっしゃい」と促されたり、勤務の調整、出張扱いや旅費の支給等、就職先の協力が得られていた。これらは卒業生の就職先において、平成23年度からの本学の継続した卒業生支援への理解が広まってきている結果であると考えられる。しかし、自由記載に「県外の病院にもチラシがほしいです。（今回のような企画についての）」とあり、該当者の手元にチラシが届かない場合があることが分かった。茶話会の案内を卒業生の就職先に郵送する際には、卒業生への周知を丁寧に依頼する必要があると考える。

開催後には、協力いただいた看護部長宛に、本事業に対するご理解とご協力へのお礼を文書にて伝えることで、今後の本学における卒業生支援に対する更なる理解につながっていくものと期待する。

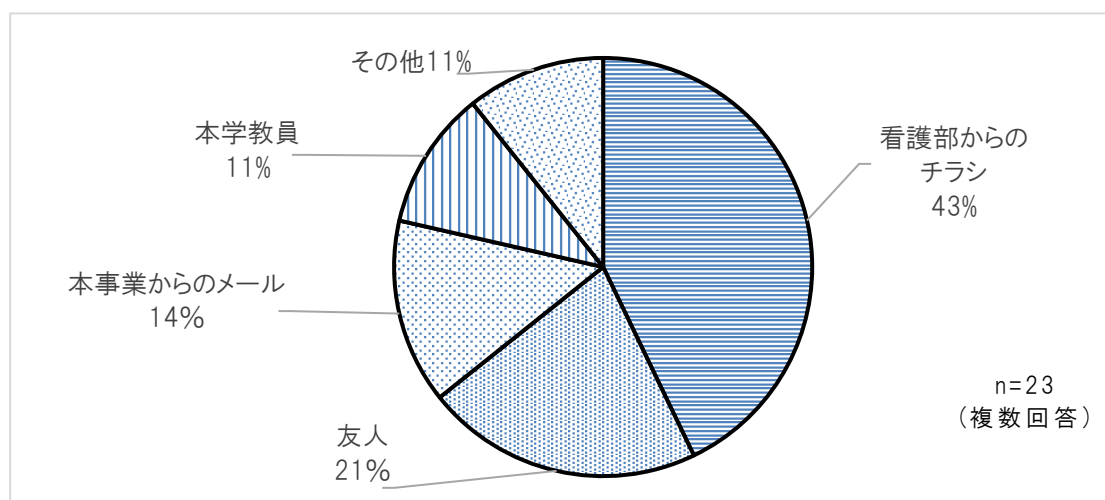


図1. 茶話会を知ったきっかけ

2. 茶話会の結果および評価

1) 第1回茶話会

参加人数は39名（教員13名含む）であり、目標は達成された。会場設営は、参加者が自由に着席できるように配置した。卒業生は順次、近況と共に仕事上の悩みや自己の成長を交えながら和やかな様子で報告し、茶話会の終了時間を過ぎてからも話し込む光景が見られた。

参加者からは、「病院の子たちから話が聞けて、自分だけが困っているのではないと気づくことができて、精神的に楽になった。」、「一緒に今まで頑張ってきた同級生といろんな話ができて楽しかった。」、「みんな頑張っていることがわかったので、自分もも

う少し頑張れそうと思えた。来てよかった。」といった感想があった。

茶話会終了後のアンケートより、茶話会の内容に対する参加者の満足度は、96%の参加者が「とても満足」、4%の者が「どちらともいえない」という結果を得た（図 2）。また、3 月に同様の企画を行うことについては、参加者の 87%が「とても満足」、9%が「やや満足」、4%が「どちらともいえない」と答えた（図 3）。

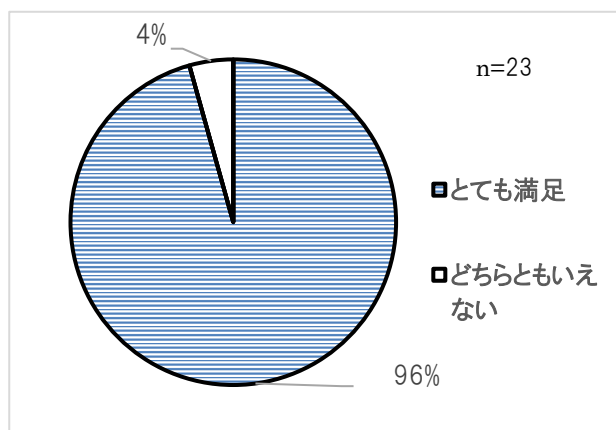


図 2．会の内容について

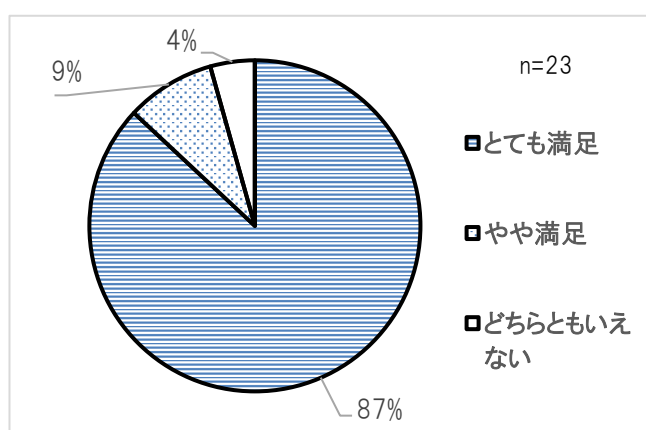


図 3．3 月に同様の内容を行うことについて

大学が行う卒業生支援として希望するものは、今回のような茶話会・懇談会が最も多かった（図 4）。

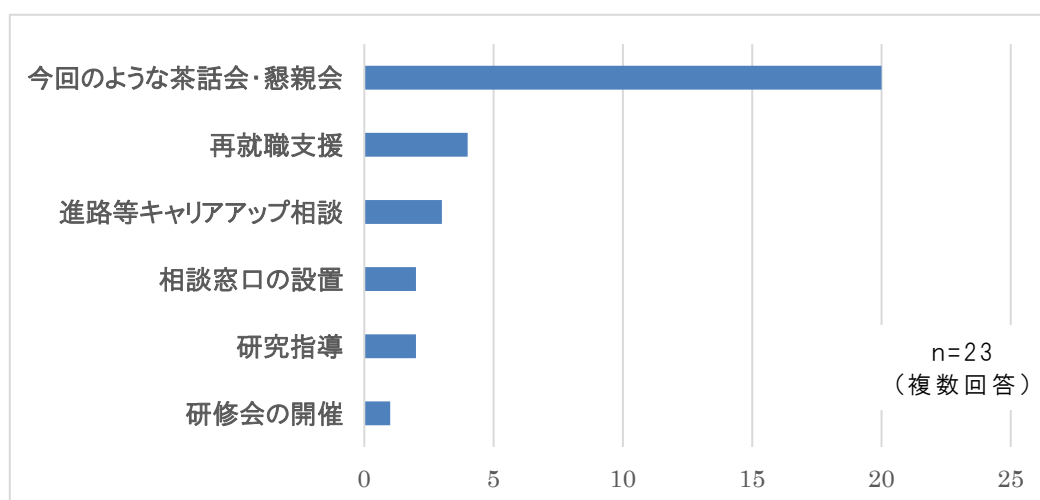


図 4．卒業生支援として希望する内容について

3）本事業の評価

アンケート結果より、本事業は卒業生のニーズと合致したと同時に、卒業生と大学との関係性の維持に寄与できたと考える。また、卒業生の就職先から、出席に関する協力を得られたことは、本学の卒業生支援を継続してきたことの成果と評価できる。

茶話会以外では、卒 1、卒 2 に加えて、卒 3 以上の卒業生からも本事業担当教員のもとに、就職先での人間関係や再就職等について延べ 40 件余りの相談（来学、メール、電話）があり、卒業生全体に対する支援が実施できたと考える。

Ⅲ．今後の課題

茶話会終了後のアンケートより、母校における卒業生支援のニーズは高いことから、本事業は今後も継続的に実施していく価値のあるものとする。

対象となる卒業生への周知方法として、就職先を通じての個人へのチラシの配布と在学時のメールアドレスへの情報配信を行っている。就職先を通じての個人へのチラシの配布については、上司から参加を促していただける場合があり、本学の卒業生支援に参加しやすい環境づくりに役立っていると思われる。しかし、チラシが手元に届かなかったり、該当者が退職している場合もあり、確実な周知方法とは言い難い。また、在学時のメールアドレスは、卒業すると活用することが減り、確認が遅くなることもある。よって、日頃から連絡をとっている卒業生への直接的連絡も加えて、継続して連絡が取れる方法を検討していく必要がある。

茶話会の開催以外にも、研修会の開催、再就職支援、進路等キャリアアップ相談、相談窓口の設置等の支援ニーズがあることを本学教員で共有し、卒業生支援を大学全体として実施していくことが必要である。



2. 卒業生支援プロジェクト

担当者：長谷川智之、斎藤真、宮崎つた子、岩田朋美、田端真、小林奈津美、
阪上由希子、星野郁子

【事業要旨】

昨年度までの卒業生支援構想プロジェクトの検討結果を踏まえ、引き続き卒業生支援の方向性を検討するとともに、卒業生支援の在り方を同窓会と協働し構築する。

【地域貢献のポイント】

本事業における地域貢献のポイントは3点挙げられる。1点目は、同窓会総会ならびに企画を本学で開催することを支援し、同窓会と大学の連携に貢献するとともに、卒業生が交流できる場を作ることで、卒業生同士の情報共有に寄与することができる。2点目は、卒業生支援ネットワークを通じて、卒業生同士の情報共有およびキャリアディベロップメントに寄与することができる。3点目は、卒業生の活躍を在学生が知ることで、在学生の進路選択の一助となることことができる。

I. 活動計画

1. 6月に開催される同窓会総会ならびに企画の支援を実施する。
2. 同窓会との意見交換会を年2回程度実施する。
3. 事業実施者による意見交換会を年3回程度実施する。
4. 本事業から得られた卒業生支援の案を同窓会に提供し、運用に向けた取り組みを協働して行う

II. 活動の結果と評価

1. 同窓会総会および交流講演会の運営支援

6月8日（土）に開催された、三重県立看護大学同窓会総会および交流講演会の運営支援を行なった。具体的な支援内容として、同窓会総会および講演会の会場設営および運営補助とした。

2. 同窓会との意見交換会

1回目：6月8日（土）、2回目：2月3日（月）に、同窓会と意見交換会を行なった。1回目では、同窓会役員と卒業生支援プロジェクト（長谷川、星野）の顔合わせおよび、今年度の同窓会と本事業との連携の在り方について意見交換を行なった。2回目は、次年度の同窓会総会および講演会の内容確認、同窓会の学内広報の方法等について検討した。

3. 事業実施者による意見交換会

6月19日（水）に第1回会議を開催した。内容は、本事業の主旨、今年度の取り組みに

ついてであった。卒業生支援の内容として、卒業生対象の講演会、学び直し講座、看護研究基本ステップへの参加の優遇、県内もしくは連携病院毎のネットワークの構築、SNSを利用した情報の発信（例えば LINE）などの意見があった。第2回は年度末に開催予定である。

4. 同窓会への事業提案

事業実施者による意見交換会で出された意見から、2点について、同窓会に事業提案を行なった。1点目は、本学で開催される公開講座に託児サービスを付加し、公開講座への参加および講座終了後に同窓生交流会を開催することである。卒業生支援事業のきずなプロジェクトでは卒後2年目までをターゲットとしているため、卒後3年目以降の卒業生への支援として交流できる機会を設けることとし、実施の際には、託児所など、子育て世代でも来やすい環境を整える。特に、次年度の第3回公開講座は、女性をテーマにした内容であり、子育て中の同窓生のニーズにマッチする可能性が高いため、事業実現を目指す。2点目は、同窓会の大学行事への参加である。本学の同窓会は在学生・卒業生への認知度が低く、同窓会がどのような活動や支援をしているのか知らない在学生・卒業生が多いという課題がある。そのため、在学生・卒業生が集まる機会がなく、大学と卒業生の関係性が希薄になっている現状がある。大学行事への同窓会の参加が、これまで卒業式だけであったため、大学側から同窓会へその他の行事（入学式、懇親会など）についても参加していただけるよう働きかけ、在学生や保護者に在学中から同窓会について周知できる機会を設ける。

5. 在校生に対する同窓会の広報

同窓会会報誌「かがやき」を学生ホールの資料コーナーに配置し、在校生に対し掲示とともに配布した。

< 評価 >

事業実施者による意見交換会が年に2回しか開催できなかった点については、各教員の日程調整が難しいためであったが、本事業の年度計画としておおむね達成できたと評価する。

Ⅲ. 今後の課題

同窓会との意見交換会の結果、同窓会と本事業との連携の必要性が明確化されたため、定期的な意見交換会の開催および、卒業生支援事業の実施および評価を行なう。また、在校生に対する同窓会の周知方法について検討する。

Ⅲ. 受託事業

1. 新人助産師の臨床実践能力育成のための研修体制構築

担当者： 永見桂子、大平肇子、岩田朋美、松本亜希、市川陽子、辻まどか
地域交流センター 川瀬浩子、岸のりこ

【事業要旨】

三重県では、保健師助産師看護師法および看護師等の人材確保の促進に関する法律の改正に伴い努力義務化された新人看護職員研修の導入および実施を促進することをとおして、助産師の離職防止・県内定着、資質向上を図っている。

本事業は、厚生労働省策定の新人看護職員ガイドラインにおける助産師が就労後1年間で到達すべき助産技術の到達目標、助産技術を支える要素「母子の医療安全の確保」、「妊産褥婦および家族への説明と助言」、「的確な判断と適切な助産技術の提供」に則り、三重県内の医療施設で働く新人助産師の臨床実践能力育成を支援することを目的とする。

【地域貢献のポイント】

三重県内の医療施設で働く新人助産師の学習ニーズに応え、継続的な卒後教育プログラムの提供をとおして臨床実践能力育成を支援することにより、新人助産師のキャリアディベロップメントに資する。

三重県内の医療施設で働く新人助産師の臨床実践能力育成を支援することにより、地域住民に提供される看護の質向上に寄与する。

I. 活動計画

三重県より「令和元年度三重県新人助産師合同研修事業」を受託し、三重県内の医療施設で働く新人助産師を対象とした4日間の研修を実施し、新人助産師が就労後1年間で到達すべき助産技術修得を支援する。昨年度の研修内容・運営方法等の評価に基づき、今年度も「新人助産師集合!!三重の仲間で“わかち合い”“みがき合い”“高め合おう”」をテーマとし、新人助産師の実践能力獲得を支援し、新人助産師同士の交流を深め、助産師としてのモチベーションを高めることを目標とした。

重点課題および数値目標は以下の4点とする。

1. 三重県内の医療施設で働く新人助産師のニーズ調査結果を令和元年度卒後教育プログラムに反映できる。
2. 継続的な卒後教育プログラムの提供に向けて三重県内医療施設の産婦人科医、小児科医、助産師等関連専門職者との連携を強化できる。
3. 新人助産師同士の交流を深めることができ、研修修了後には助産師活動の現状や課題を共有できた、専門職者として研鑽し続けたいなどの回答が得られる。
4. 企画した新人助産師合同研修に県内新人助産師30名程度が参加し、4日間の研修において過去8年間の研修参加率（平均90.0%）の水準を確保できる。

Ⅱ．活動の結果と評価

1．研修プログラムについて

令和元年 11 月 3 日（日）、12 月 14 日（土）、令和 2 年 1 月 12 日（日）、2 月 15 日（土）の 4 日間（9：30～15：30）の研修プログラムを策定した。研修初日には授乳困難の原因や哺乳行動のメカニズムを理解し、ロールプレイや事例検討をとおして「母乳育児への支援の実際」を学ぶ機会とした。また、新人助産師同士の交流をとおして自らの助産師としての未来像を描くワークショップ体験となるべく「ワールドカフェによる交流会」を設けた。2 日目には臨床での体験事例をもとに「社会的ハイリスク妊産婦の看護の実際」、「MFICU での妊産婦の看護」、「ハイリスク新生児の看護」について理解を深め、産科と NICU 双方の観点から「周産期母子ケアにおける連携」について討議し、助産師の果たす役割を考える機会とした。3 日目には産科危機的出血など「分娩時の緊急対応」について学び、母子の医療安全確保について考察を深め、さらに「診療ガイドライン 2017」での CQ のポイントを臨床場面に照らして整理し、周産期医療ケアにおけるガイドラインの意義について理解を深める機会とした。また、事例検討会「事例に基づく助産師の判断と看護実践」では所属施設ごとに提供された困難事例について討議し、対象の特性や状況に応じた医療的介入・助産ケアの選択と応用について考察する機会とした。4 日目には「早期新生児のアセスメント」、「出生後の異常の評価と対応」について学び、「ケースシナリオを用いたグループディスカッション」をとおして、早期新生児のアセスメントのポイントを言語化し、適切な看護方法を導き出すプロセスを共有するとともに、チーム医療に求められるコミュニケーション能力強化を目指している。

2．研修参加者の受講状況について

9 月に県内医療施設 106 施設（病院 22 施設、診療所 48 施設、助産所 36 施設）に開催案内を送付し参加者を募集した。応募者数は 32 名であり、3 日目までの皆出席者は 25 名（78.1%）、2 日間 5 名（15.6%）、1 日のみ 2 名（6.3%）であった。研修各日の参加者数と参加率は、1 日目 26 名（81.3%）、2 日目 31 名（96.7%）、3 日目 30 名（93.8%）であり、2 日目以降は過去 8 年間の研修参加率（平均 90.0%）以上の水準を確保することができた。研修参加者のうち、看護師の臨床経験を有する者は 9 名（1 年 3 名、2 年 2 名、3 年以上 4 名）であった。就業場所は病院 30 名（うち周産期母子医療センター 23 名、NICU 配属 4 名）、診療所 2 名であった。研修 2 日目までの時点（回答者 31 名）で分娩介助経験ありと回答した者 17 名（55.0%）、なしと回答した者 14 名（45.0%）であり、分娩介助経験なしと回答した理由は、「NICU 勤務である」、「婦人科業務を先に行っている」、「MFICU 勤務のため」、「分娩介助は 2 年目以降から」、「助産学生の実習のため」などであった。

なお、本学助産師課程選択生（4 年生）が 1 日目、2 日目とも 3 名ずつボランティアとして参加した。

3．研修参加者の自己評価について

研修初日の自己評価シート（回答者 26 名）には、なりたい助産師像として「女性の生涯に寄り添える」、「母子の安全を守ることができる」、「自らの実践に自信と責任を

もてる」、「母子とその家族と信頼関係を築き安心してもらえる」、「NICU の経験を活かし母子に寄り添える」などが挙げられ、自分自身の課題として「知識不足・技術不足・経験不足」、「臨機応変に動けない」、「積極性のなさ・依存的」、「コミュニケーション力の拙さ」、「自己開示のできなさ」などが挙げられた。研修前の学習ニーズ・研修への期待として「新たな知識・より深い知識の獲得」、「助産師に必要な基礎的な知識や技術の再確認」、「実践に活かせる知識・技術の獲得」、「助産師としての自覚・助産観の醸成」、「他施設の助産師との交流・仲間づくり」などが挙げられており、助産実践能力の向上のみならず、助産師同士の交流をとおして日常業務のなかでの悩みの解決、助産師として働くモチベーションの維持を期待していた。

今後、助産師としての学習課題と方向性を明確にしていくため、研修修了時にも自己評価シートへの記載を求め、研修初日に実施した自己評価シートへの記述内容を振り返り、研修前後で何が変わったのかあるいは変化しなかったのか省察するよう勧める予定である。

4. 新人助産師合同研修に関する評価について

毎回の研修修了時、研修参加者本人の学習の記録として研修プログラムに関する振り返りシートを記載し、持ち帰ってもらっている。研修初日は「母乳育児支援のポイントを理解できた」、「新人だからこそできる支援もあると思えた」、「自らの振り返りの機会となった」、「他の施設の仲間と話をできよかった」など、2日目には「社会的ハイリスクな方の話の聴き方などコミュニケーションが非常に大切である」、「確実な知識をもって適切なケアができるように学びを深めていきたい」、「NICU との連携についてもっと知り、母子のサポートに活かしていきたい」など、3日目には「どのようなお産でも何かが起きる可能性があるという認識をもち、準備を怠らないよう様々な事態を想定して行動していきたい」、「ガイドラインを振り返り、自分の行動が規定にそって実施できているか再確認し定着させていきたい」、「実際の事例に基づいて、リスクが高い状況や対応について学ぶことができた」などの記述がみられた。助産師として学び続ける大切さや責務の大きさを実感し、これからの課題を見出していることがうかがえる。

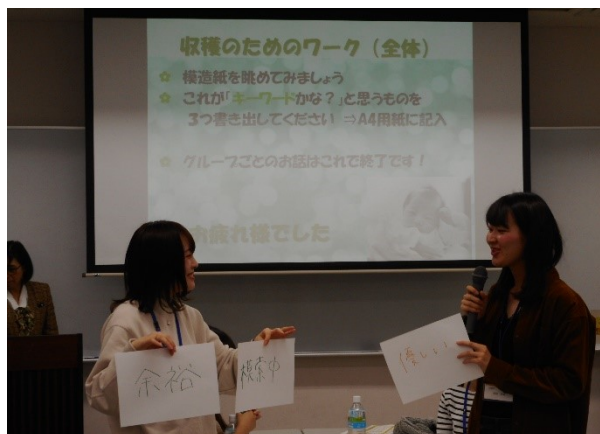
今後、研修修了時に新人助産師合同研修に関するアンケートを実施し、4日間の研修内容への満足度、事例検討会の内容・方法への満足度、ワールドカフェの内容・方法への満足度、本研修は助産師としての基本的知識や技術の修得ならびに意欲向上につながるかどうか、研修をとおして得られた助産師としての新たな課題や取り組みたいことは何か、助産師としての実践能力を高めるためにどのような卒後教育が必要かといった観点から評価を行う予定である。

本研修が新人助産師の実践能力獲得を支援し、新人助産師同士の交流をとおして、助産師としてのモチベーションを高め、専門職者として自己研鑽し続けようとする姿勢の醸成に資する内容を提供できたかどうか明確にしていく。

Ⅲ. 今後の課題

新人助産師は、昨年度と同様、周産期医療・助産ケアに関わる知識・技術の修得・向上だけでなく、助産師同士の交流を深め、助産師としてのモチベーション維持につながる研

修を望んでおり、積極的に自己研鑽の機会を得ることや先輩助産師から学ぶ重要性を認識していた。その一方で、コミュニケーション能力の強化、自信のなさ・消極性の克服などを自分自身の課題だととらえている。そのため、助産師としてのモチベーションを維持しながら、主体的・積極的に学び続けることができるよう、継続的に助産師としての成長を支える機会を提供する必要がある。自らの課題の明確化と新たな目標設定ができること、所属施設を越えた助産師同士の交流によるつながりを強化し、助産師としての自覚や助産観を高め合う仲間としての関係性を醸成していくことが課題である。



研修1日目「ワールドカフェによる
交流会」



研修2日目「周産期母子ケアにおける連携」



研修3日目「事例に基づく
助産師の判断と看護実践」

2. 周産期における母子・家族支援のための

臨床助産師の看護実践能力育成

担当者： 永見桂子、大平肇子、岩田朋美、松本亜希、市川陽子、辻まどか
地域交流センター 川瀬浩子、岸のりこ

【事業要旨】

三重県では、周産期医療の現場において慢性的な助産師不足、地域特性に基づく助産師の偏在などの課題を抱えており、助産師の県内定着・継続就業支援に向けた取り組みがなされてきた。三重県内で就業する助産師が、妊産婦の多様なニーズに応え、質の高い助産ケアを提供し、さらに関係職種と連携・協働するためには、助産師の学習ニーズや成長過程に応じた研修体制を整備し、助産実践能力獲得を支援することが必要である。

本事業は、三重県内で就業する中堅層以上の助産師を対象とした卒後教育プログラムを提供することにより、助産師の自律、実践能力向上に資することを目的とする。

【地域貢献のポイント】

三重県内で就業する中堅層以上の助産師の学習ニーズに応え、継続的な卒後教育プログラムの提供をとおして臨床実践能力や助産師育成能力の獲得を支援することにより、助産師のキャリアディベロップメントに資する。

三重県内で就業する中堅層以上の助産師の臨床実践能力や助産師育成能力の獲得を支援することにより、地域住民に提供される看護の質向上に寄与する。

I. 活動計画

三重県より「令和元年度助産師（中堅者）研修事業」を受託し、三重県内の医療施設・教育機関で就業する中堅層（助産師経験年数概ね5年以上）の助産師を対象とした3日間の研修を実施する。昨年度の研修内容・運営方法等の評価に基づき、今年度も「助産師としての役割拡大をめざして～得意分野を広げよう～」をテーマに、研修初日には周産期のクリティカルケア、2日目には成長発達段階・ライフステージに応じた母子の健康支援、3日目には子育て世代包括支援、災害時における専門性発揮と多職種連携に関する研修を企画し、中堅層以上の助産師の自律、実践能力向上に資することを目標とした。

重点課題および数値目標は以下の4点とする。

1. 三重県内で就業する助産師のニーズ調査結果を令和元年度卒後教育プログラムに反映できる。
2. 継続的な卒後教育プログラムの提供に向けて三重県内医療施設の産婦人科医、小児科医、助産師等関連専門職者との連携を強化できる。

3. 研修参加者や就業施設の臨床実践能力や助産師育成能力の向上につなげることができるとの回答が得られる。
4. 研修参加者（実人数）30名程度、かつ各日とも80%以上の出席率を確保できる。

Ⅱ. 活動の結果と評価

1. 研修プログラムについて

11月9日（土）、12月8日（日）、12月22日（日）の3日間（10:00～15:30）の研修プログラムとした。研修初日には、分娩中や産後の過剰出血に引き続く産科危機的出血など「産婦人科診療ガイドラインに基づく緊急時の対応」への理解を深め、チーム医療の視点から Team STEPPS の方略について実践的に学ぶ。薬力学・薬物動態学の観点から「女性と“くすり”」について理解を深め、周産期母子援助における助産師の役割を考察する機会とした。2日目には、「助産師の役割拡大をめざして一子どもたちに『自分のからだ』を伝える事業を中心に―」、「働き方改革と女性の健康―多様で柔軟な働き方の選択を支援するために―」をテーマにライフステージに応じたウィメンズヘルスケアと助産師の役割拡大について考える機会とした。3日目には、「地域における子育て世代包括支援」に精力的に取り組む医療機関の取り組みを知り、「災害時における専門性の発揮と多職種連携―地域保健活動の視点から―」災害にそなえ今なすべきことを考えることをとおして、助産実践への示唆を得る機会とした。

2. 研修参加者の受講状況について

9月に県内医療施設106施設（病院22施設、診療所48施設、助産所36施設）、教育機関4施設に開催案内を送付し、参加者を募集した。応募者は1日目6名、2日目11名、3日目11名であり、のべ応募者数は28名であった。応募者（実人数）14名の研修申込み日数の内訳は1日のみ5名、2日間4名、3日間5名であった。研修各日の出席者数と出席率（出席者／応募者）は、1日目6名（100%）、2日目10名（90.9%）、3日目9名（81.8%）であった。数値目標の研修参加者（実人数）30名程度には至らなかったものの、各日とも80%以上の出席率を確保することができた。研修参加者13名（1日のみの応募者1名欠席）の就業場所は病院7名（うち周産期母子医療センター1名）、診療所2名、助産所2名、保健センター2名であった。

なお、本学助産師課程選択生（4年生）が各日2名ずつボランティアとして参加した。

3. 助産師（中堅者）研修に関する評価について

研修参加者のべ25名のうち、研修各日終了時のアンケートへの回答者（回収率）は、1日目6名（100%）、2日目10名（100%）、3日目9名（100%）であった。

本研修が自身または就業施設の助産実践能力の向上につながるかとの問いに、1日目には大変そう思う3名（50.0%）、まあまあそう思う3名（50.0%）であり、その理由として、「チームワークの大切さを実感、再認識したので、ぜひ現場で活かせるようにしたい」、「薬物動態について学べた」などが挙げられた。2日目には大変そう思う2名（20.0%）、まあまあそう思う8名（80.0%）であり、「自分のやりたいことを見つけて、学びを深めていきたいという思いが強くなった」、「働き方を考えていきたい」などが挙げられた。3日目には大変そう思う7名（77.8%）、まあまあそう思う2名

(22.2%)であり、「病院で終わりではなく、その後が本当に大切であることを改めて理解した」、「災害マニュアルを見直そうと思った」などが挙げられた。

研修内容が期待通りであったかについては、1日目には期待通り3名(50.0%)、まあまあ期待通り2名(33.3%)であり、その理由は「緊急時の対応でのチームで協力することの大切さを学ぶことができた」、「薬の作用や副作用だけでなくどのようなことが体の中で起こって作用していくのかも学んでいきたい」などであった。2日目は期待通り3名(30.0%)、まあまあ期待通り7名(70.0%)であり、その理由は「助産師としての役割拡大や働き方改革と女性の健康はとても興味深く、今後の助産師人生にとっても参考になった」、「助産師の役割が妊娠期や分娩・産褥期だけでなく、広義の助産師としての役割を考え直すきっかけとなった」などであった。3日目には期待通り6名(66.7%)、まあまあ期待通り3名(33.3%)であり、「関心のあるテーマでわかりやすく勉強になった」、「色々な職種と関わっていかないといけないと感じたし、動きださなければならないと思った」などの理由が挙げられた。

研修会運営については、1日目にはよい4名(66.7%)、まあまあよい2名(33.3%)であり、その理由は「時間があっという間にすぎた」、「グループワークが楽しかった」などであった。2日目にはよい4名(40.0%)、まあまあよい6名(60.0%)であり、「他の施設の方との交流もでき、参加できてよかった」、「自分のからだを伝える事業についてもっと話を聞いてみたかった」などの理由が挙げられた。3日目にはよい7名(77.8%)、まあまあよい2名(22.2%)であった。

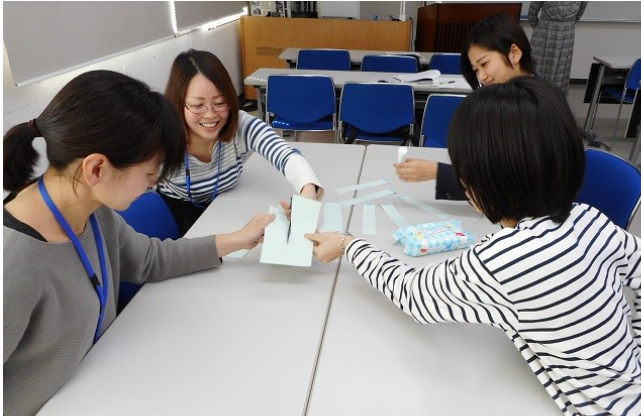
研修をとおして得られた今後の課題として、1日目には「内容を整理してから報告する」、「2回チャレンジコール」、「くすりについてもっと勉強しなければならないと思う」、2日目には「自分自身の健康も守る」、「助産師の能力の向上」、3日目には「子育て支援について切れ目ないかわり・ケアを他職種や他の助産師と協力してやっていきたい」、「災害看護について関心がなかったため日頃から取り組めるようにしておきたい」などが挙げられた。今後開催を希望する研修内容として、「胎児心拍数モニタリング」、「周産期におけるメンタルヘルス」、「愛着障害」、「新生児蘇生法 NCPR A コース」、「からだ先生の実際」、「子ども(小中高)への命の教育」、「後輩育成(新人教育・学生指導)」などが挙げられた。

Ⅲ. 今後の課題

今年度も昨年度に引き続き、「助産師としての役割拡大をめざして～得意分野を広げよう～」をテーマに、周産期のクリティカルケア、ライフステージに応じた母子(女性)の健康支援、地域における子育て世代包括支援の実践、災害時における専門性発揮と多職種連携に関する研修内容などを組み込んだ。参加者は昨年度の約半数に留まったが、遠隔地(東紀州)の医療施設や、保健センターに所属する助産師の参加が得られた。

気候変動・大規模災害など自然災害のリスクが高まっている今日、助産師には妊娠期から子育て期にわたる切れ目のない支援を提供するためだけに留まらず、多職種連携・協働、成長発達段階・ライフステージに応じたウィメンズヘルスケア能力のさらなる向上が求められる。今後も地域特性や社会情勢をみすえ、目玉となる研修テーマを掲げ助産師にとって魅力ある研修としていく。また、助産師の就業場所・雇用形態などを考慮した学習内容

の工夫、新人助産師合同研修以降中堅層に至るまでの助産師への学習機会の提供など、大学だからこそ企画できる独自性のある卒後研修プログラムとしていくことが課題である。



研修1日目「産婦人科診療ガイドラインに基づく
緊急時の対応」



2日目「助産師としての役割拡大をめざして」



研修3日目「災害時における専門性の発揮と
多職種連携」

3. 認知症対応力向上研修

担当者：地域交流センター 星野郁子、永見桂子、阿部敬子、三鬼理恵、岸のりこ

【事業要旨】

本事業は、三重県の委託をうけ、病院勤務の医療従事者及び指導的立場の看護職員の認知症対応力向上のため、以下の研修を実施するものである。

1. 病院勤務の医療従事者向け認知症対応力向上研修（半日研修）

三重県内の病院に勤務する医療従事者（医師、看護師等）に対し、認知症の人や家族を支えるために必要な基本知識や、医療と介護の連携の重要性、認知症ケアの原則等の知識について習得するための研修を実施することにより、病院での認知症の人の手術や処置等の適切な実施の確保を図ることを目的とする。

2. 看護職員認知症対応力向上研修（3日間研修）

三重県内の指導的立場の看護師に対し、医療機関等に入院から退院までのプロセスに沿った必要な基本知識や、個々の認知症の特徴等に対する実践的な対応力を習得し、同じ医療機関等の看護職員に対し伝達することで、医療機関内等での認知症ケアの適切な実施とマネジメント体制の構築を目的とする。

【地域貢献のポイント】

- 医療施設等の現場で認知症ケアに携わる医療従事者の質の向上に貢献する。
- 研修で培った専門的な知識や実践的対応力を共に働く看護職や他の職種の人に指導できる人材の育成に貢献する。

I. 活動計画

厚生労働省老健局長通知「認知症地域医療支援事業の実施について」の標準的なカリキュラムに基づき、研修を実施する。

1. 病院勤務の医療従事者向け認知症対応力向上研修（半日研修）

開催回数：3回

対象者：三重県内の病院で勤務する医師、看護師等の医療従事者

定員：1回あたり100名程度

会場：昨年度からの“中勢地域のみで開催では遠方からの参加者が少ない”という課題を受け、今年度は地域の医療施設へ協力を仰ぎ、3会場で実施する。

2. 看護職員認知症対応力向上研修（3日間研修）

開催回数：1回

対象者：三重県内の医療施設で勤務する指導的立場の看護職員で、3日間の研修に全て参加し、研修受講後に自施設での研修を実施し実施報告書を提出する事ができる者

定員：100名程度

会場：三重県立看護大学

Ⅱ．活動の結果と評価

半日研修、3日間研修ともに、県内の約 200 施設（医療施設等）へ開催案内を送付し、受講者を募集した。申し込みを受けた順に受講者を決定し、受講決定通知書を送付した。また、研修修了者には、三重県知事より修了証書が交付された。

1．病院勤務の医療従事者向け認知症対応力向上研修（半日研修）

- 1) 開催日 第1回：令和元年 8 月 2 日（金）
 第2回：令和元年 9 月 25 日（水）
 第3回：令和元年 11 月 1 日（金）
- 2) 会 場 第1回：三重県立看護大学（津市）
 第2回：御浜町中央公民館（御浜町）
 第3回：ヨナハ総合病院在宅ケアセンター（桑名市）
- 3) 受講者数 第1回：49 名、第2回：22 名、第3回：57 人
- 4) アンケート結果

受講者アンケートによると、受講者の職種は、看護師が最も多く 83.3%であった。他に、ケースワーカー、検査技師、作業療法士等の参加があった。受講理由は、「認知症に興味がある」が最も多く、次いで「自己研鑽」、「勧められた」の順であった。

研修の全体評価では、とてもよかった（第1回 40.8%、第2回 59.1%、第3回 51.0%）、よかった（第1回 51.0%、第2回 40.9%、第3回 44.9%）を合わせて約 95%の回答があった。

2．看護職員認知症対応力向上研修（3日間研修）

- 1) 開催日：令和元年 9 月 1 日（日）、2 日（月）、3 日（火）
- 2) 会 場：三重県立看護大学（津市）
- 3) 受講者数：43 名
- 4) アンケート結果

受講者は、三重県内の 24 医療施設から参加があった。受講者アンケートによると受講理由は、「勧められた」が最も多く、次いで「認知症に興味がある」、「自己研鑽」の順であった。研修の全体評価では、とてもよかった 42.9%、よかった 57.1%を合わせて 100%の回答があった。

病院勤務の医療従事者向け認知症対応力向上研修については、中勢地域のみで開催では遠方からの参加者が少ないことをうけ、医療施設へ協力を仰ぎ、北勢及び東紀州地域でも開催した。このため、広域的に認知症ケア等に係る知識の習得に寄与するとともに、医療施設へ直接出向くことで多職種の参加が得られやすくなった。

Ⅲ．今後の課題

今後は、伊賀、南勢地域での開催についても検討することとする。

看護職員認知症対応力向上研修は、高評価を得られる研修でもあり、研修案内の時期を早くするなど、より多くの方に参加していただける工夫を検討することとする。

（担当：星野）

IV. 認定看護師教育課程「認知症看護」

1. 認定看護師養成

2. 認定看護師フォローアップ研修

1. 認定看護師養成

担当者：小松美砂、永見桂子、星野郁子、奥野歩、阿部敬子、三鬼理恵

【事業要旨】

本教育課程は、看護の質向上及び看護職者のキャリア支援に向けた教育を行うことを目的とし、認知症看護分野において、実践の基盤となる科学的思考と熟練した看護技術を用い、看護師としての倫理観に基づいた役割機能を発揮できる人材を育成する。

【地域貢献のポイント】

認知症者とその家族の支援に関する最新の知識と技術を習得し、水準の高い看護実践を、共に働く看護職や他職種と協働して提供できる人材を育成することにより、医療施設等における認知症看護の質的向上に貢献する。

I. 令和元年度の活動の実際

1. 教育期間：5月10日～2月21日
2. 授業時間：90分を1時限とし、原則1日5時限
3. 授業科目：

区分	科目	時間数（単位）
共通科目	医療安全学：医療倫理	16（1）
	医療安全学：医療安全管理	16（1）
	医療安全学：看護管理	16（1）
	臨床薬理学：薬理作用	16（1）
	チーム医療論（特定行為実践）	16（1）
	相談（特定行為実践）	16（1）
	指導	16（1）
	医療情報論	16（1）
	〔小計〕	〔128（8）〕
専門科目	認知症看護原論	16（1）
	認知症基礎病態論	16（1）
	認知症病態論（認知症の原因疾患と治療）	46（3）
	認知症に関わる保健・医療・福祉制度	16（1）
	認知症看護倫理	16（1）
	認知症者とのコミュニケーション	16（1）
	認知症看護援助方法論Ⅰ（アセスメントとケア）	46（3）
	認知症看護援助方法論Ⅱ（生活・療養・環境づくり）	30（2）
	認知症看護援助方法論Ⅲ（ケアマネジメント）	30（2）
	認知症者の家族への支援・家族関係調整	16（1）
	〔小計〕	〔248（16）〕
演習 および 臨地実習	学内演習	90（3）
	臨地実習	180（4）
	〔小計〕	〔270（7）〕
合計		646 時間 〔31 単位〕

4. 研修生の概要

- 1) 研修生：男性 6 名（20％）・女性 24 名（80％）計 30 名、平均年齢 42.0 歳
- 2) 所属施設：病院 28 名（93％）・その他（福祉施設等）2 名（7％）
- 3) 所属施設所在地：県内 12 名（40％）・県外 18 名（60％）



Ⅱ. 活動の結果と評価

令和元年度は 2 名の研修生が退学を申し出たため、28 名が本教育課程を修了した。2 名には就学継続が困難となる事由が生じたことから、やむを得ない状況であったと思われる。

令和元年度日本看護協会認定審査においては、平成 30 年度修了生 30 名全員が合格したため、本教育課程より 2 年間で 60 名の認知症看護認定看護師を育成することができた。60 名のうち 34 名は三重県内の医療機関や高齢者施設等に所属する修了生であり、平成 30 年度に引き続き令和元年度も修了生を対象としたフォローアップ研修を実施したため、三重県の認知症看護の質的向上に寄与することができたと考える。

Ⅲ. 今後の課題

研修生にとって充実した学修環境を確保できるよう、引き続き教育体制や実習環境を整備し、研修生の実践力を高めるための事業内容を検討し実施していく。特に、研修生が就学を継続できるよう、健康状態や勤務状況等に留意し、困難な状況が生じた場合には所属施設と共に早期に対応する支援体制を整えることが課題である。

令和元年度のフォローアップ研修は、修了生の要望をふまえ、現場での活動報告を含めた内容としたため、今後も修了生にとって効果的な研修を継続できるよう検討していきたい。

2. 認定看護師フォローアップ研修

担当者：小松美砂

地域交流センター（永見桂子、星野郁子、阿部敬子、三鬼理恵、奥村莉子）

【事業要旨】

本教育課程修了生が自施設や地域において、より質の高い看護を実践するため、フォローアップ研修を実施する。研修においては、最新の知見や先駆的な活動を共有することによって、認定資格取得後の各自の活動を振り返り、自己研鑽だけでは補えない資質の向上を図る。

【地域貢献のポイント】

- 医療施設等の現場で認知症ケアの質の向上に貢献する。
- 研修で培った専門的な知識や実践的対応力を共に働く看護職や他の職種の人に指導できる人材の育成に貢献する。

I. 活動計画

対 象 者：本学の認定看護師教育課程修了者（60名）

研修日時：2020年2月1日（土）9時～12時

会 場：三重県立看護大学

研修内容：認知症看護に関する講義および医療機関や高齢者施設における活動報告（修了後2年目の認定看護師）を行う。

II. 活動の結果と評価

1. 参加者の概要

参加者54人。内訳としては、本学における認定看護師教育課程「認知症看護」の修了生の1期生27人、2期生27人。参加者のうち、県内から30人、県外から24人が参加した。

2. 研修内容

1) 特別講義「認知症看護認定看護師が創る共生社会」

講師：富本秀和 氏（三重大学大学院医学系研究科 教授）

2) 活動報告

(1) 「認知症ケア加算Ⅰと多職種連携」

講師：高坂香奈子 氏（羽島市民病院 認知症看護認定看護師）

(2) 「病棟師長である認定看護師としての取り組み」

講師：谷口陽子 氏（榊原温泉病院 認知症看護認定看護師）

(3) 「認知症とともに暮らす」

講師：芝原弥千代 氏（複合型介護施設群しおりの里 認知症看護認定看護師）

(4) 「初期認知症支援チームとの認知症看護認定看護師の役割」

講師：横山朋恵 氏（八千代病院 認知症看護認定看護師）

(5) 講評：富本秀和 氏（三重大学大学院医学系研究科 教授）



富本教授の講義

3. 参加者アンケート結果

アンケート回収数 53（回収率 98.1%）

参加した理由（複数回答）としては、「自己研鑽」が最も多く 51 人、次いで「興味のある内容だった」が 16 人であった。

満足度では、とてもよかった 45 人（91.8%）、良かった 4 人（8.2%）と、合わせて 100%の回答があった（無回答除く）。

Ⅲ. 今後の課題

認知症看護認定看護師のネットワークづくりにも繋がるよう、研修企画を検討する。

（担当：星野）

V． 地域交流センター企画事業

1． 講師派遣

1) 出前講座

担当者：＜講師＞出前講座テーマ登録教員

＜運営＞地域交流センター

【事業要旨】

教員が、自身の教育、研究、社会活動の専門性や成果をもとに、保健・医療・福祉の専門家および県民を対象としたテーマを提案し、依頼に応じ、その講座を出張して行う。

【地域貢献のポイント】

- ・本学教員の研究や社会的活動の成果として看護・医療・健康に対する知識を、県民に還元するとともに、県民の看護・医療・健康への関心や意識を高める。
- ・看護職向けの講座を提供し、県内の看護の質向上に貢献する。

I. 活動計画

＜数値目標＞

過去3年間(H28-30)における出前講座の平均実施件数（68件）を維持する。

前年度の依頼テーマ率（30/40, 75.0%）を維持する。

前年度の参加者総数2,945人、公開となった講座数4件を上回る。

＜実施計画＞

- ・昨年度からの変更点

受付上限件数を、教員ごとではなく、各テーマごと（5件以内）に決定するよう変更した。また、広く県民が参加できる公開の講座としていただけるよう、申込書に依頼者から了解を得る欄を設けた。さらに、子育て世代や子ども向けの講座があるため、講師派遣の案内パンフレットを子育て支援センターにも配布した。

- ・実施計画

1. 平成31年3月～4月に、全教員より出前講座のテーマを募集する。
2. 4月中に、講師派遣の案内パンフレットを作成、県内各所に送付するとともに、5月上旬に本学ホームページに掲載する。
3. 申込受付の期限は、令和元年11月29日とする。
4. 申込があった際には、随時、担当教員と日程調整を行い、講師を派遣する。
5. 派遣は、令和2年3月末日までとする。
6. 決定した出前講座が、広く県民が参加できる公開の講座として依頼者から了解を得た場合には、本学ホームページに募集記事を記載し、当センターの協力による公開講座として実施する。
7. 1テーマあたりの受付上限件数に達したテーマは、本学ホームページに掲載し、情報の刷新を速やかに行う。さらに受付上限件数に達したテーマへの依頼者には、同テーマの当センターの協力による公開講座を紹介する。

Ⅱ．活動の結果と評価

1．出前講座のテーマ

今年度の出前講座のテーマ（表1）は、【A 健やかな暮らしのために】23件、【B 将来の職業選択のために】5件、【C 高めよう保健・看護の力】5件、計33テーマが登録された。対象は幼児から高齢者までと幅広く、概要は健康の定義での「身体的、精神的、社会的側面」に対応できていた。また、1テーマあたりの受付上限件数は2～5件であった。

表1 令和元年度 出前講座のテーマ一覧

A 健やかな暮らしのために

項目	No	テーマ	対象	概要	受入可能件数
A	1	タッピングタッチでこころと体をリフレッシュ	幼児～高齢者	家族、友人、同僚同士、お互いのケアの方法としてタッピングタッチを行い、心と体をリラックス、リフレッシュさせ、ストレスを減らしたり、関係性をよくするために行います。	5
A	2	親子で英語を学ぼう	一般(0～3歳のお子様と保護者)	親子で英語の歌に合わせて手遊びをします。保護者の方には、乳幼児期の英語学習の方法をご紹介します。	5
A	3	キッズ英会話	一般(幼児から小学6年生)	英語の歌やゲームを通して英会話を学びます。	5
A	4	子どもの自己肯定感を育てる関わり方	一般、保護者、教職員等	子ども達の自己肯定感について実際の子どもの様子やデータから分かりやすく解説します。子ども達のやる気を育てる関わり方を一緒に考えていきましょう。	5
A	5	地域で支えよう！子どもの成長発達と毎日の生活習慣	一般、保護者、関係職員等	夜更かしすると幸せホルモンが減ってしまう？子どもの成長発達に大きく影響する生活習慣を具体的に解説します。睡眠と食事の関係など希望テーマにも対応します。	5
A	6	思春期男子のこころとからだを理解しよう	主に中学生や高校生の男子に関わる方(中学生・高校生の男女が対象の場合でも対応可能です)	思春期は「こころ」も「からだ」も大きく変化する時期です。しかし、男子は女子ほどその変化に注目されていなかったり、性教育の十分さも指摘されたりしています。思春期男子の特徴を知り、皆さんでよりよい関わり方を考えていきましょう。(中高生向けの場合、内容は要相談となります。)	5
A	7	「普通」ってなんだろう	高校生・一般	「普通の人であること」を私たちはしばしば求められたり、みずから望んだりします。でも「普通である」とは一体どんなことなのでしょう。このことを社会学の観点から一緒に考えていってみましょう。	2
A	8	知っておきたい！「女性のこころとからだ」	一般女性(思春期から老年期まで)	ライフステージによって女性は各時期特有の心身の変化に向き合うことになります。健康管理・QOL向上の視点からセルフケアについて学びましょう。	4
A	9	女性の健康づくり—女性ホルモンを味方につけよう	一般	女性の心と体を健やかに保つコツを一緒に考えましょう。女性ホルモンの役割を知って、快適な生活を送りましょう。簡単なストレッチや呼吸法も練習します。	3
A	10	呼吸法と瞑想で心と身体をすこやかに！	一般	ヨガの呼吸法と瞑想は、心身をリラックスさせ、イライラやストレスを減らすことができます。実際に呼吸法と瞑想を練習します。	3
A	11	楽しく・おいしく減塩しましょう！	地域にお住まいの方	健康増進、生活習慣病予防のためにも減塩は重要です。そこで、地域にお住まいのみなさんに無理なく簡単に減塩できる秘策をお教えします。	5
A	12	薬に関する四方山話	一般	近年、薬局でも様々な薬を容易に入手ができるが、その使用に際しての知識は十分とは言えない。本講座では、風邪薬等の一般的によく使われる薬の正しい使い方等について解説する。	あわせて4
A	13	血栓症の発症原因とその治療薬	一般	近年、医療の高度化に伴い、深部静脈血栓症の患者数が激増している。本講座では、種々の血栓性疾患について、個々の発症原因と共に、それぞれの治療薬や日常的予防法を分かりやすく解説する。	
A	14	知って防ごう熱中症	中学生～一般、看護職	気温や湿度が高いと、熱中症になるリスクが高まります。暑い夏を健康に過ごせるよう、その原因や予防法を分かりやすく説明します。	3
A	15	サルコペニアって何？	一般、看護職	加齢によって筋肉が減っていくサルコペニアについて分かりやすく解説します。	3
A	16	日常生活で運動を	一般、看護職者等	自重を活用した筋トレや足腰に優しいジョギングで健康の維持増進を図りましょう。	2
A	17	コグニサイズで認知症予防	一般、看護職者等	体と頭を同時に使う二重課題は認知症予防に役立つと言われています。一緒にコグニサイズ*を行いましょう。 *長寿医療研究センター開発	2

A 健やかな暮らしのために

項目	No	テーマ	対象	概要	受入可能件数
A	19	社会的活動としての話すこと・聴くこと	高校生・一般	日頃当たり前のように行っている話すことや聴くことですが、じつはとても精密な方法にもとづいて作り上げられています。この点を具体的な事例を検討しながら確認していきましょう。	2
A	20	知ってるようで知らない感染看護	医療施設・保健福祉関係機関の職員、一般、学生	最近話題の感染症の話題をまじえて、感染対策について楽しくやわらかくお話いたします。リクエストにもできるだけお答えします。リピーターも大歓迎です。	5
A	21	心肺蘇生法をマスターしよう！	一般	心肺蘇生法は、いざという時に実践できなければ助かる命を救うことはできません。簡易的な一次救命処置（心臓マッサージおよびAEDの取り扱い）について、実際に体験していただきます。	5
A	22	救急車の適切な利用について知ろう！	一般	救急要請をする際に、確認すべき症状について理解し、救急要請が必要か否かを判断できるようにしていただきます。	5
A	23	VDT 作業による疲労を防ごう！ 快適な職場を目ざすコンピュータ労働の人間工学	学生・看護職・医療職・一般	メールやインターネットが当たり前の時代になりましたが、人は大昔から変わっていません。「読み」、「書き」、「そろばん」がパーソナルコンピュータに変わり、私たちの労働は便利になりました。しかし、パーソナルコンピュータの普及は人の視覚系や筋骨格系への負担を増加させるばかりか、メンタルストレスなど多くの課題を残しています。本講座では、負担の少ない快適なコンピュータ労働の環境を構築するため、産業保健人間工学の立場から解説を行う予定です。	5

B 将来の職業選択のために

項目	No	テーマ	対象	概要	受入可能件数
B	1	どんな仕事に興味があるかな？	高校生（看護職選考でなくても可）	世の中にはたくさんの職業があります。「どんな仕事があるのか」や「今の自分は、どんな仕事に興味・関心を持っているのか」を知り、職業選択の参考にしてください。	3
B	2	看護の仕事について	小中学生	将来の職業選択の一助となるように、小中学生を対象に、一般病院に勤務する看護師の仕事を中心に話します。	5
B	3	看護職（保健師、助産師）のお仕事を知ろう	中学・高校生	保健師、助産師のお仕事をご存じですか？看護師との違いを具体的にお伝えします。職業選択の幅を広げてください。	5
B	4	看護大学で学ぶ「看護技術」の授業	高校生	看護職になるために必要な学習内容を知るために、看護大学で実際に行われている「看護技術」の授業の一部を体験していただきます。	5
B	5	大学で学ぶこと	高校生	誰でも選べなければならぬ大学に入学できる状況の今日、改めて大学で学ぶことの意義について考えます。	5

C 高めよう保健・看護の力

項目	No	テーマ	対象	概要	受入可能件数
C	1	医療事故はなぜ起きる？ ーヒューマンエラーを防ぐための人間工学ー	学生・看護職・医療職・一般	エラーを起こさない人はいません。忘れ物から交通事故、さらには原子力発電所などの人為的事故はなぜ起こるのか？人間とシステムの特性、そして両者の関わり合いから詳しく説明をします。本講座では、さまざまな分野におけるヒューマンエラーについて説明を行うとともに、その人間工学的な対策について解説を行います。希望によっては医療分野におけるヒューマンエラーとその分析手法についても解説をします。（90分間の講義時間は必要ですが60分間でも一部を省略して実施可能です。）	5
C	2	ケアとパターナリズム	一般・看護職者	医療倫理の中心原理がパターナリズムから患者の自律尊重へと移り変わって久しい。であるならば、もはや一切のパターナリズムは不要なのか。いや、よりよいケアのためにはパターナリズムがむしろ必要となる場面もあるのではないかと。本講座では、倫理学のアプローチからケアとパターナリズムとの関係を、みなさんとともに考えます。	5
C	3	人工呼吸器装着中の看護	看護職	苦手に感じる方が多い人工呼吸管理。モードの理解、グラフィックの見方、アセスメントなどご希望のテーマについて、集中ケア認定看護師が直接サポートします。少人数でのグループ学習、病棟・院内学習などに活用ください。	5
C	4	認知症ケアのスキルアップセミナー	看護師・介護職	日々向き合っている認知症者の理解をさらに深め、ケアの質を高めていく	2
C	5	職場のメンタルヘルス	医療職	感情労働といわれる医療職のメンタルヘルスについて解説します。	5

2. 申込概要

申込件数は 87 件、実施件数（表 2）は 74 件で、13 件は日程等調整ができず実現できなかった。出前講座 33 テーマのうち、29 テーマ（87.9%）に依頼があった。1 テーマあたりの上限件数に達したため、申込期限前に受付を終了したテーマは 11 件だった。

今年度の実施件数は、過去 3 年間（H28-30）における出前講座の平均実施件数（68 件）を維持し、前年度の依頼テーマ率（75.0%）より 12.9 ポイント高かったが、前年度の実績 78 件を下回った。調整できなかった依頼者数が 13 件と多いため、依頼者への連絡を密に行い、ご依頼に沿えるよう調整が必要であった。

表 2 令和元年度 出前講座実施件数一覧

項目	No	テーマ	実施件数
A 健やかな暮らし のために	1	タッピングタッチでこころと体をリフレッシュ	4
	2	親子で英語を学ぼう	1
	4	子どもの自己肯定感を育てる関わり方	3
	5	地域で支えよう！子どもの成長発達と毎日の生活習慣	2
	6	思春期男子のこころとからだを理解しよう	4
	7	「普通」ってなんだろう	2
	8	知っておきたい！「女性のこころとからだ」	3
	9	女性の健康づくり—女性ホルモンを味方につけよう	1
	10	呼吸法と瞑想で心と身体をすこやかに！	3
	12	薬に関する四方山話	3
	13	血栓症の発症原因とその治療薬	1
	14	知って防ごう熱中症	3
	15	サルコペニアって何？	3
	16	日常生活で運動を	2
	17	コグニサイズで認知症予防	3
	18	認知症の人にやさしい街づくり	4
	19	社会的活動としての話すこと・聴くこと	2
	20	知ってるようで知らない感染看護	5
	21	心肺蘇生法をマスターしよう！	3
	22	救急車の適切な利用について知ろう！	1
	23	VDT 作業による疲労を防ごう！ 快適な職場を旨とするコンピュータ労働の人間工学	1
B 将来の職業選択 のために	1	どんな仕事に興味があるかな？	1
	2	看護の仕事について	1
	3	看護職（保健師、助産師）のお仕事を知ろう	2
C 高めよう保健 ・看護の力	1	医療事故はなぜ起きる？ —ヒューマンエラーを防ぐための人間工学—	4
	2	ケアとパターンリズム	2
	3	人工呼吸器装着中の看護	1
	4	認知症ケアのスキルアップセミナー	5
	5	職場のメンタルヘルス	4
	計	1テーマあたりの上限件数に達したテーマ11件	実施74件

3. 受講者の概要（表3）

1) 依頼者の概要

出前講座の領域では、【A 健やかな暮らしのために】、【C 高めよう保健・看護の力】、【B 将来の職業選択のために】の順に多かった。依頼者の分類では、【A 健やかな暮らしのために】は教育機関 18 件、社会福祉機関 14 件、その他 10 件、行政機関 3 件、ボランティア団体 3 件、医療機関・専門職団体・NPO 法人がそれぞれ 2 件と、多岐にわたる依頼者であった。また、【B 将来の職業選択のために】は教育機関 4 件、【C 高めよう保健・看護の力】は医療機関 11 件、社会福祉機関 5 件であった。昨年と同様の依頼者が複数あり、また昨年までは依頼がなかった保育施設からの依頼もあった。

2) 参加者数（1.31 時）

参加者総数（予定も含む）は 2578 名であった。そのうち依頼者側と当センターとの協力の公開講座（色つき枠）として 15 件実施し、442 名（予定も含む）の参加者を得た。前年度の公開となった講座数 4 件を上回ったが、参加者総数は 367 人少ない結果となった。前年度の実施実績より少なかったことが影響していた。

3) アンケート調査による満足度（1.31 時）

アンケート回収数 2182（未実施以外の配布数 2443 回収率 88.6%）

講座に対する満足度（「とてもよかった」～「よかった」の割合）は、【A 健やかな暮らしのために】92.8%～100%、【B 将来の職業選択のために】94.6%～100%、【C 高めよう保健・看護の力】81.4%～100%と高かった。感想の自由記載では、【A 健やかな暮らしのために】・【B 将来の職業選択のために】では、「医療の知識がないものにも、わかりやすい内容であった」「漫然としていたことがはっきりした」「家でも職場でもやってみたい」等、好評であった。また【C 高めよう保健・看護の力】では、「身近な事例で、より理解が深まった」「すぐ実践できる内容であった」等、日々の看護実践に役立つ内容であったことが伺えた。

以上の結果より、講座の満足度は高く、また自由記載の内容から、本学教員の看護・医療・健康に対する知識を、県民に還元し、県民の看護・医療・健康への関心や意識を高めることができたと評価する。また看護職では、県内の看護の質の向上の一助になったと評価する。

表3 令和元年度 領域別分類別受講者の概要

2020.1.31 時点

領域	分類	No	テーマ	開催日	曜日	依頼者	参加者数	満足度
A 健やかな暮らしのために	教育機関 18件	1	タッピングタッチでこころと体をリフレッシュ	9月18日	水	四日市市立下野小学校PTA	32	100
				10月17日	木	津市立南立誠小学校	122	100
				10月24日	木	松阪市立朝見小学校	23	100
				11月26日	火	豊里中学校区養護教諭	5	100
		4	子どもの自己肯定感を育てる関わり方	10月10日	木	学童保育クローバー	17	100
				11月27日	水	城南小学校	26	100
		5	地域で支えよう！子どもの成長発達と毎日の生活習慣	10月30日	水	亀山市立白川小学校	40	96.3
		6	思春期男子のこころとからだを理解しよう	6月27日	木	津市立神戸小学校	14	92.9
				11月26日	火	三重県立特別支援学校 玉城わかば学園高等部	63	未実施
				12月13日	金	三重県立杉の子特別支援学校石薬師分校	26	未実施
				12月17日	火	三重県豊学校高等部	25	未実施
		8	知っておきたい！「女性のこころとからだ」	12月13日	金	三重県立杉の子特別支援学校石薬師分校	19	未実施
		10	呼吸法と瞑想で心と身体をすこやかに！	7月5日	金	津市優公民館	22	100
		12	薬に関する四方山話	1月10日	金	津市芸濃公民館	13	100
		17	コグニサイズで認知症予防を	11月6日	水	あさひライブラリー	15	100
		19	社会的活動としての話すこと・聴くこと	12月10日	火	伊勢市学校事務共同実施協議会	34	93.8
		21	心肺蘇生法をマスターしよう！	8月20日	火	亀山中学校	13	100
		22	救急車の適切な利用について知ろう！	12月13日	金	鈴鹿市学校保健会養護部会	43	97.6
	社会福祉機関 14件	10	呼吸法と瞑想で心と身体をすこやかに！	9月12日	木	三重ベタニア	17	100
		12	薬に関する四方山話	9月13日	金	むつみ福祉会	19	100
		14	知って防ごう熱中症	8月19日	月	木曽岬町社会福祉協議会	16	100
		17	コグニサイズで認知症予防を	7月12日	金	ナーシングホームもも・いなべ	20	100
				8月6日	火	救護施設長谷山荘	19	100
		18	認知症の人にやさしい街づくり	12月5日	木	尾鷲市社会福祉協議会 尾鷲市地域包括新センター	43	100
				2月28日	金	津中部東地域包括支援センター	30	
				3月5日	木	南伊勢町地域包括支援センター	25	
		20	知ってるようで知らない感染看護	9月18日	水	志摩市介護老人保健施設 志摩の里	33	100
				9月24日	火	特別養護老人ホーム 豊野みかんの里	34	100
				9月26日	木	特別養護老人ホーム 芹の里	41	100
				10月9日	水	老人短期入所 みかんの里	19	100
				12月13日	金	むつみ福祉会	22	100
		23	VDI 作業による疲労を防ごう！ 快適な職場を目指すコンピュータ労働の人間工学	7月12日	金	尾鷲市地域包括センター	23	100

領域	分類	No	テーマ	開催日	曜日	依頼者	参加者数	満足度
A 健やかな 暮らしの ために	その他 10件	4	子どもの自己肯定感を育てる関わり方	9月27日	金	リボン会	8	100
		7	「ふつう」ってなんだろう	1月29日	火	放課後児童クラブレインボー駅前	19	100
		8	知っておきたい！「女性のこころとからだ」	3月25日	水	体操サークル(サロン白塚内)	10	
		10	呼吸法と瞑想で心と身体をすこやかに！	10月16日	水	マーチの会	5	100
		12	薬に関する四方山話	10月25日	金	白子駅前長寿会「コスモス」	37	94.2
		13	血栓症の発症原因とその治療薬	10月18日	金	内部地区婦人会	21	100
		14	知って防ごう熱中症	6月27日	木	中勢森林組合	34	100
				7月2日	火	白子駅前長寿会「コスモス」	32	96.3
		15	サルコペニアって何？	8月8日	木	名古屋市税友会三重県支部	33	100
				1月9日	木	彰見寺	14	100
	行政機関 3件	5	地域で支えよう！子どもの成長発達と毎日の生活習慣	6月3日	月	名張市役所 福祉子ども部 健康・子育て支援室	27	100
		16	日常生活で運動を	8月30日	金	東員町役場 健康づくり課	14	92.8
				10月25日	金	東員町役場 健康づくり課	11	100
	ボランティア団体 3件	2	親子で英語を学ぼう	9月27日	金	子育てサロン「よりあい」	9	100
		15	サルコペニアって何？	12月19日	木	津傾聴ボランティア会	8	100
		18	認知症の人にやさしい街づくり	9月19日	木	津傾聴ボランティア会	9	100
	医療機関 2件	21	心肺蘇生法をマスターしよう！	8月22日	木	第二岩崎病院	61	96.7
				1月16日	木	ヨナハ総合病院	18	94.4
	専門職団体 2件	8	知っておきたい！「女性のこころとからだ」	8月23日	金	三重県教職員組合多気支部女性部	94	95.7
		9	女性の健康づくり—女性ホルモンを味方につけよう	11月26日	火	三重県教職員組合多気支部女性部	75	100
	NPO法人 2件	7	「ふつう」ってなんだろう	8月27日	火	いが若者サポートステーション	7	100
		19	社会的活動としての話すこと・聴くこと	12月3日	火	いが若者サポートステーション	7	100

領域	分類	No	テーマ	開催日	曜日	依頼者	参加者数	満足度
B 将来の職業選択の ために	教育機関 4件	1	どんな仕事に興味があるかな？	11月11日	月	三重県立朝明高等学校	58	98.3
		2	看護の仕事について	12月6日	金	伊賀市立府中小学校	40	94.6
		3	看護職(保健師、助産師)のお仕事を知ろう	10月31日	木	津東高校	44	97.7
				10月31日	木	津東高校	63	100

領域	分類	No	テーマ	開催日	曜日	依頼者	参加者数	満足度
C 高めよう 保健・看護の力	医療機関 11件	1	医療事故はなぜ起きる？ ーヒューマンエラーを防ぐための人間工学ー	7月12日	金	ヨナハ総合病院	52	100
				10月1日	火	亀山市立医療センター	109	96.1
				11月11日	月	三重県立こころの医療センター	100	98.9
		2	ケアとバスターナリズム	6月27日	木	もりえい病院	126	88.7
				10月30日	水	伊勢慶友病院	43	81.4
		3	人工呼吸器装着中の看護	10月23日	水	小山田記念温泉病院	53	100
		4	認知症ケアのスキルアップセミナー	9月27日	金	小山田記念温泉病院	65	96.7
		5	職場のメンタルヘルス	7月31日	水	伊勢慶友病院	58	96.6
				9月25日	水	日下病院	128	97.6
				1月27日	月	榊原白鳳病院第二さくら苑	31	100
				1月28日	火	岡波総合病院	26	100
	社会福祉機関 5件	1	医療事故はなぜ起きる？ ーヒューマンエラーを防ぐための人間工学ー	11月21日	木	太陽の里	40	95
		4	認知症ケアのスキルアップセミナー	9月3日	火	救護施設菰野陽気園	29	100
				9月18日	水	老人短期入所 みかんの里	16	100
				9月20日	金	ナーシングホームもも・いなべ	15	100
				10月24日	木	津中部中地域包括支援センター	16	100
* 公開講座となった講座15件							(斜体は1.31での見込人数)	

Ⅲ. 今後の課題

本事業をより活用していただくために、ご希望に添えなかった依頼者への連絡を密に行うといった調整が必要である。また、公開講座等を活用し、講師派遣の案内パンフレットを配布することで、より県民に本事業を知っていただく。

なお来年度より、「その他の講師派遣」→「みかん大リクエスト講座」の改名に合わせ、「出前講座」→「みかん大出前講座」と改名する。

(担当：川瀬)

2) その他の講師派遣

担当者：＜講師＞全教員

＜運営＞地域交流センター

【事業要旨】

地域交流センターで、県民から依頼のあった、今年度出前講座にあげられたテーマに該当しない講師派遣の依頼について、有料で対応する。

【地域貢献のポイント】

- ・地域交流センターにおける出前講座に該当しないテーマに対し、「その他の講師派遣」にて依頼に応じることで、広く県民の要望に応えることができる。
- ・看護職向けの講座の依頼に応じ、県内の看護の質向上に貢献する。

I. 活動計画

＜数値目標＞

- ・過去3年間(H28-30)における講師派遣の平均実施件数（19件）を維持する。
- ・前年度参加者総数 605 名を上回る。

＜実施計画＞

- ・昨年度からの変更点
事業の満足度アンケートを実施した。
- ・実施計画
 1. 4月中に、講師派遣の案内パンフレットを作成、県内各所に送付するとともに、5月上旬に本学ホームページに掲載する。
 2. 申込受付の期限は、令和元年 11 月 29 日とする。
 3. 出前講座のテーマに該当しない内容の依頼に対し、受付後、該当する教員に照会する。依頼者、教員双方の条件が合致した際には、実施に向けて調整を進め、講師を派遣する。
 4. 派遣は、令和2年3月末日までとする。

II. 活動の結果と評価

1. 申込概要

今年度の分類別講師派遣の実績を表1に示す。

申込み件数は23件、延べ実施件数は30件であった。また、全ての申込みに応じることができた。過去3年間(H28-30)における講師派遣の平均実施件数（19件）を上回り、H28年度9件、H29年度23件、H30年度25件と、年々増加傾向である。

依頼者は医療機関20件が最も多く、ついで社会福祉機関5件、行政機関3件、その他2件の順であった。複数のテーマで申し込んだ施設が8施設あり、「キャリアラダー教育の見直し」や「看護研究研修」など6件がシリーズ講座として開催された。

参加者総数（予定も含む）は 824 名で、前年度参加者総数 605 名を上回った。

表 1 分類別講師派遣の実績

2020.1.31 時点

分類	開催 件数	月日	曜日	依頼者	テーマ	参加人数
医療機関 20件	1	6月17日	月	市立伊勢総合病院	キャリアラダー教育の見直し	7
	2	7月29日	月			7
	3	10月21日	月			7
	4	1月14日	火			7
	5	2月15日	土		効果的な研修の持ち方を学ぶ	30
	6	6月20日	木	三重中央医療センター	看護診断研修	40
	7	8月6日	火		看護研究研修	21
	8	9月3日	火			22
	9	6月25日	火	三重県立総合医療センター	看護研究研修	5
	10	9月19日	木			5
	11	12月12日	木			5
	12	11月7日	木	亀山市立医療センター	高齢者の看取りについて(2): 事例を振り返り考える	50
	13	12月10日	火		看護場面を倫理的視点で見つめ直してみよう	45
	14	8月19日	月	岡波総合病院	形態機能学を活かした看護実践	36
	15	8月26日	月			17
	16	8月29日	木	市立伊勢総合病院	フィジカルアセスメント(呼吸・循環)研修	12
	17	9月10日	火			12
	18	7月19日	金	三重中央医療センター	フィジカルアセスメント研修	42
	19	11月7日	木	橿原温泉病院	コーチングの基本的な内容	21
	20	11月27日	水	塩川病院	感染看護	52
社会福祉機関 5件	21	8月22日	木	三重ベタニア	看護と表裏一体の高齢者虐待について	19
	22	10月16日	水		感染の予防と対策について	21
	23	3月13日	金		持ち上げない移乗介助	25
	24	10月7日	月	志摩市社会福祉協議会	家族介護教室 一認知症の予防やケアについて学ぼうー	77
	25	11月5日	火	老健施設きなん苑	お薬の服用について	44
行政機関 3件	26	11月3日	日	城田地区まちづくり協議会	健康寿命をのばそうー食生活を考え、生活習慣を改善する	43
	27	3月15日	金		健康寿命をのばそうーこころの健康	50
	28	6月3日	月	名張市役所	子ども家庭福祉	28
その他 2件	29	5月18日	土	三重県医療労働組合連合会	持ち上げない移乗介助	52
	30	7月18日	木	丸栄コンクリート工業(株)三重工場	生活習慣でできる熱中症対策	22

参加者総数（斜体は 1.31 での見込人数）824 名

2. 医療機関の概要

医療機関における講師派遣実績一覧を表 2 に示す。「看護研究研修」や「看護場面を倫理的視点で見つめ直してみよう」など《看護職員として必要な基本姿勢と態度の側面》8 件が最も多く開催され、次に「看護診断研修」や「形態機能学を活かした看護実践」・「フィ

ジカルアセスメント研修」などの《技術的側面》7件、「キャリアラダー教育の見直し」「効果的な研修の持ち方を学ぶ」などの《管理的側面》5件であった。満足度（「とてもよかった」～「よかった」の割合）は、90.7～100%と高かった。感想の自由記載では「とてもわかりやすく、楽しかった」「視点を学ぶことができ、今後に役立つ」等であった。

看護職の「臨床実践能力」のすべての分野に対応できており、満足度も90%以上と高く、県内の看護の質向上に貢献していると考ええる。

表2 医療機関における講師派遣実績一覧

2020.1.31時点

分類	開催 件数 No	月日	曜日	臨床実践力の構造	テーマ	依頼先	満足度
医療機関 20件	7	8月6日	火	看護職員として 必要な基本姿勢と態度の側面 8件	看護研究研修	三重中央医療センター	100
	8	9月3日	火				100
	9	6月25日	火		看護研究研修	三重県立総合医療センター	100
	10	9月19日	木				
	11	12月12日	木				
	12	11月7日	木		高齢者の看取りについて(2):事例を振り返り考える	亀山市立医療センター	100
	13	12月10日	火		看護場面を倫理的視点で見つめ直してみよう		90.7
	19	11月7日	木		コーチングの基本的な内容	榊原温泉病院	95.2
	6	6月20日	木	技術的側面 7件	看護診断研修	三重中央医療センター	実施せず
	14	8月19日	月		形態機能学を活かした看護実践	岡波総合病院	100
	15	8月26日	月				100
	16	8月29日	木		フィジカルアセスメント(呼吸・循環)研修	市立伊勢総合病院	100
	17	9月10日	火				
	18	7月19日	金		フィジカルアセスメント研修	三重中央医療センター	100
	20	11月27日	水		感染看護	塩川病院	実施せず
	1	6月17日	月	管理的側面 5件	キャリアラダー教育の見直し	市立伊勢総合病院	100
	2	7月29日	月				
	3	10月21日	月				
	4	1月14日	火				
	5	2月15日	土		効果的な研修の持ち方を学ぶ		未実施

* 無回答除く

3. 医療機関以外の概要

医療機関以外における講師派遣実績一覧を表3に示す。社会福祉機関のテーマでは「看護と表裏一体の高齢者虐待について」や「認知症の予防やケアについて学ぼう」など、行政機関では健康寿命に関するものなど、高齢者に関するテーマが多かった。満足度（「とてもよかった」～「よかった」の割合）は、97.8～100%と高かった。感想の自由記載では「実践的な内容で、よかった」「楽しかった」等、好評であった。昨年度と同じ依頼者も多くみられ、広く県民の要望に応じられていると評価する。

表 3 医療機関以外における講師派遣実績一覧

2020.1.31 時点

分類	開催 件数 No	月 日	曜日	テーマ	依頼先	満足度
社会福祉機関 5件	21	8月22日	木	看護と表裏一体の高齢者虐待について	三重ベタニア	100
	22	10月16日	水	感染の予防と対策について		100
	23	3月13日	金	持ち上げない移乗介助		未実施
	24	10月7日	月	家族介護教室 ー認知症の予防やケアについて学ぼうー	志摩市社会福祉協議会	97.8
	25	11月5日	火	お薬の服用について	老健施設きなん苑	100
行政機関 3件	26	11月3日	日	健康寿命をのばそうー食生活を考え、生活習慣を改善する	城田地区まちづくり協議会	100
	27	3月15日	金	健康寿命をのばそうーこころの健康		未実施
	28	6月3日	月	子ども家庭福祉	名張市役所	100
その他 2件	29	5月18日	土	持ち上げない移乗介助	三重県医療労働組合連合会	100
	30	7月18日	木	生活習慣でできる熱中症対策	丸栄コンクリート工業(株)三重工場	100

* 無回答除く

Ⅲ. 今後の課題

本事業をより活用していただくために、前年度の「その他の講師派遣」のテーマ一覧表を、講師派遣パンフレットに掲載し、活用例を紹介する。また、「その他の講師派遣」という名称がわかりにくいため、来年度より「みかん大リクエスト講座」と改名し、県民に親しまれる事業とする。

(担当：川瀬)

2. 看護研究支援

1) 看護研究の基本ステップ（遠隔配信）

担当者：＜講師＞脇坂浩、大川明子、関根由紀、長谷川智之、斎藤真、白石葉子、玉田章
＜運営＞地域交流センター、メディアコミュニケーションセンター

【事業要旨】

看護職者の研究基礎能力を育成するため、看護研究の基本的内容に関する講座を実施する。今年度は地理的条件から本学に通うことが困難な地域の看護職者を対象に、テレビ会議システムを利用して遠隔配信で行う。

【地域貢献のポイント】

三重県内の看護職者を対象とした看護研究の基礎講座を開催することにより、看護研究の基礎能力向上を目指す。受講者は、日常の看護業務の中から研究テーマを見出し、研究の基本的知識・技術を習得し、看護研究へ取り組む意識を高める。

I. 活動計画

＜数値目標＞

前回の遠隔配信時（H29）の延べ受講者数 449 名を維持する。

＜実施計画＞

・昨年度からの変更点

今までは最後の講座開催時に、まとめて各回の理解度や満足度をアンケート調査していたが、今回より、リアルタイムでの反応を得られるよう、各回終了後に行うことにした。また、本センターホームページに報告記事を掲載し、広報に役立てた。

・実施計画

1. 看護研究の基本ステップは、平成 28 年度以降集合研修と遠隔配信講座を毎年交互に実施する。
2. 平成 31 年 4 月に計画を立て、プログラムと受講案内を県内各医療福祉行政機関等（140 施設）へ送付するとともに、本学ホームページに掲載する。
3. 今年度は 6 月から 9 月に、遠隔配信にて行う。
4. 各回終了時に、アンケート調査を行う
5. 本センターホームページに報告記事を掲載する。

II. 活動の結果と評価

1. 研修の実際

1) 研修内容

研修プログラム（表 1）は、7 科目を 7 日間で実施した。第 5～6 回は演習を含み、各自パソコンを使用しながら受講した。



表 1 令和元年度 研修プログラム

令和元年度「看護研究の基本ステップ」(遠隔配信)

回	テーマ	開催日	曜日	時間	講師
1	センター長あいさつ・オリエンテーション	6月27日	木	18:00～18:15	永見 桂子
	看護研究の意義と文献の活用			18:15～19:45	脇坂 浩
2	研究計画の立て方と書き方	7月10日	水	18:00～19:30	大川 明子
3	質的研究	7月22日	月	18:00～19:30	関根 由紀
4	量的研究	7月25日	木	18:00～19:30	長谷川智之
5	統計解析(演習含む)	8月29日	木	18:00～20:00	齋藤 真
6	プレゼンテーション(演習含む)	9月2日	月	18:00～20:00	白石 葉子
7	研究論文作成	9月26日	木	18:00～19:30	玉田 章

2) 受講者の概要

今年度の遠隔配信講座には、6施設から延べ258名が参加した。配信先は県立総合医療センター、伊賀市立上野総合市民病院の2か所(平成29年度に配信していた紀南病院は減)で、それぞれの近隣施設からも受講者があった。

「数値目標：前回の遠隔配信時(H29)の延べ受講者数449名を維持する」では、前回配信していた紀南病院が減となった分を加味しても、少ない結果となった。受講者の興味を得るような科目の構成を見直す必要がある。

2. 受講生アンケート結果

アンケート回収数 249 (回収率 96.1%)

1) 受講生の属性

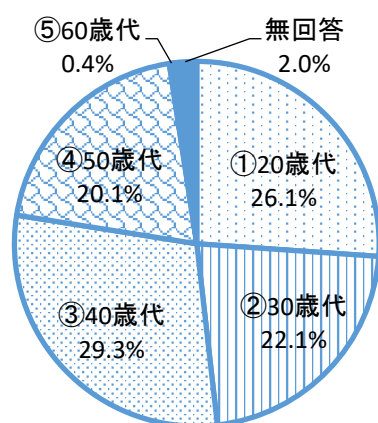


図 1 受講生の年代

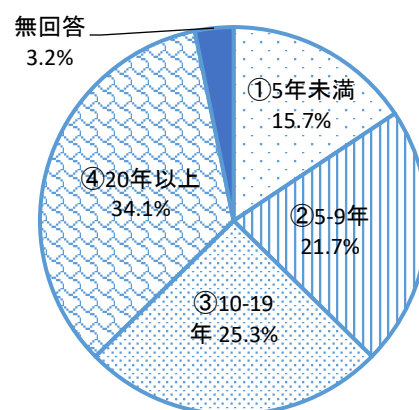


図 2 受講生の経験年数

今年度の受講生の年代（図 1）では各年代が集まり、経験年齢（図 2）も様々であった。職位（複数回答）（図 3）は、スタッフ、管理職、教育担当者の順であった。

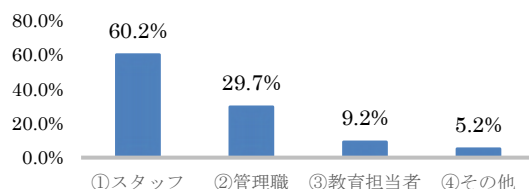


図 3 受講生の職位（複数回答）

2) 講義内容について

各講義内容の理解度は図 4 に示す。昨年度の理解度は 8 科目とも「良くできた」、「まあまあできた」が 8 割を超えていたが、今年度は科目より差があり、「看護研究の意義」「質的研究」「統計解析」の 3 科目では 7 割台であった。「統計解析」に関してはマイクのトラブルがあり、その影響も考えられた。また「あまりできていない」を選択した者の「その理由」の自由記載欄には、「難しかった」「一つ一つの単語の意味が難しかった」等の意見があった。

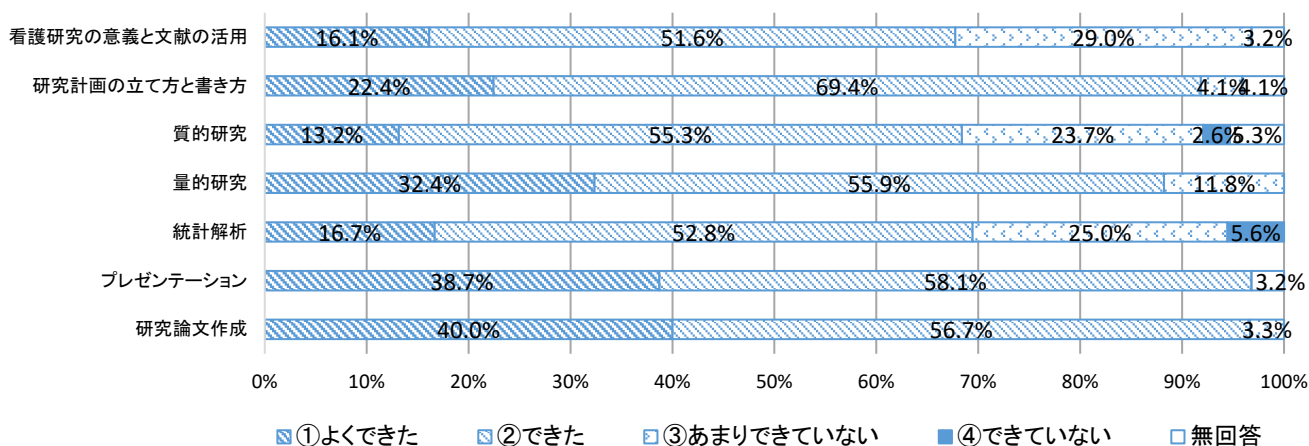


図 4 講義内容の理解度

講義内容の満足度（図 5）は 8 科目とも「とてもよかった」、「よかった」がほぼ 8 割を超えていた。しかし、「あまりよくなかった」を選択した者の「その理由」の自由記載欄には、「意味が解らない。やっぱり無理だ」「はじめて聞く言葉が多く、とても難しかった」等の意見があった。

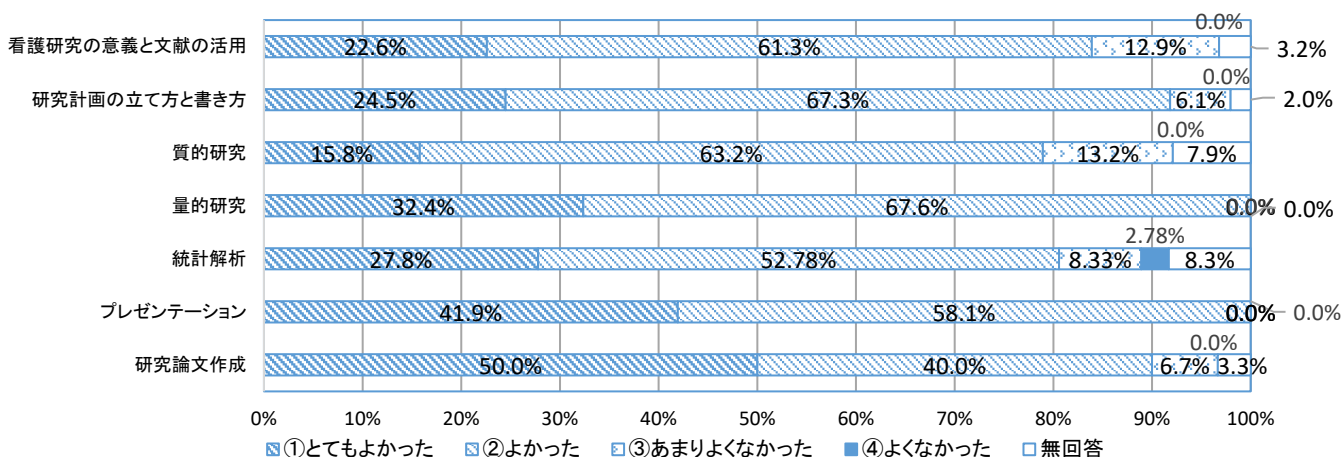


図 5 講義内容の満足度

以上の結果より、受講者の求める講義内容は、より初学者に向けた内容であり、本事業の構成を調整する必要がある。

3) 本講座全般について 【最終回に実施：アンケート回収数 30（回収率 96.8%）】

本講座全般に対する満足度（図 6）では、90%が「満足」、「やや満足」と回答していた。「やや不満」と回答した理由は「1 か月に 3 コマは多い。毎日長日勤している感じ」とスケジュールに関する内容であった。一方、「満足」、「やや満足」と回答していた者でも「初心者にもわかりやすい内容で基本は理解できたが、一部難しい回もあった」という意見がみられた。

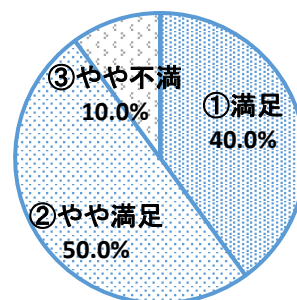


図 6 講義全般の満足度

本講座を受講し、看護研究をしよう（又は続けよう）と思うとの回答は 26 名 (86.7%) であった。またその理由では「迷っていたものがとれた」「研修の内容を見返しながらすすめていく」等、本講座を受けることで、看護研究へ取組み、実施につながるきっかけとなったことが伺えた。

Ⅲ. 今後の課題

1. <数値目標>では、平成 29 年度に配信していた 1 施設が減となった分を加味しても少ない結果であったため、受講者の興味を得るような科目の構成を見直す必要がある。また、各講義内容の理解度や講義内容の満足度への意見より、よりわかりやすい講座を企画する必要がある。

以上より、「看護研究における倫理的配慮」と「研究デザインのタイプと選択」を新規テーマ（色付き枠）に加え、5 日間の開催とし、受講者が日常の看護業務の中から疑問を見出し、スムーズに看護研究へ取りくめるよう企画した。また、研究実践能力の向上のための「ハウツー看護研究」事業につながるよう「量的研究（実験・計測）」のテーマも加えた。さらに受講者に看護研究の種を届けることを願い、事業名も「看護研究 SEED」と改名する。

2. 本講座全般に対する満足度では、「1 か月に 3 コマは多い。」といったスケジュールに関する不満があるため、次回のスケジュール作成時には注意が必要である。

表 2 令和 2 年度 研修プログラム

区分	回	テーマ
研究計画書 まで	1	看護研究の意義と文献の活用
		文献検索と図書館の利用
	2	研究計画の立て方と書き方
		看護研究における倫理的配慮
	3	研究デザインのタイプと選択
		質的研究(インタビュー)
	4	量的研究(アンケート)
		量的研究(実験・計測)
研究まとめ	5	情報処理室 フリー開放
		研究論文作成
		プレゼンテーション(演習含む)

（担当：川瀬）

2) ハウツー看護研究

担当者：＜講師＞浦野茂、関根由紀、斎藤真、菅原啓太、長谷川智之
＜運営＞地域交流センター

【事業要旨】

看護研究の基礎講座（看護研究の基本ステップ等）を修了した看護職者を対象に、研究を進めるための具体的な方法について研修を行い、研究実践能力の向上を目指す。

【地域貢献のポイント】

看護研究の基礎知識を習得した看護職者が、具体的な研究方法を学び、演習型の研修を実施することにより、看護現場での研究内容が充実し、看護の質向上につながる。

I. 活動計画

＜数値目標＞

前年度の受講者数 25 名（「インタビューコース」10 名、「アンケートコース」11 名、「実験・計測コース」4 名）を維持する。

＜実施計画＞

・昨年度からの変更点

1. 理解度や満足度等、アンケートの尺度を他の事業の評価と同様 4 択に揃えた。
2. 本学ホームページに報告記事を掲載し、広報に役立てた。

・実施計画

1. 平成 31 年 4 月から 5 月に研修プログラムを作成する。
2. 今までに、本学の「看護研究基本ステップ」（遠隔配信講座を含む）・ハウツー看護研究の受講者が所属する医療・福祉機関等、および今年度の施設単位看護研究支援施設に受講案内を送付とともに、本学ホームページに募集記事を掲載する。
3. 令和元年 8 月から 12 月に、各コース、プログラムに沿った研修の実施を行う。
4. 各コース終了時に、アンケート調査を行う。
5. 本学ホームページに報告記事を掲載する。

II. 活動の結果と評価

1. 研修の実際

1) 研修内容

研修プログラム（表 1）は、3 コースとも 3 回（計 12 時間）を 2～3 日間で実施した。



「ハウツー看護研究」
インタビューコースの様子



「ハウツー看護研究」
アンケートコースの様子



「ハウツー看護研究」
実験・計測コースの様子

表 1 令和元年度 研修プログラム

コース	講師	回	内 容
インタビューコース 「インタビューによる 質的研究を行ってみる」	浦野 茂 関根 由紀	第1回	1. 質的研究法の内容と特徴 2. 研究課題を作る 3. 研究デザインを考える
		第2回	1. インタビューガイドを作る 2. インタビューを行う 3. トランスクリプトを作る
		第3回	1. 分析する 2. 分析結果をまとめる 3. 「発見」を作る
アンケートコース 「質問紙の作成と調査の実施」 －職務満足度について考えをさぐる－	斎藤 真 菅原 啓太	第1回	1. はじめに 2. 調査を行う前に （倫理的配慮を含めた調査研究の注意事項） 3. 調査用紙に用いる尺度 4. 調査用紙の作成：フェースシート、単一回答/選択、 複数回答/選択、順位法、数値配分法、SD法、自由記述 5. 調査開始 6. データの入力・集計
		第2回	1. 集計結果の整理、図式化 2. 統計的解析 3. データの検討 4. 結果の整理と考察への展開
		第3回	論文の作成：目的、方法、結果、考察の記述
実験・計測コース 「ミキシング作業時の 操作しやすい点滴処置台の高さと 人体計測値との関係」	斎藤 真 長谷川 智之	第1回	1. 実験研究とは 2. 実験研究の紹介 3. 実験を行う前に：倫理的配慮を含めた実験の注意事項
		第2回	1. 実験装置の準備 2. 実験開始：実験協力者への説明と同意、 調整法による台の高さの計測、人体計測値の測定 3. データの集計
		第3回	1. データ分析 2. 考察の検討 3. 抄録（学会発表レベル）の作成

2) 受講者の概要

申込者数は、インタビューコースは4施設より8名、アンケートコースは5施設より14名、実験・計測コース2施設より4名、計26名であった。アンケートコースが台風の影響により、延期となったため、1名参加できなくなり、最終計25名となった。前年度の受講者数25名（「インタビューコース」10名、「アンケートコース」11名、「実験・計測コース」4名）を維持できた。

2. 受講生アンケート結果

アンケート回収数22（回収率95.7%）＊最終日2名欠席のため23名対象

1) 受講生の属性

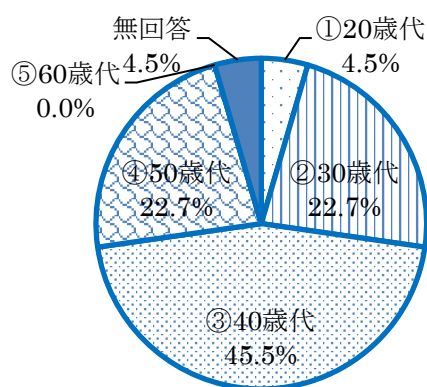


図1 受講者の年代

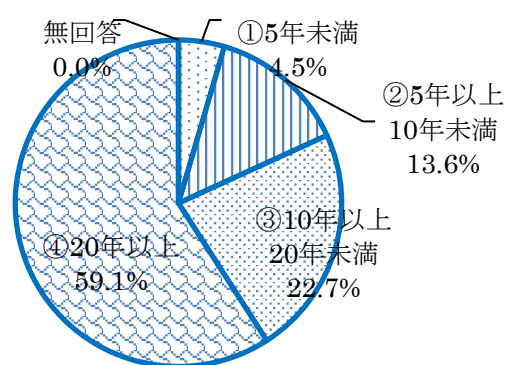


図2 受講者の経験年数

今年度の受講生の年代（図1）は40歳代が45.5%と最も多く、次いで30歳代、50歳代が同率であった。経験年齢（図2）は20年以上が最も多かった。また、職位（図3）は、スタッフ、管理職、教育担当者の順であった。

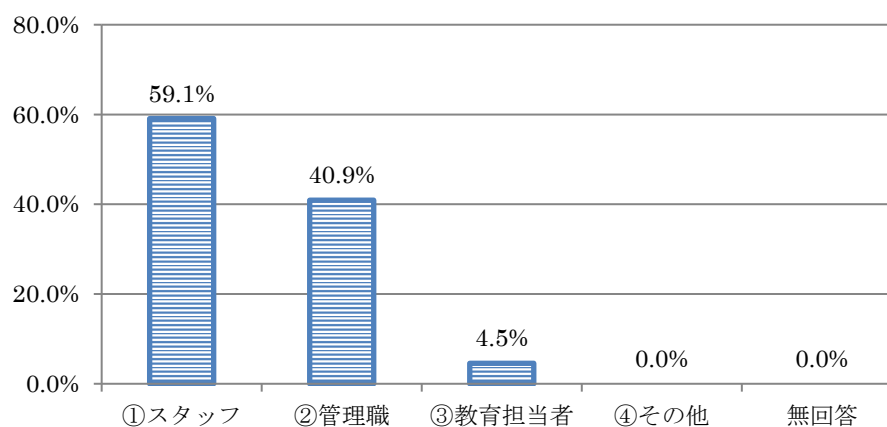


図3 受講者の職位（複数回答）

2) 講義内容について

講義内容の理解度（図 4）では、「よくきた」「できた」で 8 割を超えていたが、「ありでしなかつた」と回答した者も 13.6%いた。受講者が求める講義難度に調整する必要がある。

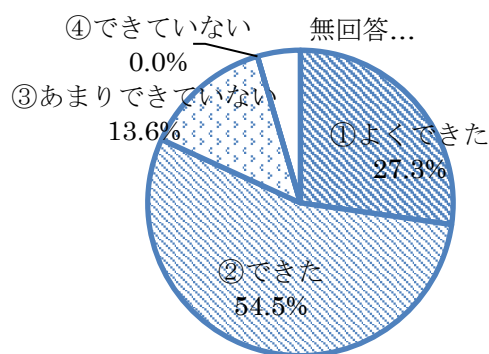


図 4 講義内容の理解度

3) 本事業全般について

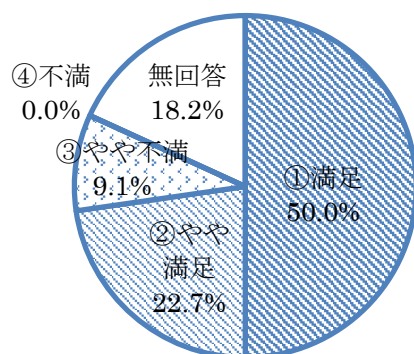


図 5 研修形式の満足度

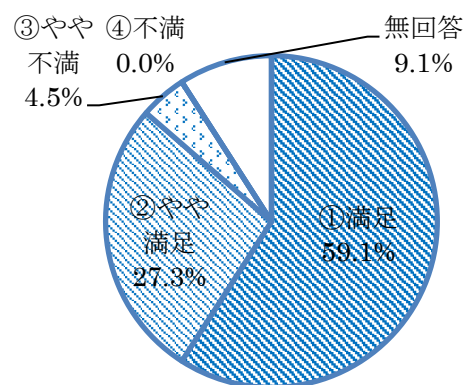


図 6 研修全般の満足度

研修の形式の満足度（図 5）では、「満足」「やや満足」が 72.7%を占めた。「やや不満」9.1%の理由は「もっと学びたかった」「3 回では少ない感じがした」であった。

本講座全般に対する満足度（図 6）では、「満足」「やや満足」が 86.4%を占め、「実践的でよかった」と理由に記載されていた。

研修を受講して、研究をしよう（または続けよう）と思った者は 77.3%であり、「実際の入力や抄録の記入を考えながらすることで、理解が深まった」「研究に対しての恐怖感が少し減った」の感想を得た。

以上の結果より、具体的な研究方法を学ぶことで、研究実践能力の向上に役立ったと評価できるが、時間や回数が少ないという意見もあったため、研修の時間数を検討する必要がある。

Ⅲ. 今後の課題

次年度は、講義の難度が受講者のニーズに適しているか調整し直し、構成も各コース 90 分増やすことにより、じっくりと具体的な研究方法を学べる研修とする。また、他の事業を実施する際、本事業への受講生の反響を広報し、事業を拡大していきたい。

（担当：川瀬）

3) その他の看護研究支援

担当者：＜講師＞大川明子、前田貴彦、脇坂浩、玉田章、小松美沙、中西貴美子、小池敦
大平肇子、関根由紀、長谷川智之、白石葉子、宮崎つた子
＜運営＞地域交流センター

【事業要旨】

看護研究について、支援を希望する県内医療機関等からの依頼を受け、看護研究の指導を行う。支援内容は、施設を単位とする「施設単位看護研究支援」、各医療機関等で行う看護研究発表会での講評・審査を行う「看護研究発表会支援」がある。

【地域貢献のポイント】

看護職者が、臨床現場における課題について看護研究を行うことは、職業人としての意識を高め、看護の質向上につながる。本事業が、県内医療機関における看護職者の研究意欲を高めるとともに、研究遂行能力や研究的思考を養うことで、地域の人々によりよい看護を還元することができる。

I. 活動計画

＜数値目標＞

前年度の利用件数、施設単位看護研究支援 10 件、看護研究発表会支援 3 件を維持する。

＜研究支援内容＞

1. 施設単位看護研究支援

- 1) 施設単位で、看護研究を行っている看護職者のグループまたは個人に対し本学の教員が出張して指導を行う。施設からの申し込みは、1 グループ 6 研究を目安とする。
- 2) 基本単位を、3 時間×4 回の指導とする。

2. 看護研究発表会支援

- ・施設等の看護研究発表会における講評・審査を本学の教員が担当する。

＜実施計画＞

- ・昨年度からの変更点

施設単位看護研究支援および看護研究発表会支援で、事業の満足度アンケートを実施した。

- ・実施計画

1. 施設単位看護研究支援

平成 31 年 1 月：募集案内を県内医療機関等に送付し、希望を募る（締切 2 月末日）

3 月：申込みのあった施設に対し、全教員から支援担当者を募集する。双方の条件が合致したら実施にむけて調整を進める。

平成 31 年 4 月：支援の決定した医療機関へ決定通知を送付する。

令和元年 5 月～令和 2 年 3 月：担当教員が研究指導を行う。

支援終了時、事業参加者にアンケートを実施する。

2. 看護研究発表会支援

平成 31 年 4 月：全教員から支援担当者を募集する。

令和元年 5 月：県内各医療・行政機関等へ研究支援案内を送付。11 月末日までの受付とする。

令和 2 年 3 月迄：支援の申込みに対し、発表演題について対応可能な教員を派遣する。

支援終了時、事業参加者にアンケートを実施する。

Ⅱ. 活動の結果と評価

1. 支援の実際

1) 支援施設の概要

施設単位看護研究支援施設（表 1）は 12 件、1 病院より 2 支援を利用する施設もあった。また、看護研究発表会支援は 1 件であった。前年度の利用件数と比し、施設単位看護研究支援は 2 件増加したが、看護研究発表会支援は下回った。施設単位看護研究支援を行っている施設に、より看護研究発表会支援を活用していただくために、セットで申し込める様、申込書を検討する。

表 1 令和元年度 施設単位看護研究支援施設一覧

支援内容	No.	施設名	担当教員
施設単位看護研究支援	1	県立総合医療センター	大川 明子
	2	武内病院	前田 貴彦
	3	榊原温泉病院	脇坂 浩
	4	県立志摩病院	玉田 章
	5	済生会明和病院	小松 美沙
	6	松阪市民病院①	中西 貴美子
	7	松阪市民病院②	小池 敦
	8	伊勢赤十字病院①	大平 肇子
	9	伊勢赤十字病院②	関根 由紀
	10	四日市羽津医療センター	長谷川 智之
	11	藤田保健衛生大学 七栗記念病院	白石 葉子
	12	独立行政法人 国立病院機構 鈴鹿病院	宮崎 つた子

2) 支援状況

支援開始時期は6月から11月、終了時期は11月から翌年3月を予定している。依頼者の研究進度により、後期より支援を開始した施設が2施設あった。一方、看護研究発表会支援は2月の予定である。

2. 受講生アンケート結果

施設単位看護研究支援の終了が11月～2月であるため、現時点（2020.1.31）では全てを集計することができず、次年度で評価予定である。回収できている2施設での結果を見ると、事業満足度は「とてもよかった」「よかった」で95.4%であった。その理由では「進行方法がわからなかったため、とても助かった」「毎回丁寧なご指導で、研究の楽しさが分かってきた」と記載されていた。一部分の結果ではあるが、県内医療機関における看護職者の研究意欲を高めていると評価する。

Ⅲ. 今後の課題

看護研究発表会支援の利用者増加のため、施設単位看護研究支援の申込用紙に、発表会支援申し込み欄をつくり、セットで申し込めるようにする。また、他の事業を実施する際、本事業への受講生の反響を広報し、支援施設を拡大していきたい。

（担当：川瀬）

3. 公開講座

3. 公開講座

【事業要旨】

広く県民を対象としたテーマの公開講座等を定期的の実施する。

【地域貢献のポイント】

- ・ 県民の看護・医療・健康への関心や意識を高める。
- ・ 県民の学習ニーズの把握に努め、本学が有する資源や教員各自の専門分野を活かした生涯学習等を行う。

I. 活動計画

＜数値目標＞

- ・ 参加者数の目標値 1 回 300 人以上、年間 1,000 人程度を維持する。

＜実施計画＞

- ・ 昨年度からの変更点

参加申込方法について、QRコードを導入した。ホームページによる周知方法については、年間予定を早期より掲載するとともに、実施報告についても掲載した。

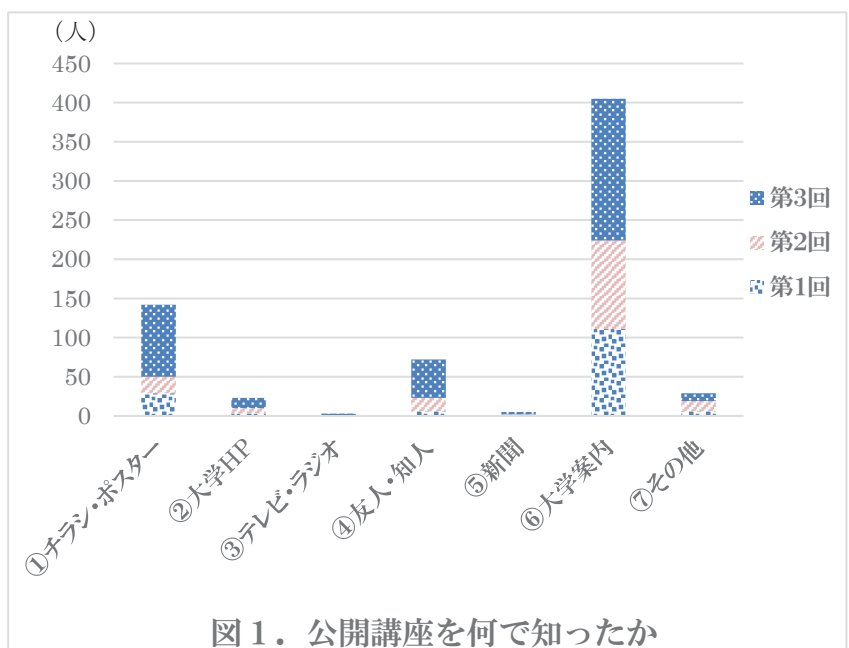
- ・ 実施計画

1. 開催の 2 か月前に案内パンフレットを作成し、県内各所に送付するとともに本学ホームページに掲載して周知啓発を行う。
2. 申込定員は 350 名とし、定員になり次第申込受付を終了する。

II. 活動の結果と評価

＜結果＞

1. 令和元年度は 3 回の公開講座を開催した。(実施の詳細は後半に記載)
2. 会場での安全確保のため定員を 350 人としたが、事前申込が多い回には、より多くの人に参加していただけるよう、会場（講堂）の様子を大講義室へ配信し、キャパシティの確保を行った。
3. 希望の医療施設には遠隔配信を行った。
4. 毎回アンケートを実施したところ、公開講座を知るきっかけ（図 1）は、「大学案内」が最も多く、次いで「チラシ・ポスター」「友人・知人」



の順と、例年と同様の傾向が見られた。

5. 参加者数は、第1回 205 名、第2回 223 名、第3回 382 名、年間 810 名であった。
6. 満足度は、第1回 100%、第2回 98.8%、第3回 98.3%が満足していた（無回答除く）。
7. 今後希望する公開講座のテーマ（図2）は、「心の健康」「高齢者と健康」「看護の役割」「認知症」の順であった。

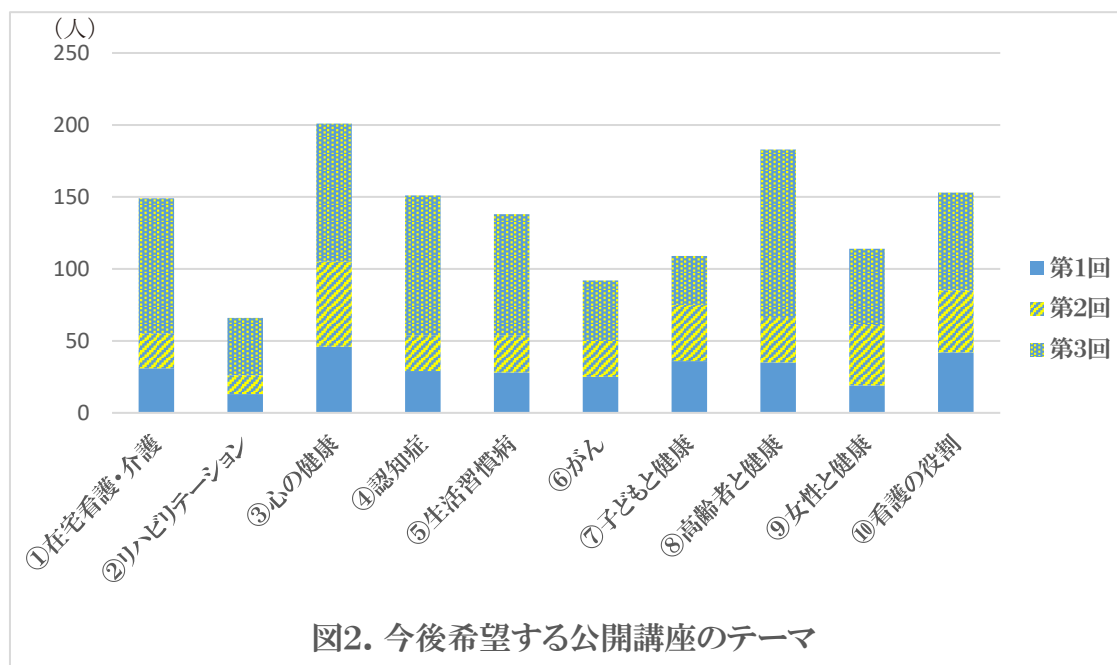


図2. 今後希望する公開講座のテーマ

<評価>

参加者数の目標（300 人）に達しない開催回があり、3 回の公開講座の合計参加者数は年間目標には至らなかったが、参加者の満足度は高かったため、県民の看護・医療・健康への関心や意識を高めることに貢献できたと評価する。

事前申込が多い回には会場を増やしたことで、混雑することなく、より多くの人に満足いく講座を受講いただく事が出来た。

Ⅲ. 今後の課題

希望する公開講座のテーマで上位の内容（心の健康、高齢者と健康、看護の役割、認知症）を、今後のテーマ・講師依頼の参考としたい。また、上位の内容ではないテーマの場合は、キーワードに“心の健康”や“高齢者”を盛り込むことで、県民の参加意識が向上すると考える。

公開講座を知るきっかけで三番目に「友人・知人」が多くなっているが、「その他」の中には職場からの声かけも含まれている。より多くの人に参加いただけるよう、声をかけ合い参加していただける工夫などの検討も必要である。

公開講座実施の詳細

1. 第1回公開講座

講 演 「スポーツにケガはつきものかー「見える化」活動の成果報告ー」

講 師：内田 良 氏（名古屋大学大学院教育発達科学研究科 准教授）

日 時： 令和元年 6 月 29 日（土） 13:30～14:50

場 所： 三重県立看護大学 講堂

参加人数： 205 名

主 催： 三重県立看護大学

共 催： 東海体育学会

後 援： 三重県、公益社団法人三重県看護協会、津市、津市教育委員会

運営担当： 三重県立看護大学事務局、地域交流センター

メディアコミュニケーションセンター



内田氏の講演の様子

2. 第2回公開講座

講 演 「夢に向かってー最初の一步に勇気を パラリンピックへの道ー」

講 師：佐藤 圭太 氏（トヨタ自動車所属陸上競技選手）

日 時： 令和元年 10 月 25 日（土） 13:10～14:40

場 所： 三重県立看護大学 講堂

参加人数： 233 名

主 催： 三重県立看護大学

共 催： みえ女性スポーツ指導者の会（公益財団法人三重県体育協会）

後 援： 三重県、三重県教育委員会、公益社団法人三重県看護協会
津市、津市教育委員会

運営担当： 三重県立看護大学事務局、地域交流センター
メディアコミュニケーションセンター



佐藤氏の講演の様子

3. 第3回公開講座 (NHK ハートフォーラム)

講演 「認知症ポジティブ！笑顔の暮らしのコツ」

講師：山口 晴保 氏（群馬大学 名誉教授）

（認知症介護研究・研修東京センター センター長）

日時：令和2年1月11日（土） 13:10～14:40

場所： 三重県立看護大学 講堂

参加人数： 382名

主催： 三重県立看護大学、NHK津放送局、NHK厚生文化事業団中部支局

後援： 三重県、三重県教育委員会、公益社団法人三重県看護協会
津市、津市教育委員会

運営担当： 三重県立看護大学事務局、地域交流センター
メディアコミュニケーションセンター



山口氏の講演の様子

（担当：星野）

VI. 連携

1. 連携協力協定（医療機関・市町）

1) 連携協力協定（医療機関）

目的：本学と医療機関が相互に連携・協力関係を構築することで、臨床現場における学生と看護職者の資質を向上し、充実した県民サービスにつなげる。

表 1. 連携協力協定病院（令和 2 年 2 月 1 日現在）

	医療機関名	協定締結日
1	県立こころの医療センター	平成 25 年 2 月
2	松阪市民病院	平成 26 年 3 月
3	済生会松阪総合病院	平成 26 年 3 月
4	厚生連松阪中央総合病院	平成 26 年 5 月
5	県立総合医療センター	平成 26 年 6 月
6	伊勢赤十字病院	平成 26 年 8 月
7	国立三重病院	平成 27 年 1 月
8	県立一志病院	平成 27 年 11 月
9	厚生連鈴鹿中央総合病院	平成 29 年 4 月
10	市立伊勢総合病院	平成 30 年 3 月
11	岡波総合病院	平成 31 年 3 月

2) 連携協力協定（市町）

目的：本学と市町が相互に連携・協力関係を構築することで、臨地における学生と看護職者の資質を向上し、充実した県民サービスにつなげる。

連携協力協定市町（令和 2 年 2 月 1 日現在） 0 カ所

＊令和元年度は、本学と医療機関との連携協力協定の経緯と取組の実際や、本学と市町との連携協力協定について、三重県市町保健師協議会統括保健師等会議（12 月 20 日）において情報提供を行った。今後は、各市町との連携協定に向けた具体的相談を予定している。

2. 看護管理者意見交換会

担当者：地域交流センター委員

【事業要旨】

県内病院の看護管理者を対象に、本学の取組について、理解と協力を得て連携を深めるとともに、地域に根差した看護の教育・研究機関である本学の役割を示し、地域の医療機関のニーズ把握を図るため、三重県立看護大学学長との意見交換会を実施する。

【地域貢献のポイント】

○看護・介護の第一線で活躍している看護職者の看護実践能力や研究能力の向上に貢献する。

I. 活動計画

<数値目標>

過去3年間の参加者数（H28年36名、H29年36名、H30年35名）を維持する。

<実施計画>

対象者：県内医療機関等看護管理者

研修日時：令和元年10月10日（木）13:30～16:30

会場：三重県立看護大学

内容：

（1）行政からの情報提供

「三重県における医療の現状と看護への期待」医療政策総括監 田辺 正樹

「看護を取り巻く状況」 看護師確保対策監 仲川 むつみ

（2）講話

「これからの看護教育」 学長 菱沼典子

（3）本学からの話題提供

「教務委員会 学修成果アンケートの結果報告」母性看護学 教授 大平肇子

「多文化共生社会における看護について」 社会学 教授 浦野 茂

「看工連携による院内の知的財産発掘について」生体情報学 教授 斎藤 真

（4）意見交換

（5）その他

II. 活動の結果と評価

1. 参加者の概要

県内病院等看護管理者36名で、内訳は、北勢11名、中勢15名、南勢8名、東紀州2名であった。過去3年間の出席者数を維持できた。



2. 参加者アンケート結果

アンケート回収数 33（回収率 91.7%）

意見交換の構成の満足度（図1）では、「とてもよかった」「よかった」が90.9%を占めた。その理由は「他施設の方々、各先生の考えを聞く機会となり、看護管理者として振り返る時間が作れた。」「他施設管理者との情報交換は有意義だった」であった。

また、「テーマを絞ってほしい」「話し合う時間が少ない」といった意見も頂いた。

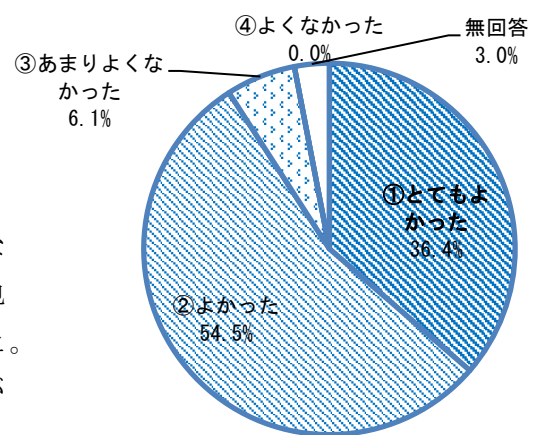


図1 意見交換の構成の満足度

一方「あまりよくなかった」は6.1%で、「時間がもう少しあれば深められたと思う」「あらかじめ（話し合う）テーマがあったほうが効果的にすすんだのでは」という意見であった。以上の結果より、意見交換会は、看護・介護の第一線で活躍している看護職者として振り返るきっかけとなり、地域の医療機関の情報交換の場となったと評価できる。しかし、テーマの設定や時間配分等は検討する必要がある。

Ⅲ. 今後の課題

次年度は意見交換のテーマを案内送付の際にお知らせし、各施設での考えをまとめて参加できるようにしたい。また構成も話し合う時間を確保できるよう努めたい。

（担当：星野）

VII. その他

1. 情報発信・広報活動

令和元年度の地域交流センター事業に関する情報発信・広報活動は以下のとおりである。

1. 年報発行

地域交流センター年報 令和元年度 VOL. 22

発行日：令和2年3月

2. 報告会開催

令和元年度地域交流センター活動報告会

日時：令和2年3月19日（木）10時40分～12時10分

場所：三重県立看護大学 大講義室

発表：ポスター

第一部

1. 令和元年度地域交流センター活動の総括

【教員提案事業：今年度終了】

2. 健康づくりのための運動指導講座

3. 災害に備えて

4. アイルランドの伝統料理を作ろう

5. 英語で話そう

6. ケアをめぐる哲学カフェ -おたがいの立場をこえて話し合おう

7. シネマで倫理学

8. みんなでリカバリー

【教員提案事業：継続中】

9. 子ども達に「自分のからだ」を伝える事業

第二部

【受託事業】

10. 新人助産師の臨床実践能力育成のための研修体制構築

11. 周産期における母子・家族支援のための臨床助産師の看護実践能力育成

12. 認知症対応力向上研修：地域交流センター

【認定看護師教育課程】

13. 認定看護師教育課程「認知症看護」

【卒業生支援】

14. 卒業生のきずなプロジェクト

15. 卒業生支援構想プロジェクト

特別展示

・みえメディカルバレープロジェクトの活動

・産学連携知財アドバイザーの活動

3. ホームページ (地域交流センターおよび大学トピックス欄における情報発信)

- ・従来からある項目(事業概要、トピックス、公開講座、看護研究基本ステップ、ハウツー看護研究、出前講座、認知症対応力向上研修、認定看護師看護教育課程「認知症看護」、看護研究支援、その他の講師派遣、教員提案事業、卒業生支援事業)に加え、新たに活動報告会、新人助産師研修、助産師中堅者研修の項目を増やし、内容を整理した。
- ・地域交流センターの活動の「みえる化」を目的に、積極的に活動記事をアップし、昨年度記事数44件に比し、今年度は72件(2020.1.31現在)を掲載できた。

4. パンフレットを作成し、県内関係機関へ送付

- ①令和元年度 講師派遣のご紹介 (2,500部) ・出前講座、その他の講師派遣
- ②令和元年度看護研究支援のご案内 (300部)

(ここまでの担当: 川瀬)

5. イベントへの参加

1) フレンテまつり 2019 でのブース展示

日時: 令和元年6月2日(土) 10時00分～15時30分

場所: 三重県男女共同参画センター「フレンテみえ」 セミナー室B

内容: ①大学広報: 大学案内、講師派遣案内のパンフレット、MCN REPORT、第1回公開講座チラシを配布

②健康チェック:

血管年齢・ストレスチェック	93名
骨密度測定	126名
体脂肪等	約 120名
貧血チェック	132名
血圧測定	121名
アルコールパッチテスト	115名



運営担当: 三重県立看護大学事務局、教員有志、
本学学部生、地域交流センター

フレンテまつり(健康チェック)の様子

主催: 三重県男女共同参画センター「フレンテみえ」フレンテまつり実行委員会

2) みえアカデミックセミナー2019 三重県立看護大学公開セミナー

日時: 令和元年7月13日(土) 13時30分～15時00分

場所: 三重県文化会館

テーマ: 薬のはなし

講師: 林 辰弥教授

参加人数: 160名

主催: 三重県生涯学習センター



みえアカデミックセミナーの様子

3) みえアカデミックセミナー2019 移動講座（紀宝町）三重県立看護大学公開セミナー

日 時：令和元年10月25日（金）15時00分～16時40分

場 所：紀宝町生涯学習センター「まなびの郷」

テーマ：コグニサイズで認知症予防を！

講 師：白石 葉子教授

参加人数：48名

主 催：三重県生涯学習センター



移動講座の様子

6. テレビ・ラジオ・新聞等による広報

令和元年度の広報を主たる目的としたテレビ・ラジオの放送、新聞掲載を以下に示す。

表 1. テレビ・ラジオ・新聞等による広報

媒体		内 容		月	日
TV	NHK 津放送局	お知らせコーナー	第3回 公開講座	12 月	
ラ ジ オ	NHK 津放送局	お知らせコーナー	第3回 公開講座	12 月	
	FMみえ	CampusCube 「キャンパスインフォメーション」	出前講座	4	26
			第1回 公開講座	5	24
			認定看護師教育課程	8	16
			第2回 公開講座	9	20
			地域交流センターの取組紹介	10	4
			アイルランドの伝統料理を作ろう inMCN	11	15
			第3回 公開講座	11	29
	スポット CM		認定看護師教育課程	12 月	
新 聞	三重タイムズ	第1回 公開講座		6	14
		第1回 公開講座		7	5
		第2回 公開講座		10	18
		第3回 公開講座		2	7
	毎日新聞	第1回 公開講座		6	30
		第2回 公開講座		10	9
	中日新聞	第1回 公開講座		6	30
		第2回 公開講座		10	29
		第3回 公開講座		1	12
情 報 誌	いきいき生涯＆ ゆうゆう学習	みかん大オープンキャンパス		6 月 (第 31 号)	
		第1回 公開講座			
		第2回 公開講座			
		第3回 公開講座		10 月	
		よりみちカフェ(12 月、3 月実施)		(第 32 号)	

(ここまでの担当：星野)

2. 各種講座案内と申込書

- 1) 出前講座
- 2) その他の講師派遣
- 3) 施設単位看護研究支援
- 4) 看護研究発表会支援
- 5) 看護研究の基本ステップ（遠隔配信）
- 6) ハウツー看護研究

1) 出前講座のご案内

本学の教員は、自身の教育や研究、社会活動の専門性や成果をもとに、県民の皆さまを対象とした出前講座を行っております。皆さまからのお申し込みにより、集会・学習会などにお伺いして講演を行います。本冊子掲載の講座一覧からご希望のテーマをお選びください。

1 目的

出前講座は、より多くの県民の皆さまに、看護や医療、健康などに関心をもっていただくことを目的としています。

2 対象者

県内に在住・在勤・在学の 5 名以上の参加者が見込めるグループ・団体などが対象です。広く地域の方を受講者として募集することができる場合は、公開講座としての開催をお願いします。（本学ホームページに開催案内を掲載します）

3 ご留意いただきたいこと

- ・ 各講座の時間は 1 講座 90 分以内となります。
- ・ 講師料は**無料**です。交通費のみご負担いただきます。
交通費の計算は、申込者様所属の規程に基づき、お願いします。
* 規程がない場合、本学規程で対応いたしますので、お問い合わせください。
・ ただし、本学から会場までの距離が 2km 未満の場合は、負担いただく必要はございません。
* * 交通事情等により現地宿泊が必要となる場合は、申込者様側で宿泊施設を予約し、その料金（素泊まり料金）を直接宿泊施設にお支払いください。
- ・ 1 施設からの申込件数は、2 件以内とさせていただきます。
- ・ 会場の手配、参加者への開催周知は申込者様側でお願いします。なお、本学を会場としてお貸しすることもできます（有料）。
- ・ 政治、宗教、営利を目的として実施する場合、もしくは、政治・宗教・営利を目的とした催しと一体的に実施する場合はお断りします。
- ・ 公共性の高い保健・医療・福祉関係の方を優先的にお受けし、それ以外の方はご相談に応じます。
- ・ 開催日や時間についてはご相談に応じますが、教員の業務の都合上ご希望に添えない場合があります。なお、**土・日・祝日や夜間（終了時間が 20 時以降になる場合）**の開催については対応いたしかねますので、ご了承ください。
- ・ 各講座には、回数に限りがあります。やむをえずお断りすることがございますので、ご了承ください。

4 お申し込み期間

お申し込みは、令和元年 11 月 29 日（金）まで受付けます。開催希望日の 60 日前までにお申し込みください。

講座ごとに、開催上限回数になり次第、受付終了となります。

5 テーマ選定～お申し込みの流れについて

前ページに記載してある「3 ご留意いただきたいこと」をよくお読みください。



本冊子「令和元年度 三重県立看護大学 地域交流センター 講師派遣のご紹介」に記載されている「出前講座」から、ご希望のテーマをお選びください。



○ページの「出前講座」申込書にご希望のテーマ名、必要事項等を記載してください。



必要事項を記入した申込書を、FAX または E-mail にて送付し、本センターまで、お申し込みください。

（TEL/FAX：059-233-5610、E-mail：rc@mcn.ac.jp）

6 お申し込みから実施までの流れ

申込書に記載していただいた希望内容に応じて、本センターにて担当講師と日程を調整します。



日程調整後、本センターから申込者様宛に決定通知書（日時と交通費支払等手続きに関する書面）をお送りします。
（日時の調整がつかず、やむをえずお断りすることがあります。ご了承ください）



決定通知書を受領後、講座内容の詳細について、申込者様と担当講師との間で直接打ち合わせをしていただきます。

※申込みの前にお問い合わせいただくことも可能です。

※本学ホームページ「三重県立看護大学＞地域交流センター＞出前講座」

では、出前講座一覧が確認でき、申込み多数にて受付を終了した講座に関する情報や、「出前講座申込書」がダウンロードできます。

※尚、申し込み後 1 か月を過ぎても、本センターからの返事がない場合は、お手数をおかけしますが、お電話にてご確認くださいませようお願いします。

7 お問い合わせ先

三重県立看護大学 地域交流センター

〒514-0116 三重県津市夢が丘 1 丁目 1 番地 1

TEL/ FAX (059) 233-5610

E-mail : rc@mcn.ac.jp

ホームページ//三重県立看護大学＞地域交流センター＞出前講座

令和元年度 「出前講座」 申込書 三重県立看護大学地域交流センター

申込書記入日 令和 年 月 日

機関・団体名称		分類		医療機関・行政機関・社会福祉機関・ 教育機関・NPO法人・専門職団体・ ボランティア団体・その他()		
連絡先	担当者名					
	住所	〒		電話		
	FAX		E-mail			

*申込書にご記入いただいた個人情報につきましては、出前講座決定通知書の送付や出前講座実施に向けての打ち合わせに使用させていただきますものであり、その他の用途に使用することはありません。

出前講座の希望内容	希望日時 第1～3	① 令和 年 月 日 () 時 分 ～ 時 分 ② 令和 年 月 日 () 時 分 ～ 時 分 ③ 令和 年 月 日 () 時 分 ～ 時 分					
	希望 会場名				参加予定人数	名	
	会場 所在地				参加者の内訳 (例：看護師 30 名、 保護者 30 名、高校 2 年生 30 名など)		
	番号/ テーマ名	No. —	テーマ名				
出前講座資料		<input type="checkbox"/> 事前に必要 <input type="checkbox"/> 当日でよい *資料の有無は講座によります。 必要部数の印刷は依頼者側で行っていただきます。				広く地域の方を受講者として募集することができ (本学 HP に開催案内を掲載) 可能 不可能 要相談	

.....
以下は地域交流センター使用欄

三重県立看護大学地域交流センター「出前講座」決定通知書

ご依頼いただきました出前講座は、下記の通り決定しましたのでお知らせします。

令和 年 月 日

決定事項	テーマ番号	No.	テーマ名			
	開催日時	令和 年 月 日 () 時 分 ～ 時 分				
	講師氏名			講師連絡先		

上記の講師にご連絡のうえ、詳細な打ち合わせを行ってください。ご不明な点がございましたら下記の連絡先までお問い合わせください。

【連絡先】 三重県立看護大学地域交流センター

〒514-0116 津市夢が丘 1 丁目 1 番地 1

TEL/FAX (059) 233-5610

E-mail : rc@mcn.ac.jp

2) その他の講師派遣のご案内

本センターでは、看護研究に関する講座や出前講座等を実施しております。しかし、いずれの講座にも含まれない内容をご希望される場合は、「出前講座にはない〇〇に関する講演をしてほしい」などご要望に合わせて、講師を派遣いたします。

講師派遣のご要望の際には、〇ページ「その他の講師派遣」申込書にご記入の上、下記のお問い合わせ先までFAX または E-mail にてお送りください。

なお、その他の講師派遣に係る講師料は有料となりますので、あらかじめご了承ください。

1 ご留意いただきたいこと

- ・ 講師料はお問い合わせください。別途交通費もご負担いただきます。
交通費の計算は、申込者様所属の規程に基づき、お願いします。
 - * 規程がない場合、本学規程で対応しますので、お問い合わせください。
 - ・ 本学から会場までの往復に要する交通費をご負担いただきます。
 - * * 交通事情等により現地宿泊が必要となる場合は、申込者様側で宿泊施設を予約し、その料金（素泊まり料金）を直接宿泊施設にお支払いください。
- ・ 会場の手配、参加者への開催周知は申込者様側でお願いします。なお、本学を会場としてお貸しすることもできます（有料）。
- ・ 政治、宗教、営利を目的として実施する場合、もしくは、政治・宗教・営利を目的とした催しと一体的に実施する場合はお断りします。
- ・ 公共性の高い保健・医療・福祉関係の方を優先的にご受けし、それ以外の方はご相談に応じます。
- ・ 開催日や時間についてはご相談に応じますが、教員の業務の都合上ご希望に添えない場合があります。

2 お申込み期間

令和元年度のお申込みは、令和元年 11 月 29 日（金）まで受付けます。開催希望日の 60 日前までにお申込みください。

申し込みの前にお問い合わせいただくことも可能です。

※本学ホームページ「三重県立看護大学＞地域交流センター＞その他の講師派遣」では、「その他の講師派遣」申込書がダウンロードできます。

※希望の教員名についてはなるべくご記入いただきますようお願いします。

各教員の担当授業科目は、本学ホームページ「三重県立看護大学＞大学案内＞教員一覧」、各教員の現在の研究課題は、三重県立看護大学ホームページ「三重県立看護大学＞大学案内＞教員一覧＞教員個人名」からご確認いただけます。

※尚、申し込み後 1 か月を過ぎても、本センターからの返事がない場合は、お手数をおかけしますが、お電話にてご確認くださいませようお願いします。

3 お問い合わせ先

三重県立看護大学 地域交流センター

〒514-0116 三重県津市夢が丘 1 丁目 1 番地 1

TEL/ FAX (059) 233-5610

E-mail : rc@mcn.ac.jp

ホームページ//三重県立看護大学＞地域交流センター＞その他の講師派遣

令和元年度「その他の講師派遣」申込書 三重県立看護大学地域交流センター

※希望するテーマに該当する講座がないご依頼の場合に、ご使用ください。有料でお受けします。

申込書記入日 令和 年 月 日

機関・団体名称		分類		医療機関・行政機関・社会福祉機関・ 教育機関・NPO法人・専門職団体・ ボランティア団体・その他()	
連絡先	担当者名				
	住所	〒	電話		
	FAX		E-mail		

*申込書にご記入いただいた個人情報につきましては、本事業決定通知書の送付や本事業実施に向けての打ち合わせに使用させていただきます。その他の用途に使用することはありません。

講師派遣の希望内容	希望日時 第1～3	① 令和 年 月 日 () 時 分 ～ 時 分 ② 令和 年 月 日 () 時 分 ～ 時 分 ③ 令和 年 月 日 () 時 分 ～ 時 分		
	希望 会場名			参加予定人数 名
	会場 所在地			参加者の内訳 (例：看護師 30 名、 保護者 30 名、高校 2 年生 30 名など)
	希望する 教員氏名		テーマ名	
具体的内容 *別紙添付可		*その他ご希望がありましたらご記入ください。		

.....
以下は地域交流センター使用欄

三重県立看護大学地域交流センター「その他の講師派遣」決定通知書

ご依頼いただきました事業の担当教員は、下記の通り決定しましたのでお知らせします。

令和 年 月 日

決定事項	テーマ名				
	開催日時	令和 年 月 日 () 時 分 ～ 時 分			
	職名 教員氏名		教員 連絡先		

上記の教員にご連絡のうえ、詳細な打ち合わせを行ってください。ご不明な点がございましたら下記の連絡先までご連絡ください。

【連絡先】 三重県立看護大学地域交流センター

〒514-0116 津市夢が丘1丁目1番地1

TEL/FAX (059) 233-5610

E-mail : rc@mcn.ac.jp

3)「施設単位看護研究支援」のご案内

■施設単位看護研究支援事業とは

看護研究に取り組んでおられる施設単位を対象とした支援で、看護研究を行う看護職の複数のグループ又は個人に対し、本学の教員が看護研究のプロセスに沿った指導、施設内における研究支援体制構築への支援、研究に対する助言等を行います。

■研究支援期間

研究支援決定日から平成32年3月31日（最長）まで

■研究支援の方法

1回につき3時間の研究支援（1回当たりの指導件数は、最大6件を目安）×年4回を標準とします。研究支援期間が長期になりますので、計画的に進めていただきますようお願いいたします。

担当教員が貴施設に出向いて支援しますので、支援場所の設定等の事前調整をお願いします。支援の日程は、担当教員と直接相談して決めてください。

■支援料金について

- ・支援料金「講師料＋交通費（本学旅費規程に基づき算定）」は、全ての支援が終了したことを本センターが確認した後に、一括して請求いたします。本センターから請求書が届き次第、支援料金を本センターが指定する口座へお振込ください（振込手数料は貴施設が負担願います。）
- ・講師料は、年間4回（1回当たり3時間）の指導を標準として算定した額（12万円（税別）。担当教員の職位に関わらず一定額となります。）となります。
なお、実際の支援時間が、標準支援時間（3時間）を下回った場合でも講師料は減額しませんので、ご承知おき願います。ただし、やむを得ない事情により支援回数が3回以下となった場合は、講師料を減額（3万円×減少回数）いたします。
- ・支援業務に研究発表会に係る審査及び講評は含まれませんので、ご留意ください。
「研究発表会に係る審査及び講評支援業務（研究発表会支援）」は、別途案内いたします。
- ・やむを得ない事情等により、担当教員が現地において宿泊する必要がある場合は、貴施設において宿泊施設を予約いただくとともに、当該宿泊料金（素泊まり料金）をご負担いただきますようお願いいたします。
- ・平成31年10月に消費税率が引き上げられた場合における講師料に係る消費税及び地方消費税については、全ての支援が終了した時点における消費税率を採用いたします。

■ ご了解いただきたいこと

- ・各研究は、各自もしくは施設にて主体的に進めていただくこと。
- ・研究を進めるにあたり、基本的な看護研究の研修を修了した方がみえることが望ましい。
- ・担当教員は、特定の領域に所属しておりますので、全ての領域に精通している訳ではございません。担当教員の専門領域でない研究に対しては、具体的な看護の内容について対応しかねる場合があります。
- ・担当教員については、ご希望に添えない場合があります。また、本センターの取り決めにより、同一の担当教員による上限支援期間は2年となります。

■ お申込み方法

- ・所定の申込用紙により本センターまで、E-mail、郵送、又はFAXのいずれかでお申し込みください。申込用紙は、本学ホームページ（三重県立看護大学＞地域交流センター＞看護研究支援＞施設単位看護研究支援）からもダウンロードできます。
- ・申込みの締切期日は、平成31年2月28日（木）とさせていただきます。

■ お申込みから指導終了（料金請求）までの流れ

- ① 申込用紙に必要事項を記載のうえ、本センターまでお申し込みください。
- ② 本センターから担当教員決定通知書をお送りします。（4月中旬までの送付を目途）
- ③ 貴施設と担当教員との間で支援日程等を調整された後、研究支援開始となります。
- ④ 全ての支援終了後、支援確認書（所定様式）を本センターあて提出ください。
- ⑤ ④の支援確認書を基に、本センターから指導料金を請求いたします。

■ お問い合わせ及びお申込み先

〒514-0116 三重県津市夢が丘1丁目1番地の1

三重県立看護大学 地域交流センター

TEL/FAX 059-233-5610 E-mail: rc@mcn.ac.jp

平成31年度 三重県立看護大学地域交流センター「施設単位看護研究支援」申込書

申込〆切 : 平成31年 2月 28日(木)

施設名						
担当者連絡先	住所	〒				
	担当者					
	電話		FAX		E-mail	

*申込書にご記入いただいた個人情報につきましては、施設単位看護研究支援決定通知書の送付や支援実施に向けての打ち合わせに使用させていただくものであり、その他の用途に使用することはありません。

支援を希望する 研究テーマ数	件 (MAX 6 件まで)
研究内容 (各テーマ名をお書きください。 別途、資料添付可)	
*支援希望教員名 (あればご記入ください)	

*支援希望教員については、ご希望に添えない場合があります。また、2年以上同じ教員は継続できませんのでご了承下さい。

.....
 以下は地域交流センター使用欄

三重県立看護大学地域交流センター「施設単位看護研究支援」決定通知書

ご依頼いただきました施設単位看護研究支援について、支援教員を、下記のとおり決定しましたのでお知らせします。

年 月 日

決定事項	施設名		
	支援教員名		
	支援教員連絡先	TEL :	E-mail :

上記の支援教員にご連絡のうえ、日程、内容、方法等、詳細な打ち合わせを行ってください。
 ご不明な点がございましたら下記の連絡先までご連絡ください。

【連絡先】 三重県立看護大学地域交流センター

TEL/ FAX (059)233-5610 E-mail : rc@mcn.ac.jp

4) 令和元年度「看護研究発表会支援」のご案内

■ 看護研究発表会支援とは

施設等の看護研究発表会における講評・審査を担当します。県内の医療機関、行政等に勤務される皆さまからのお申込みに対し、本学教員がお伺いし支援します。

■ 目的

三重県内の看護職員の研究的思考の育成、向上を図ることを目的とします。

■ 支援対象

三重県内にある医療機関、行政等で、5 題以上の研究発表がある看護研究発表会

■ 支援料金

- ・講師料および交通費（本学から発表会会場まで）をご負担いただきます。詳しくは下記までお問い合わせください。
- ・現地宿泊が必要となる場合は依頼者側で宿泊施設を予約ください。なお宿泊料金（素泊まり料金）は、直接宿泊施設にお支払ください。

■ ご留意いただきたいこと

- ・会場の手配、参加者への開催の周知は依頼者側でお願いします。
なお、本学を会場としてお貸しすることもできます（有料）。
- ・当日の講師の役割は看護研究発表会の発表に関する講評・審査のみとさせていただきます。

■ 申し込み方法

- ・裏面の申込用紙、または本学ホームページ「三重県立看護大学＞地域交流センター＞看護研究支援＞看護研究発表会支援」の「看護研究発表会支援」申込書をダウンロードいただき、本センターまで、E-mail、FAX、郵送のいずれかでお申し込みください。
- ・申込み締め切りは令和元年 11 月 29 日（金）です。開催希望日の 60 日前までにお申し込みください。

■ お申し込みから実施までの流れ

- ① 申込書に記載のうえ、本センターまでお申し込みください。
- ② 担当教員を決定し、本センターから決定通知書をお送りします。
- ③ 詳細については、担当教員と直接打ち合わせを行ってください（参加人数など、お申し込み内容に大きな変更があった場合は、本センターにもご連絡ください）。
- ④ 研究抄録を、開催 1 週間前までに担当教員にお送りください。
- ⑤ 発表会終了後に、本学より講師料と交通費を請求いたします。料金は本学指定の口座への振込によりお支払ください。（誠に恐れ入りますが振込手数料はご負担願います）。

■ 問い合わせ先・申し込み先

〒514-0116 三重県津市夢が丘 1 丁目 1 番地の 1

三重県立看護大学 地域交流センター

TEL/FAX : 059-233-5610

E-mail : rc@mcn.ac.jp

令和元年度 三重県立看護大学地域交流センター「看護研究発表会支援」申込書

申込書記入日 令和 年 月 日

所属機関の名称							
連絡先	所在地	〒					
	担当者氏名						
	電話		FAX		E-mail		

*申込書にご記入いただいた個人情報につきましては、看護研究発表会支援決定通知書の送付や看護研究発表会実施に向けての打ち合わせに使用させていただくものであり、その他の用途に使用することはありません。

開催希望日時 (第1、第2)	① 令和 年 月 日 () 時 分 ~ 時 分 ② 令和 年 月 日 () 時 分 ~ 時 分					
発表会の名称						
開催会場名					参加予定人数	人
会場所在地					会場電話番号	
予定発表演題数	□演 () 題、示説 () 題				*その他希望がありましたらご記入下さい。	
ご希望される 教員名						
発表演題の分野 (各領域や質や量的 研究など) *別途資料添付可						

以下は地域交流センター使用欄

三重県立看護大学地域交流センター「看護研究発表会支援」決定通知書

ご依頼いただきました看護研究発表会の担当教員について、下記の通り決定しましたのでお知らせします。

令和 年 月 日

決定事項	発表会の名称					
	開催日時	令和 年 月 日 ()	時 分 ~	時 分		
	職名・講師氏名		講師連絡先			

上記の講師にご連絡のうえ、詳細な打ち合わせを行ってください。

5) 「看護研究の基本ステップ（遠隔配信）」のご案内

■ 「看護研究の基本ステップ（遠隔配信）」とは

看護研究の基礎講座をシリーズで遠隔配信します。

地理的条件から本学にお越しいただくことが困難な地域の看護職の皆さまを対象とした講座です。

テレビ会議システムを使用して配信するため、受講者の皆さまは、モニター画面を通して、通常の講義と変わらない状況で受講することが可能です。

■ 研修プログラム

回	テーマ	開催日	曜日	時間	講師
1	センター長あいさつ・オリエンテーション	6月27日	木	18:00～18:15	永見 桂子
	看護研究の意義と文献の活用			18:15～19:45	脇坂 浩
2	研究計画の立て方と書き方	7月10日	水	18:00～19:30	大川 明子
3	質的研究	7月22日	月	18:00～19:30	関根 由紀
4	量的研究	7月25日	木	18:00～19:30	長谷川智之
5	統計解析(演習含む)	8月29日	木	18:00～20:00	齋藤 真
6	プレゼンテーション(演習含む)	9月2日	月	18:00～20:00	白石 葉子
7	研究論文作成	9月26日	木	18:00～19:30	玉田 章

■ 遠隔配信先

- ・ 県立総合医療センター 様
- ・ 伊賀市立上野総合市民病院 様

* 上記会場のいずれかで研修を受けていただきます。

■ 料金

- ・ 配信施設：10,800 円
- ・ 配信先以外の参加施設：16,200 円

} (消費税込・7回シリーズ料金)

* シリーズ終了後に本センターより請求書を送付いたします。

* 1名以上何名様のご受講でも同一料金です。

(1名でも受講される場合は、ご所属の施設単位で上記料金をお支払いいただきます。)

■ お申込み方法

令和元年度「看護研究の基本ステップ（遠隔配信）」受講届に記入し、本センターまで、FAX でお送りください。

または、本学ホームページ「三重県立看護大学＞地域交流センター＞看護研究支援＞看護研究の基本ステップ（遠隔配信）」より「看護研究の基本ステップ（遠隔配信）」受講届がダウンロードできますので、E-mail にてお申し込みください。

※尚、申し込み後2週間を過ぎても、本センターからの返事がない場合は、お手数をおかけしますが、お電話にてご確認くださいませようお願いします。

■ お申込み期間

お申し込みは、令和元年5月24日（金）まで受付けます。

申し込みの前にお問い合わせいただくことも可能です。

■ ご留意いただきたいこと

第5回、第6回はパソコンを使用予定です（不要の場合は事前にご連絡いたします）。

受講者の方々は、各自ノートパソコンのご準備をお願いします。

■ 問合せ先・送付先

〒514-0116 三重県津市夢が丘1丁目1番地1

三重県立看護大学 地域交流センター

TEL/FAX : (059) 233-5610

E-mail : rc@mcn.ac.jp

令和元年度「看護研究の基本ステップ（遠隔配信）」受講届

施設名		
おおよその受講希望者人数		人
担当者	役職	
	お名前	フリガナ
連絡先	住所	〒
	電話番号	
	FAX番号	
	E-mailアドレス	

【申込期限】

令和元年5月24日（金）までに下記までFAXしていただきますようお願いします。

お問い合わせ先

三重県立看護大学 地域交流センター
三重県津市夢が丘1丁目1番地1

E-mai : rc@mcn. ac. jp

TEL/FAX : (0 5 9) 2 3 3 - 5 6 1 0

初学者
向き

6) ハウツー看護研究



<目的>

調査や実験によるデータ収集、考察に至る一連の過程を通して、研究を進めるための基礎的な方法を身に付けることを支援します。

<対象>

- 本センターの「看護研究の基本ステップ」もしくは同等の研修を修了している方。
- 原則として、申し込んだコースの全日程に参加できる方。
※ご希望の各コースを受講できます

<費用>

1コース 4945円＋消費税 ＊コース終了時の税率を適用します

<内容>

コース	アンケートコース	インタビューコース	実験・計測コース
日時	1. 10/12 (土) 9:00~12:00 2. 10/12 (土) 13:00~16:00 3. 10/26 (土) 9:00~12:00	1. 8/23 (金) 13:00~16:10 2. 9/6 (金) 13:00~16:10 3. 9/20 (金) 13:00~16:10	1. 12/7 (土) 9:00~12:00 2. 12/7 (土) 13:00~16:00 3. 12/14 (土) 9:00~12:00
担当者	斎藤 真 菅原啓太	浦野 茂 関根由紀	斎藤 真 長谷川智之
テーマ	「質問紙の作成と調査の実施」－職務満足度について考えをさぐる－	「インタビューによる質的研究を行ってみる」	「滅菌物取扱い時における操作しやすい台の高さと人体計測値との関係」
第1回	1. はじめに 2. 調査を行う前に（倫理的配慮を含めた調査研究の注意事項） 3. 調査用紙に用いる尺度 4. 調査用紙の作成：フェースシート、単一回答/選択、複数回答/選択、順位法、数値配分法、SD法、自由記述 5. 調査開始 6. データの入力・集計	1. 質的研究法の内容と特徴 2. 研究課題を作る 3. 研究デザインを考える	1. 実験研究とは 2. 実験研究の紹介 3. 実験を行う前に：倫理的配慮を含めた実験の注意事項
第2回	1. 集計結果の整理、図式化 2. 統計的解析 3. データの検討 4. 結果の整理と考察への展開	1. インタビューガイドを作る 2. インタビューを行う 3. トランスクリプトを作る	1. 実験装置の準備 2. 実験開始：実験協力者への説明と同意、調整法による台の高さの計測、人体計測値の測定 3. データの集計
第3回	1. 論文の作成：目的、方法、結果、考察の記述	1. 分析する 2. 分析結果をまとめる 3. 「発見」を作る	1. データ分析 2. 考察の検討 3. 抄録（学会発表レベル）の作成

<会場・アクセス>

三重県立看護大学
(三重県津市夢が丘1-1-1)

【津駅西口から】

バス：三重交通バス1番のりば（津駅西口）
→「夢が丘団地」行き「看護大学前」

バス停下車 徒歩1分

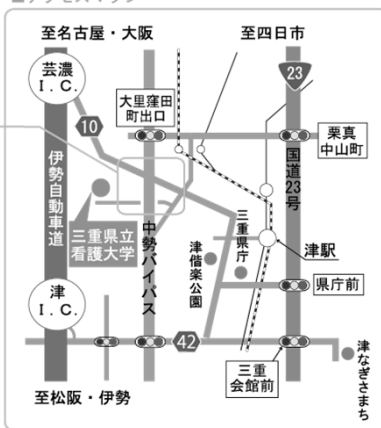
タクシー：津駅西口より約15分



■拡大図



■アクセスマップ



<申込方法>

QRコードを読み込んでいただくと、申込みフォームに移動します。

必要事項をご記入のうえ、送信してください。

または、下記申込書に必要事項をご記入のうえ、申込先へメール、
FAXでお申し込みください。

申込期限 **インタビューコース** 7月31日（水）
 アンケートコース 8月31日（土）
 実験・計測コース 10月31日（木）



【申込先】※送付状不要

FAX : 059-233-5610 E-mail : event.rc@mcn.ac.jp

ハウツー看護研究 受講申込書

フリガナ			所属施設		職業	
お名前						(例) 看護師
連絡先 (送付先)	住所	〒		ご希望の コース ○をつけて ください。	アンケート	
	電話番号				インタビュー	
	メール				実験・計測	
過去もしくは今年度本センターの「看護研究の基本ステップ」を受講したことがありますか？ 令和元年度看護研究の基本ステップを受講頂いた方は、本コースにお申込できます。 ※「ない」方は下記にお答えください。					ある ・ ない 今年度受講予定 ※どちらかに○をつけてください。	
「ない」方にお聞きします。 今まで研究方法についてどのような研修を受けたことがありますか？ 具体的にご記入ください。						

<お問い合わせ先>

三重県立看護大学 地域交流センター

TEL : 059-233-5610 (平日9時~16時) E-mail : rc@mcn.ac.jp

編集後記

令和元年度三重県立看護大学地域交流センター年報が完成しました。ご協力いただきました皆様に感謝いたします。

今年度も、本学全教員が地域の皆様とともに、多くの事業に取り組んでまいりました。当センターの講師派遣事業は、平成 21 年度に始まり 11 年が経過しました。おかげをもちまして、県民の皆様にも本事業が周知されてまいりました。事業開始当初は「出前授業」「公開講座講師派遣」「その他の講師派遣」の 3 事業を展開しており、平成 27 年度からは「出前講座」「その他の講師派遣」事業の 2 事業にしました。皆様からの派遣申し込みも当初 3 事業合わせて 37 件でしたが、今年度は 2 事業で 104 件へと増加しており、教育・研究の成果を地域に還元できていると感じております。

一方「教員提案事業」では、各教員から提案された様々な事業を関係機関と協働し、地域の皆様との交流をとおして進めることができました。また、認定看護師教育課程「認知症看護」も 3 年目を迎え、毎年約 30 名の研修生が修了され、研修修了生は県内外で活躍されておられます。さらに看護職を対象とした「看護研究支援事業」「受託事業」など、教育支援事業も充実してきております。

これらの事業を進めるにあたり関係各位、地域の皆様に多大なご理解・ご協力いただきましたことをここにあらためて感謝申し上げます。

今年度も、各事業内容を、「教員提案事業」「卒業生支援事業」「受託事業」「認定看護師教育課程」「地域交流センター企画事業」「連携」の 6 項目にまとめ、資料と共に本年報に収録いたしました。

本年報を通じて、多くの皆様に当地域交流センターの活動と地域貢献について、さらなるご理解・ご協力をいただければ幸いです。

(担当：大川)

三重県立看護大学
地域交流センター
令和元年度
Vol. 22

編集・発行	三重県立看護大学地域交流センター
住 所	〒514-0116 三重県津市夢が丘 1 丁目 1 番地 1
発行年月	令和 2 年 3 月

* 本書の著作権は公立大学法人三重県立看護大学が保有します。